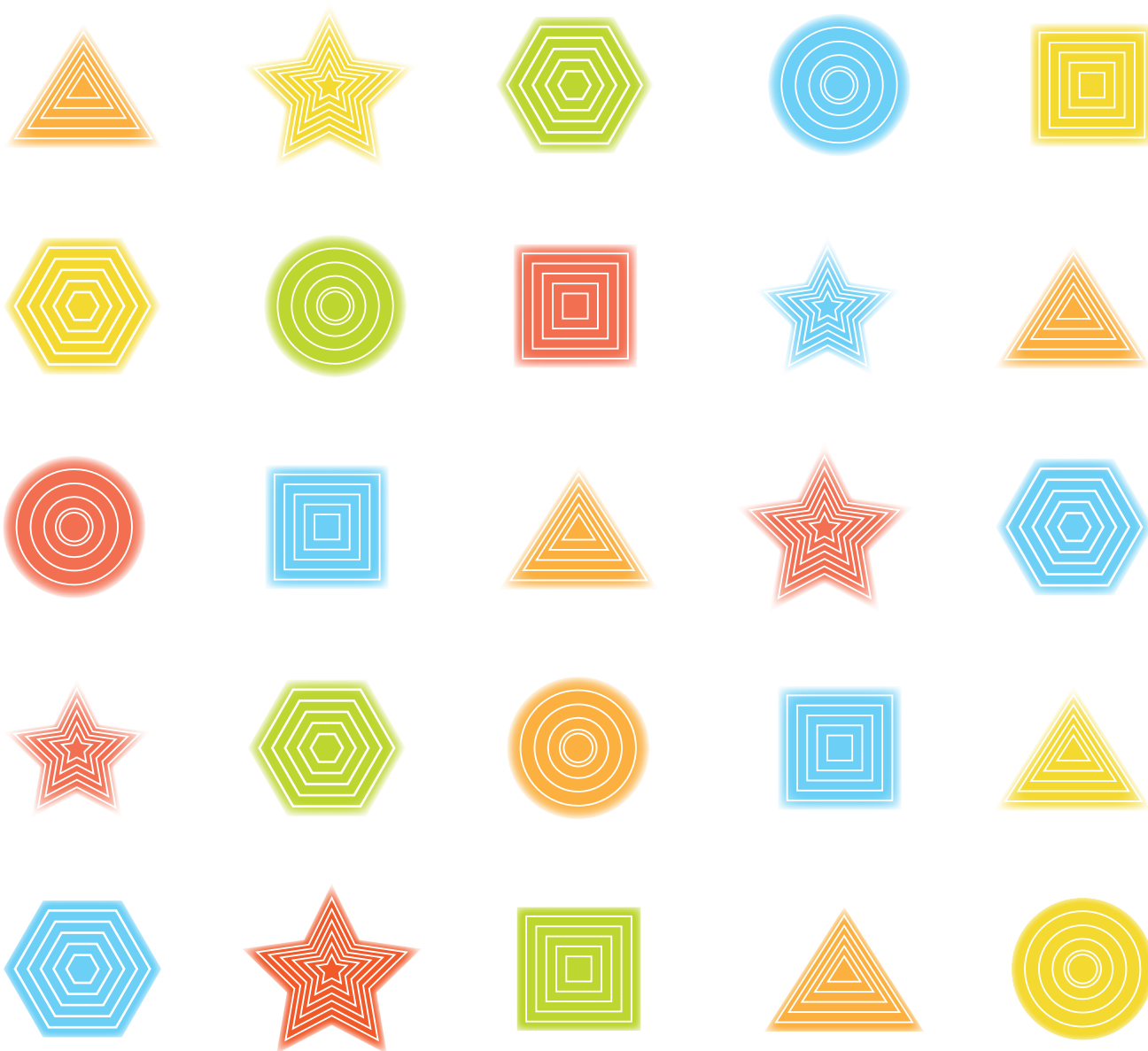


令和元年度

障害者による 文化芸術活動推進事業 事例集



はじめに

文化庁では、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づく国の基本的な計画に沿って、鑑賞の機会の拡大・創造の機会の拡大・作品等の発表の機会の確保など、障害者による文化芸術活動の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進事業に取り組んでいます。

施策の推進方法として、障害者等による鑑賞の機会や創造の機会の拡大、作品等を発表する機会の創出などを図る取組を実施する団体に事業委託をしており、この度、令和元年度の各団体の取組を事例集としてとりまとめました。

【鑑賞機会の拡充に向けた取組】

障害者が芸術に触れ、自らも芸術活動に参加するという体験機会の拡充を中心に、障害者が必要な支援を受けて文化芸術を鑑賞する機会の拡充に向けた取組を実施

【創造機会の拡充に向けた取組】

障害者が自ら芸術を創造することができる環境を整備するため、次の取組を実施

- 障害者に対する創造の場の確保や情報提供などの支援
- 創造活動を支援するための人材の養成 等

【発表機会の拡充に向けた取組】

障害者が制作した魅力ある作品など、日本の障害者の優れた文化芸術活動の成果を広く発信することに対して支援を実施

この事例集を関係者が活用することで、より一層、障害者による文化芸術活動の推進が図られることを願うものです。

文化庁地域文化創生本部

- 4 公益財団法人 北海道演劇財団
劇のため「ぐりぐりグリム～シンデレラ」舞台美術製作プロジェクト
- 6 特定非営利活動法人 アートステージ空知
太鼓集団夢ファミリー「ふれ愛」第1回公演
- 8 一般社団法人 MMIX Lab
「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2019
- 10 認定特定非営利活動法人 ぼぞーる太白社会事業センター
認定NPO法人ビートスイッチ アートミーツ事業「視覚障がい者対話型鑑賞 IN 十和田市現代美術館」
- 12 NPO 法人 アートワークショップすんぷちよ
従来の演劇作品では芸術体験が困難な自閉症や重度心身障害の子どものための多感覚演劇創作と上演事業
- 14 一般社団法人 エル・システムジャパン
ホワイトハンドコーラス：聴覚障害・視覚障害の子どもたちを中心とした音楽活動で社会共生を目指す事業
- 16 特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン
美術館における聴覚障害者の鑑賞環境整備事業
- 18 特定非営利活動法人 日本バリアフリー協会
障がい者の舞台芸術コンクールの地方開催による才能の発掘と育成
- 20 公益社団法人 全国公立文化施設協会
劇場・音楽堂等バリアフリー化推進プロジェクト
- 22 株式会社 朝日新聞社
「声の力」プロジェクト
- 24 クリエイティブ・アート実行委員会
「多様性を育む美術プロジェクト」— 障害のある人達との美術創造活動&ファシリテーションの方法を学ぶワークショップ
- 26 公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団
リラックスパフォーマンス「白鳥の湖」&「迷子の青虫さん」
- 28 公益社団法人 日本劇団協議会
やってみようプロジェクト
- 30 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
プロの音楽家を介したインクルーシブ体験の創造
- 32 公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
MOT サテライト2019「ひろがる地図」
- 34 社会福祉法人 トット基金 日本ろう者劇団
国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2019
- 36 特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク
観劇サポートガイドブック改訂および各地フェスティバル等におけるアクセシビリティ取り組みへの助言活動
- 38 Palabra 株式会社
バリアフリー演劇の制作・公演を通じた、障害者の平等参加型の共生社会実現へ向けた芸術活動
- 40 公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
The Garden「ガーデン」
- 42 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から生まれるパフォーマンス作品の創作と発表
- 44 特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク
オイルカート・メソッドを学ぶ—知的障がいや重度重複障がいの子どものための多感覚演劇を創る人材育成事業
- 46 横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム事務局(中核となる団体：特定非営利活動法人STスポット横浜)
横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業

- 48 **公益財団法人 金沢芸術創造財団 金沢 21 世紀美術館**
「誰にとっても来館しやすい、楽しい美術館はどんな場所？」～聴覚障害者と共に紹介する金沢 21 世紀美術館～
- 50 **特定非営利活動法人 若狭美& B ネット**
熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業
- 52 **特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ**
共生社会実現のための「表現未満、」プロジェクト
- 54 **認定特定非営利活動法人 ポパイ**
CONFUSION INCLUSION ～ウゴクカラダ、海をつなぐ～
- 56 **障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会**
障害者の文化芸術国際交流事業「2019 ジャパン×タイ プロジェクト」
- 58 **特定非営利活動法人 障害者芸術推進研究機構**
「障害のある人の芸術作品の海外発信～展覧会からマーケット開拓まで」
- 60 **社会福祉法人 素王会アトリエ インカーブ**
障がい者の芸術表現を「アート市場」で問う
- 62 **一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構**
舞台鑑賞サービス ショーケース&フォーラム 2019
- 64 **一般社団法人 日本現代美術振興協会**
Exploring- 共通するものからみつける芸術のかけら
- 66 **公益財団法人 日本センチュリー交響楽団**
日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート
- 68 **社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会**
障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト)
- 70 **NPO法人 DANCE BOX**
こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)
- 72 **一般財団法人 たんぽぽの家**
障害のある人の表現と知的財産権に関する学習・啓発のためのハンドブックの製作と普及
- 74 **一般財団法人 たんぽぽの家**
NEW TRADITIONAL: 障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展
- 76 **認定特定非営利活動法人 コミュニティリーダーひゅーるぼん**
障がいのある人と共に創る劇団「おきらく劇場ピロシマ」～福祉・芸術・社会をつなげる演劇事業
- 78 **社会福祉法人 明日へ向かって**
障がいがある方に向けての「総合的な表現の場」の創出～音楽ワークショップを通して～
- 80 **一般社団法人 パラカダンス**
パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業
- 82 **公益財団法人 佐世保地域文化事業財団**
地域に住む障がい者にやさしいバリアフリーなホールづくり
- 84 **公益財団法人 宮崎県芸術文化協会**
天鈿女命(あめのうずめのみこと)育成講座
- 86 **一般社団法人 琉球フィルハーモニック**
障害者と文化芸術による共生社会の推進事業「ゆいまーるミュージックプロジェクト」
- 88 **一般社団法人 楽友協会おきなわ**
音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証
- 90 **特定非営利活動法人 サポートセンターセントミ**
第 13 回 愛音楽 (アネラ) 音楽祭～愛音楽 (アネラ) アジマーフェスタ～

事業名

劇のたまご「ぐりぐりグリム～シンデレラ」 舞台美術製作プロジェクト

団体名

公益財団法人 北海道演劇財団

所在地：北海道札幌市

URL：http://www.h-paf.ne.jp/

事業概要

アートで子どもの療育をサポートする児童デイサービス「ペンアート」と協働し、そこで活動する発達障害の子どもたちを対象に舞台美術ワークショップを開催。2012年から開催されている「札幌演劇シーズン」で劇のたまご「ぐりぐりグリム～シンデレラ」の舞台美術を製作し、上演した。観劇に来た未就学児から小学生までの多様な国籍の子どもたち、児童養護施設で過ごす児童などさまざまな環境にある子どもたちも参加して、開演前に毎回異なった舞台美術を完成させた。

障害のある子どもと障害のない子どもが協働して舞台美術を 製作作業を通じての交流が、自信につながった

実施内容

発達障害の子どもたちが舞台美術を製作 観劇に来た多様な国籍・環境の子どもと協働して舞台を完成

札幌市の児童デイサービス「ペンアート」で活動する発達障害の子どもたちを対象に舞台美術ワークショップを開催。「札幌演劇シーズン2019-夏」(クリエイティブスタジオ)と清田区民センターで上演した劇のたまご「ぐりぐりグリム～シンデレラ」の舞台美術を製作しました。また、開演前には観劇に来た未就学児～小学生までのさまざまな国籍の子どもたち、多様な環境にある子どもたちも参加して、力を合わせて舞台美術を完成させ、実際に舞台上で使用しました。

劇のたまご「ぐりぐりグリム～シンデレラ」
舞台美術製作プロジェクト

●ワークショップ

開催日：2019年6月19日～8月24日

場所：ペンアート、ペンアート北野、扇谷記念スタジオ・シアターZOO

参加者数：399名

●公演

開催日：2019年8月12日、17日～24日

場所：①クリエイティブスタジオ(札幌市民交流プラザ)
②札幌市清田区民センター

観劇料：①一般2,000円 学生1,000円
小学生500円(未就学児無料)
②一般1,500円 中高生1,000円
小学生500円(未就学児無料)

観客数：①302名(1日1回公演)
②878名(8日間9回公演)



開演前には、観劇に来た子どもたちと障害のある子どもたちが協働して舞台美術を完成させた

事業の効果

他者とのコミュニケーションが不得手な障害のある子ども それを個性として演劇の専門家が作品にまとめる

障害のある子どもと障害のない子どもが共通の課題に向き合う機会は多くはありません。演劇とは多様な人たちの協働で、多様な表現を実現できる媒体です。演劇のこの特徴を生かし、発達障害の子どもが他者とのコミュニケーションを不得意とするのも一つの個性とし、それ

ぞれの子どもたちの表現を舞台の専門家たちがまとめ、地域の子どもたちとの芸術交流を促しました。また、劇場という公的空間で多くの人たちに見てもらうことが、子どもたちの達成感と自信、互いに対する信頼へとつながると期待し、企画・上演しました。

障害のある人の芸術が福祉の世界で完結せず 社会に新しい芸術観・価値観を創出できた

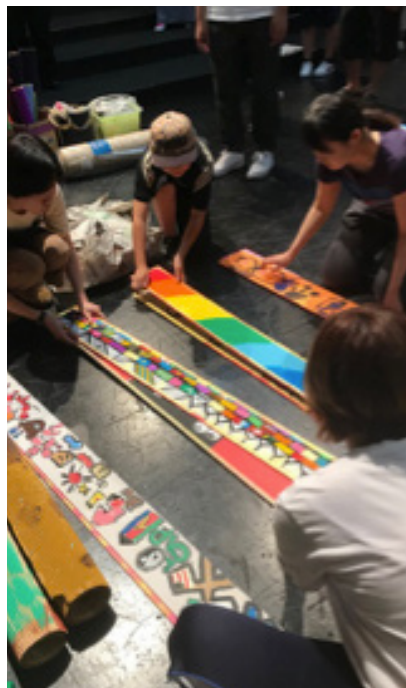
ワークショップを重ねることで、互いの距離感を縮め、作品と舞台への理解を深める努力をしました。また、当日舞台上で使用する道具（豆や木の葉）を、障害のある子どもたちが指導して観劇に来た子どもたちと一緒につく

り、その日の舞台を完成させました。会場に集まった障害のある子どもと障害のない子どもの交流が自然に行われるように工夫しました。

演劇に特化した財団のミッションを再認識 今後も文化芸術による共生社会の実現を目指したい

演劇に特化した公益法人としての当財団のミッションをあらためて明確にしてくれた事業でした。今後、さまざまな障害についての知識を広げ、ワークショップの方法も研究していきたいと思えます。また、協働する団体の幅を広げ、舞台美術への参加に限らず、演劇の創造作業

全般において、障害のある子どもたちと障害のない子どもを加えて新しい演劇の創造を行うことで、文化芸術による共生社会の実現に向けた取組をさらに前進させたいと考えます。



札幌の児童デイサービス「ペンアート」で活動する発達障害の子どもたちに舞台美術ワークショップを実施。当日舞台上で使う道具は、観劇に来た子どもたちと障害のある子どもたちが一緒に製作した

事業名

太鼓集団夢ファミリー「ふれ愛」第1回公演

団体名

特定非営利活動法人 アートステージ空知

所在地：北海道深川市

URL：http://sorachionkan.blog69.fc2.com

事業概要

平成30年に結成された障害のある人による表現活動集団「夢ファミリー」では、和太鼓奏者を講師に迎え、十数回のワークショップを重ねてきた。本公演はその成果を披露する創作太鼓の発表会である。舞台づくりは障害のある人をサポートする大学生とともに、「待つ」をキーワードに実施。講師や活動の支援者たちと障害のある人との交流は、それぞれに新しいものの見方をもたらし、考え方を深めるきっかけともなっている。また、障害のある人と障害のない人の垣根を低くする取組にもつながっている。

講師も地域の人々も意識が変わった 自立支援活動から生まれた創作和太鼓プロジェクト

実施内容

障害のある人による表現活動集団が、ワークショップを重ね、創作太鼓を発表

平成30年、障害のある人と障害のない人のコラボレーションによる演劇を行う「夢プロジェクト」を母体に、障害のある人による表現活動集団「夢ファミリー」を結成し、太鼓演奏に取り組んでいます。これまで和太鼓奏者のしんたさんを講師に迎え、1日2時間（障害のある人が集中できる時間）、2日連続のワークショップを5回重ねてきました。その集大成として実施したのが、この創作太鼓の発表公演です。障害のある人とふれあうのが初めてだった講師や、支援サポートスタッフ（大学生・社会人・施設職員）たちは、舞台づくりを進めるうえで戸惑うことも多くありました。しかし、障害のある人との交流のなかで多様なものの見方や考え方を知ることができるなど、それぞれにとって貴重な成長の機会となりました。また、障害のある人・支援サポートスタッフが「待つ」という共通の目標に向かった結果、障害のある人自身が自分で考え、セリフをつくり、発表できるようになるなど、不安が自信と確信に変わっていきました。適切な指導とワークショップを繰り返すなかで、仲間と協力する姿勢が生まれ、全員で新曲に挑戦することもできました。今回は雨竜高等養護学校生をゲストに迎え、点が

輪になる広がりもなか、公演を大成功で終えることができました。

太鼓集団夢ファミリー「ふれ愛」第1回公演

開催日：2020年2月2日

場所：拓殖大学北海道短期大学スノークリスタルホール

参加者数：200名

参加費：500円（当日800円）



事業の効果

障害のある人と障害のない人の垣根を低くする取組につなげる

平成28年、NPO法人アートステージ空知、深川デイプレイスふれあいの家、拓殖大学北海道短期大学庄内ゼミの三者を中心に、障害のある人の自立支援・地域との交

流などを目指し、障害のある人と障害のない人の共生共創の舞台を創る「夢プロジェクト」が発足しました。金沢市から演出家を招聘し、障害のある人と障害のない人



のコラボレーションによる演劇を3回制作。3年目には障害のある人の希望を受け入れ、周囲のサポート体制を整えたうえで「夢ファミリー」という表現集団が結成されました。「夢ファミリー」は和太鼓のワークショップを重ねながら、「夢公演 2019」という名称で障害のある

人の太鼓公演、保育園児とコラボレーションした舞台などを行ってきました。今年度の活動の集大成でもある本公演は、障害のある人と障害のない人の垣根を低くする取組につながる新たな目標となるように、という思いを込めて企画・実施されました。

障害のある人との舞台づくりを通し 表現者も支援者も新たな見方、考え方に気づきがあった

和太鼓奏者のしんたさんや、コラボレーションした音江中央保育園の園児・先生たちには、これまで障害のある人との接点はありませんでしたが「夢公演 2019」や「ふれ愛」の公演を通して、自身の思いやスタンスに変化が生じたといいます。サポートの大学生たちも障害のある人と接することで、さまざまな経験をし、ものの考え方

も深めることができ、人によっては人生設計に影響したケースもありました。障害のある人にもスタッフにも、皆に目に見えない効果が出ています。

また、公演に向け、近隣の雨竜町にある雨竜高等養護学校の太鼓クラブとのつながりができるなど、地域との新たな連携も生まれました。

今後の課題は「障害者アート」の枠組を超えること

今回、地域との新たなつながりができたとはいえ、障害のある人と支援サポートスタッフだけの公演となってしまったことは、「障害者アート」の枠組を払拭するに至らず、考えれば考えるほど、今後の課題として再考する必要があると感じています。そこで、障害のある人と一緒に同じ目的をもってともに生き、ともに活動しようと、雨竜・滝川にある障害のない人の太鼓集団に声をかけ、

障害のない人の太鼓集団と新プロジェクトを始動

一般公募の社会人も含めて「希望プロジェクト」を立ち上げました。障害のある人99名、プロジェクト実行委員36名、支援団体（太鼓集団）約80名、総勢215名の輪をつくり、3年計画をスタートさせます。令和2年11月11日には「共に歩きだそう『ふれあいまつり』感謝をありがとう」を開催する予定です。



ワークショップや練習を繰り返し、雨竜高等養護学校生という強力なゲストに恵まれ、太鼓集団「夢ファミリー」の第1回公演は大成功だった

事業名

「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」 2019

団体名

一般社団法人 MMIX Lab

所在地：宮城県仙台市
URL：http://mmix.org

事業概要

障害のある人の創造的な表現活動の制作の場創出及び、アーティストと障害のある人とのコラボ制作と展示を実施した。支援者のクリエイターなどとともに、支援の交流拠点や、ワークショップ、展示などができる拠点を整備。また、復興公営住宅の住民にクリエイターらと障害のある人が開発したアートグッズのお披露目をしたほか、アートワークショップなども実施した。ほかに石巻、仙台で多角的な芸術文化活動を通して、アートによる社会包摂活動を行った。

障害のある人の表現活動の拠点をづくり、アーティストとも連携 アートによるインクルーシブ社会の実現を目指す

実施内容

全ての人々を優しく包み込む社会の実現に向けワークショップ・展示を開催

アートを通して全ての人々を優しく包み込む社会を実現することを目的とする「アート・インクルージョン2019」。①では、障害のある人や市民向けワークショップを開催。制作物は、石巻の「コトのアート研究所」で展示しました。②は障害者施設（アート・インクルージョン）での協働制作や市民向けワークショップ（だれでもクリエイター vol.5）を開催。③は仙台市と協働で、アーティストと障害のある人や市民が参加型ワークショップで巨大な壁の作品を制作し、障害のある人と制作したアートグッズなどを紹介しました。

①「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」

開催日：2019年10月5日

場所：仙台市太白区長町駅前広場

ゲスト：パルコキノシタ（現代美術家）

参加者数：100名 参加費：無料

②「開発好明とアート・インクルージョンの表現者」

開催日：2020年1月6日～2月1日

場所：アート・インクルージョン「Ai ギャラリー」

参加者数：720名 参加費：無料

③「門脇篤とアート・インクルージョンの表現者」

開催日：2020年1月26日

場所：仙台市太白区文化センター B1 展示ホール

ファシリテーター：門脇篤（現代アーティスト）

参加者数：386名 参加費：無料





事業の効果

継続的な支援をするためにも障害のあるアーティストの制作・発表拠点が必要だった

アート系の福祉作業所ではユニークな個性あふれる作品が多数生み出されていますが、専門的な知識や技術をもった支援員は少なく、魅力的な作品が社会の中で活かされる環境は整っていません。また、工賃も低いのが現状です。一方、表現者には制作する場所や発表する場所

が必要ですが、活動拠点や活動資金がないという課題があります。そういった活動や発表の拠点をづくり、アーティストと障害のある人が協働で制作や商品開発を行うことにより、障害のある人に対する継続的な支援が可能になると考えました。

クリエイターや地元産業と連携し、支援活動を継続したい

クリエイターなど支援者の活動の交流拠点を整え、継続的に使えるようにすること。デザインや広報PR、グッズ開発など、専門家の創造的支援を必要としているアート系福祉作業所と、クリエイター、地元産業とのマッチ

ングといった連携協働事業を行うこと。それらの活動を障害のある人への支援につなげていくことにより、持続可能な支援活動ができるようになると期待されます。

まだ知られていない「アートによる社会包摂」の普及を図るために

アートによる社会包摂（インクルーシブ）といっても、それがどのようなものかイメージできる人は多くありません。この考え方を普及させていくには、アーティストやデザイナーなどのクリエイターが障害のある人と協働で行う社会包摂のプロジェクトを継続的に行っていく必

要があります。そのためにはまず、表現者の活動交流拠点を整え、継続的に使えるようにすることが重要だと考えます。また、アート系福祉作業所から生まれた作品を社会に活かす方法を模索する必要があります。



- 1. 2. 「開発好明とアート・インクルージョンの表現者」 仙台にて（2020年1～2月）
- 3. 「パルコキノシタとアート・インクルージョンの表現者」 仙台にて（2019年10月）
- 4. 「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」 拠点整備 石巻にて（2019年10月～）

事業名

認定NPO法人ビートスイッチ アートミーツ事業 「視覚障がい者対話型鑑賞IN十和田市現代美術館」

団体名

認定特定非営利活動法人 ばざーる太白社会事業センター

所在地：宮城県仙台市

URL：http://npobtswc.p2.bindsite.jp/main

事業概要

先天盲や中途視覚障害のある人と障害のない人が一緒に、小グループを構成して、絵画や彫刻、現代アートなどの鑑賞を対話型で行う活動。障害の有無にかかわらず全ての人を楽しめるアート鑑賞法として理解されるよう継続的に活動している。今年度は、国内外の現代アート作家による、触ることのできる作品や音の出る作品が収蔵されている十和田市現代美術館で対話型鑑賞を実施。対話による作品の理解に加え、障害のない人が触っても気づかないことを視覚障害のある人が気づき、さらに対話が広がり、参加者のアートに対する興味関心が深まった。

視覚障害のある人と障害のない人が 対話しながら現代アートを鑑賞

実施内容

視覚障害のある人と障害のない人を組み合わせたグループで対話しながら現代アートの表現の多様性を体験

対話型で行った鑑賞ツアーへの参加者は計33名（同美術館関係者3名含む）。そのうち、半数が初参加でした。アート作品を前にそれぞれが自分の感じたことを言葉に表し、対話をしながら楽しみ、感覚を共有。鑑賞ルートを2つに分け、スムーズに鑑賞できるよう学芸員の方にご配慮いただき、3時間を超える充実した内容の鑑賞ができました。鑑賞ツアー終了後の「感想トーク」では、「対話型鑑賞の楽しさと現代アートのもつ表現の多様性が対話型鑑賞の幅を広げることにつながり、面白かった」という感想をいただきました。

●美術館までガイド

仙台駅に集合し、視覚障害のある人と障害のない人を組み合わせてグループ分け。公共交通機関を使って同行支援を実施。視覚障害のある人をガイドするのが初めての人には、当事者からアドバイスをを行い、新幹線への乗降、路線バス

の乗り継ぎなど、十和田市現代美術館までの行程のガイドを実施。

●鑑賞ツアー

最初に対話型鑑賞の心得を説明。とくに「対話型鑑賞の【しない】ルール」の解説により、参加者の緊張を緩める。視覚障害のある人1名と障害のない人2名、計3名1グループの対話形式で鑑賞。

●感想トーク

ツアー終了後、感想などを話し交流を深めた。

「視覚障がい者対話型鑑賞 IN 十和田市現代美術館」

開催日：2019年8月24日

場所：十和田市現代美術館

参加者数：33名

参加費：実費負担あり



1.事前にアドバイスをを受けた障害のない人が視覚障害のある人のガイドをして、路線バスを乗り継ぐ 2.障害のある人と行動をともにすると、街のバリアフリー度もよくわかる 3.「スタンディング・ウーマン」（ロン・ミュエック）を前に、対話をする参加者たち

事業の効果

文化芸術を介して障害のある人への理解を深め、視覚障害のある人のアートへの興味を高める

当法人の活動のプロセスとアウトプットをまとめると「当事者に教えてもらう」「当事者に接して、感じ、考え、気づいたことを大切にする」、そして、「支援は当事者のニーズから出発する」となります。同行支援と対話型鑑賞の二本立てを主軸とする本事業では、文化芸術を介した当事者理解を対話型鑑賞によって推進。また、ア

トに対する視覚障害のある人の興味関心を広げることに
よって、障害のある人の社会参加を促していきます。さらには、障害の有無にかかわらず、全ての人を楽しめる鑑賞法として、対話型鑑賞への理解を進めていくことを目指していきます。

障害のない人は視覚障害のある人の「見方」に気づき、視覚障害のある人はアートに対する着眼点を知る

社会的な効果としては、十和田市現代美術館という公的な施設にご協力いただくことで、視覚障害のある人を交えた3人で行う対話型鑑賞法が広がっていくことを期待します。また、参加者への効果としては、障害のない人には視覚障害のある人への理解を深めること、彼らがどこに関心をもっているかという「気づき」を体験するこ

とによって、視覚障害のある人の「見方」に寄り添えるようになることが挙げられます。立体造形などの触れてみる作品を鑑賞する際に、この「気づき」が多く起こります。一方、視覚障害のある人も、障害のない人のアートに対する着眼点を知ることができ、「気づき」の相乗効果が生まれると考えられます。

参加者の半数以上が20歳以下の学生たち 若い世代の対話型鑑賞ガイド体験を増やしたい

当法人の活動は、平成23年より継続しているアートミーツ事業で延べ30回となりました。今回は20歳以下の参加者が半数を超え、全員が視覚障害のある人との交流に関心を示していたこともあり、今後は学生に向けた参加募集に力を入れたいと思います。これを進めるにあ

たっては、学生の自己負担を軽減する支援が必要になるでしょう。若い世代が対話型鑑賞にガイドとして参加し、「感じたこと」「考えたこと」「気づいたこと」を体験して学ぶことで、成長する機会を少しでも多く増やしたいと考えています。



4.学芸員を交えての対話型鑑賞に加え、作品の制作背景などを聞きながらの鑑賞ツアーとなった 5.触ったり座ったり、体感できる作品の前に、対話をすることで感覚を共有 6.対話型鑑賞を、見えない、見えにくい、見えるという隔てのない文化活動として捉え、それを実感できた

事業名

従来の演劇作品では芸術体験が困難な自閉症や重度心身障害の子どものための多感覚演劇創作と上演事業

団体名

NPO法人 アートワークショップすんぷちよ

所在地：宮城県仙台市

URL：http://www.sun-pucho.com

事業概要

じっとしていられない、初めての物や人に会うことが不安、感覚が過敏、視力や聴覚に障害があるなど、障害のある子どもにとって、劇場での演劇鑑賞にはさまざまなハードルがある。本事業では、子どもたちの五感を刺激することで深い演劇体験を提供する「多感覚演劇」を創作、上演。1回の公演の観客は6組と少人数で、3～4人の役者が丁寧で相互的なかわりあい方をした。

触る、嗅ぐ、味わう…

障害の特性にフォーカスした多感覚演劇を上演

実施内容

個々の障害の特徴に合わせた演劇を、相互にかかわりながら少人数で鑑賞

当法人は、自閉症や重度・重複障害のある子どもたちに寄り添った演劇をつくり続けてきた英国劇団オイリーカートからノウハウを学び、障害のある子どもたちを対象とした「多感覚演劇」を上演してきました。今年度はとくに、重度障害のある子どもたちを対象にした演劇を上演。個々の障害の特徴にフォーカスした演出と準備を徹底し、従来の演劇のように物語を追うのではなく、触る、嗅ぐ、味わう、動きを感じるなどの感覚をクローズアップした公演としました。俳優が一方的に上演するのではなく、子どもたちの反応を見ながら相互にかかわっていくことで、深い演劇体験を提供します。また、保護者や施設職員など、子どもをケアする人と事前にコミュニケーションをとり、得意不得意な素材や動き（大きい音や暗いところが苦手、楽器が好き、揺れるものが好きなど）を把握し、演出やかかわり合いに反映させました。

多感覚演劇「ちいさなうみ」

開催日：2020年2月19日、3月4日、26日

場所：放課後等児童デイサービスポピー、西多賀病院、
仙台市内障害児支援施設

参加者数：6組／1ステージ 参加費：無料

対象：上演施設内の方

(3月4日、26日の公演は中止。無観客での動画撮影に切り替え)



事業の効果

ハード面の配慮はあっても、多様な障害に配慮した作品創造はまだ少ない

日本における芸術施設や作品創造の現場では、身体障害のある人に向けたハード面の配慮は増えているものの、創作の段階からさまざまな障害に配慮した取組は多くありません。今年度は、障害のある子どもの中でもとくに

最も演劇鑑賞が難しいといわれる子どもたちのために

当法人はこれまで自閉症の子どもたちを対象とした作品を創作してきました。しかし、障害によって不得意な環境や素材は異なります。今回の事業では、その作品を重度障害のある子どもにフォーカスし、バージョンアップさせています。先が見通せないことに不安を抱く自閉症スペクトラムの子どもたちには、内容を事前を知るこ

一人でも多くの子どもに演劇体験を届けるため、担い手を増やし、細く長く続けたい

この演劇の場合、1回の公演で参加できる子どもの数が6人と、非常に少数です。一人でも多くの子どもたちに作品を届

外出や芸術鑑賞の機会が少ない重複障害のある子どもを対象に、より多くの子どもたちに演劇にふれる機会を届けていくことを目的として、五感を刺激し、反応を見ながら寄り添う多感覚演劇上演を実施しました。

動きや演出など工夫をこらした

ができるハンドブックを用意しました。これによって、最も芸術鑑賞が不得手とされてきた自閉症の子ども、重度障害のある子ども両方に対応した演劇を制作し、今後、上演のたびにノウハウを蓄積することが可能となります。

けるため、この作品を細く長く上演し続けていくこと、また担い手を増やしていくことが重要です。



障害のある子どもたちの個性や得手不得手を把握し演出。子どもたちの反応を見ながら相互にかかわり、深い演劇体験を提供した。

事業名

ホワイトハンドコーラス

聴覚障害・視覚障害の子どもたちを中心とした音楽活動で社会共生を目指す事業

団体名

一般社団法人 エル・システムジャパン

所在地：東京都千代田区

URL：http://www.elsistemajapan.org/

事業概要

当法人は、南米ベネズエラの音楽教育プログラムを礎に国内4カ所で活動しており、東京では、東京芸術劇場との共催による「東京ホワイトハンドコーラス」を行っている。手話をもとに歌詞の世界を表現する「サイン隊」と、発声によって歌う「声隊」がともに舞台上で表現するコーラス活動だ。サイン隊は聴覚障害のある子どもたちを中心に、声隊は視覚障害のある子どもを中心に構成され、共生音楽の実現を目指しつつ、音楽性を高め、美しい表現を追求しながら、新しい芸術活動を確立していく。

聞こえない子どもの「サイン隊」 見えない子どもの「声隊」 ともに音楽を奏でるホワイトハンドコーラス

実施内容

京都・大徳寺で現地の仲間と共演、交流を深めた

発声のコーラス「声隊」と白い手袋をはめて手話で表現する「サイン隊」。その二つが一体となって歌の世界を表現するのがホワイトハンドコーラスです。普段は別々に練習をしていますが、毎週日曜日、合同練習を行いました。聞こえない、聞こえにくい子どもを中心とする「サイン隊」、見えない、見えにくい子どもを中心とする「声隊」、それぞれ重複障害のある子どもや障害のない子どもも一緒に活動してきました。

パフォーマンスには声隊15名、サイン隊5名が参加。現地の聞こえにくい子ども2名も共演し、新しい仲間との交流を深めました。初めてのところで初めての曲に挑戦したこと、仲間と一緒にその場所をつくったこと。それらが喜びや自信につながり、その後の練習への取組姿勢が変わったことは、大きな驚きと収穫でした。

パフォーマンス「歌と手歌」

開催日：2020年1月27日

場所：京都市大徳寺龍光院

参加費：無料

プログラム（楽曲名ほか）

- ・合唱組曲「あめつちのうた」より「空のうた / 樹のうた / 水のうた」（それぞれの歌の前に声隊の朗読あり）
- ・詩集「にじ」（まど・みちおの詩に美智子皇后陛下（当時）が英訳を付した）より「when I sing a song（うたをうたうとき）」 / 「Little Birds（ことり）」
- ・「パブリカ」（NHK 2020 応援ソング）
- ・「キティプラスのパフォーマンス」（竹パーカッション）
- ・（アンコール）「アナ・ミ・バナナ」（ベネズエラの曲・私のバナナという意味）



1. 白い手袋をした「サイン隊」は、聞こえない、聞こえにくい子どもたちが手話をもとに歌詞の世界を表現 ©FESJ/2017/Mariko Tagashira 2. 見えない、見えにくい子どもの「声隊」は発声で表現。異なる障害のある子どもたちが、それぞれの表現力や得意な部分を活かして一緒に舞台をつくりあげる ©Hikaru.☆

事業の効果

聞こえない人の表現力、見えない人の聞く力 苦手部分を補い、得意部分を活かして豊かな舞台を

異なる障害のある子どもや、障害の程度が違う子ども、障害のない子どもたちが一緒に活動する機会はありません。しかし、聞こえない人の豊かな表情や表現力、見えない人の聞く力、それぞれの豊かな部分を活かして

つ苦手な部分を補いあうことで、より豊かな舞台を追求していけると考えています。それぞれが役割をもち、いきいきと舞台に立つことで、豊かな共生社会を目指していきます。

パフォーマンスをする京都への移動中、親睦を深め助け合うことを学んだ

大徳寺でのパフォーマンスでは、東京から京都への移動も初体験。スタッフの緊張をよそに、子どもたちは新幹線の車内でおしゃべりやゲームによって交流を深めました。また、障害のない子どもや見えにくい子どもが見えない子どもとペアになり、段差があるところや曲が

るところなどをサポートし、助けあうことを学びました。最初はぎこちなかったように見えてましたが、徐々に関係を深めていったようです。普段は練習の時しかふれあうことのなかったメンバーの間に、日常生活に根差した体験や気づきが得られました。

手話の基礎練習、点字や墨字の歌詞カード 見える度合いに応じて教材を工夫

「サイン隊」では、手話がネイティブではない子どもたちのために、練習の中に手話の基礎練習を取り入れました。「声隊」では、点字、墨字の歌詞カードや練習用音源を作成し、見える度合いに合わせて使いやすい教材を使えるよう工夫しました。指導にあたっては、音楽、芸

術の専門家だけでなく、ろう学校、盲学校の先生方にもご協力いただき、ボランティアも広く募集し、子ども一人ひとりの特徴を活かしながら進められるよう工夫しました。

音楽をともに追求することが夢を描く力に 多様な場所での発表や交流も継続

「東京ホワイトハンドコーラス」は、障害の有無にかかわらず、子どもたちを中心に皆が自分らしさを大切にしながら、互いに思いやれる社会を目指しています。あらゆる子どもたちが主体的かつ相互的に学べるコーラスは、ともに音楽性を追求することで自立心や自尊心が芽

生え、他を思いやる心も育まれます。自己表現と包摂的な交流を促し、多様性をポジティブに捉え、多様な経験を通して自分自身で夢を描く力も鍛えられます。定期練習だけでなく、さまざまな場所での発表や交流の機会を大切にしていきたいと思っています。



3. サイン隊の練習風景 4. 声隊の練習風景

事業名

美術館における聴覚障害者の鑑賞環境整備事業

団体名

特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

所在地：東京都千代田区

URL：www.ableart.org

事業概要

美術分野に精通した手話通訳者養成プログラムの開発を目的に、まず、実際に鑑賞経験を重ねている聴覚障害者や美術館での手話通訳の経験をもつ手話通訳者、聴覚障害者の鑑賞プログラムを実践したことのある学芸員からなる「課題抽出会議」を2回実施。この会議で明らかになった課題や問題点を踏まえた「美術館における手話通訳者養成プログラム開発会議」を4回開催し、美術と美術館に対する知識や鑑賞の現場に必要な知識の共有と整理を行った。2つの会議を通して美術館で活躍する手話通訳者の養成プログラムの開発を目指した。

障害のある人、手話通訳者、学芸員による会議を重ね 美術館における手話通訳者養成プログラムを開発

実施内容

イベントに手話通訳がつく機会が増えたが 美術分野に精通した手話通訳者が少ない

美術分野における聴覚障害のある人への鑑賞プログラム、アクセスプログラムの提供は非常に脆弱です。そうしたなか、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の施行により、美術館でのギャラリートークや講座などに手話通訳がつく機会が徐々に増えつつありますが、美術分野に精通した手話通訳者がほとんどいないのが現状です。そこで、美術館における手話通訳者の養成プログラムの開発に着手し、美術館で活躍する手話通訳者の養成を目指します。

①課題抽出会議（2回）の実施

美術鑑賞に興味があり実際に鑑賞経験を重ねている聴覚障害

のある人や、美術館での手話通訳の経験を持つ手話通訳者、聴覚障害のある人の鑑賞プログラムの実践経験のある学芸員による会議を開催。

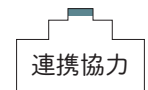
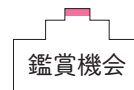
②美術館における手話通訳者養成プログラム開発会議（4回）の実施

①で明確となった課題や問題点をもとに、美術と美術館に対する知識や鑑賞の現場に必要な知識の共有と整理。

①と②を通じて、美術館で活躍する手話通訳者の養成プログラムの開発を目指した。



課題抽出会議の様子



事業の効果

美術館、聴覚障害のある人、手話通訳者… 各視点から課題を明らかにする

本事業によって、以下のような効果が期待できます。

- ・美術館における手話通訳者を養成するモデルプログラムの開発に着手することで、美術及び美術館と聴覚障害のある人を取りまく環境の問題点や課題を、美術館や聴覚障害のある人、手話通訳者それぞれの視点から明らかにすることができます。
- ・美術及び美術館と手話を接点とする関係者のネット

ワークを構築できます。

- ・プロジェクトから明らかになった現状や課題、ネットワークを活用して、美術及び美術館を中心に活動する手話通訳者の育成プログラムの開発に着手できます。
- ・プロジェクトから明らかになった現状や課題、ネットワークを活用して、美術及び美術館を中心に活動する手話通訳者の育成プログラムの開発に着手できます。

手話通訳者が情報保障だけでなく、専門性を活かしてプログラム作成にも参加

全6回の会議の全てに、聴覚障害のある人及び手話通訳者が参画します。手話通訳者は聴覚障害のある人への情報保障としての役割に加え、手話通訳者の立場からその専門性を活かしてプログラム作成そのものにも参加しま

す。また、障害当事者のニーズによっては、手話通訳のほかに、文字通訳やFM補聴器、UDトーク、筆談など、適宜必要な情報保障を行います。

関係者それぞれの立場ごとに、異なる課題があることが明確に

本事業によって、「美術館における手話通訳」を考える際のそれぞれの立場ごとの課題が明確になりました。美術館の立場からは、ろう者、手話（手話通訳）、ろう文化に対する知識（理解、必要な配慮など）の不足や、プログラム実施時の広報、集客が困難であること、継続して実施するための予算の不足という課題があります。手話通訳の方々には、美術用語、専門用語の手話の不足、表現の難しさ、時間派遣での通訳の限界（事前の打ち合わせ、十分な情報の把握、特殊な環境への配慮など）、多様な聞き手（ろう者）のニーズへの対応の難しさとい

う課題を抱えています。

また、聴覚障害のある人にとっては、美術館に行っても楽しめない、わからない、仕方ない、という思い（諦め）、希望してもプログラムに手話通訳（情報保障）がつかないこと、あるいは手話通訳がついても理解できないといったストレスがあることがわかりました。

こうしたそれぞれの抱える課題を解決するには、相互の理解が不可欠であること、また、単に手話通訳者だけがスキル向上を図っても、解決できない問題も多いことが明確になりました。

早期に質の高い手話通訳者を養成 美術館への派遣やプログラム開発を目指したい

今後は、早期に「手話通訳者育成プログラム」を完成させ、質の高い手話通訳者の養成を図っていきます。その際、立場の異なる人々や団体が感じているそれぞれの課題を共有し、お互いの考えていることを理解しながら前進していけるよう、美術館関係者やろう者も参加するプログラムを構築する必要があると考えています。また、美術館に向けた「ガイドライン」を策定することの重要性も認識しました。

それらの体制を整えていくことにより、手話通訳者の美

術館への派遣や、美術館と協働した新しいプログラムの開発促進につながると考えられます。

さらに、聴覚障害のある解説者を養成するプログラム開発に着手する予定です。これによって、聴覚障害のある人が主体的に美術鑑賞の現場に進出するだけでなく、健常者も巻き込んだ新しい鑑賞プログラムを創造することが期待できます。これらの事業を継続するためには、資金調達が必要と考えています。

事業名

障がい者の舞台芸術コンクールの地方開催による才能の発掘と育成

団体名

特定非営利活動法人 日本バリアフリー協会

所在地：東京都千代田区
URL：http://www.npojba.org

事業概要

障害のある人による国際的な舞台芸術コンクール「ゴールドコンサート」。国内外から選抜された約 10 組のアーティストが音楽とダンスを披露しグランプリを目指す。本事業では、ゴールドコンサートの地方大会を 2 都市で開催。音楽・ダンスの分野で審査を行い、優勝者には東京国際フォーラムで開催される「ゴールドコンサート」本選への出場権が与えられた。

障害のある人たちが音楽とダンスで競う「ゴールドコンサート」の 2 つの地方大会を開催

実施内容

目指せ「ゴールドコンサート」本選 より多くの障害のある人が参加できる地方大会を開催

デンマークの障害者団体が主催する大野外イベント「グリーンコンサート」にヒントを得て、平成 15 年よりスタートした「ゴールドコンサート」。回を重ねるたびに応募者、観客、サポートするボランティアメンバーも増え、大きなコンサートイベントに成長しています。平成 26 年からは、より多くの障害のある人に参加してもらえるように地方大会を実施。今年度も九州と関西で予選を行いました。

第 17 回ゴールドコンサート九州予選大会

開催日：2020 年 1 月 18 日

場所：レソラ NTT 夢天神ホール

観覧料：500 円（審査に参加できる投票券付）

審査員：田畑尚美、亀山みゆき、ティナ吉松

ゲスト：YABIKING

ゴールドコンサート本選への出場権をかけた九州予選大会を開催。視覚や知的、肢体などさまざまな障害のある人たちによる、5 組のミュージシャンが集まり、最高賞の優勝を目指した。

第 17 回ゴールドコンサート関西予選大会

開催日：2020 年 2 月 15 日

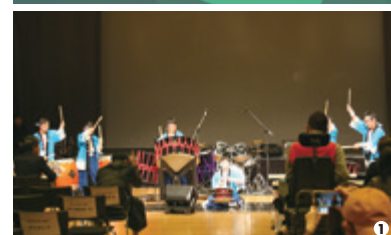
場所：カンテレ扇町スクエア 1F イベントスペース

観覧料：500 円（審査に参加できる投票券付）

審査員：仲川一昭、酒井靖、口石和人

ゲスト：口石和人 司会：武庫川女子大学の皆さん

ゴールドコンサート本選（東京国際フォーラム）への出場権をかけた関西予選大会を開催。



1.息もピッタリな演奏を披露した和太鼓のグループ 2.ピオラ、津軽三味線、キーボードというユニークな編成の「もふもふ」。九州予選を勝ち抜いて、全国大会へ



事業の効果

コンテスト方式により、注目度もアップ 東京 2020 オリンピック・パラリンピックの機運を高めたい

古来、音楽演奏やダンスなどは人々が興味をもちやすく、芸術の中でも多くの人から共感を得られやすい分野といえます。それを障害のある人たちが行い、表現力・技術が向上すれば、演者や取組への社会的評価が高まり、彼らの活躍の機会が増えることが期待できます。障害のある

人たちのコミュニティ全体の社会参加の拡大を目指し、さらには、それぞれが研鑽を重ねた音楽演奏やダンスパフォーマンスを、コンテスト形式で競い合うことで注目を集め、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの機運を高めることにもつなげたいと思っています。

多岐にわたるジャンルのミュージシャンが参加 今後も舞台芸術の分野で花を咲かせてほしい

2つの予選大会では、さまざまな障害のあるミュージシャンが集まり、優勝を目指して真剣に演奏を披露しました。ジャンルは、和太鼓から本格的なロックまで多岐にわたります。審査員の方々は、コンクールの審査だけでなく、ワークショップにおいても各出場者に熱心に助

言をしてくれました。なかには専門的で詳しいアドバイスもあり、出場者は真剣な面持ちで受け止めていました。結果発表では、それぞれ笑い顔、泣き顔が見られましたが、今後、切磋琢磨して舞台芸術の分野でさらなる花を咲かせてほしいと思っています。

さまざまなバリアフリー対応も万全 特別支援学校や通常の学校の生徒を招待

手話、パソコン用要約筆記、点字情報、読み上げソフト対応ホームページ作成、車いす席多数設置などの合理的な配慮を行いました。また、インターネット中継を行い、移動が困難な人、海外の人でも観覧を可能にしました。募集要項には英語版があり、事前の準備から当日の案内

に至るまで英語で紹介。韓国語については、バイリンガルボランティアが対応しました。関東圏 1,300 校の特別支援学校・学級設置校、都内の 117 校の通常の小中学校にチラシを配布して児童生徒の無料招待も行いました。

音楽や舞踊を融和のツールとして、真の共生社会を目指す

当団体はこれまで、デンマークの「グリーンコンサート」を目標に、双方の視察を含め連携をとりながら活動してきました。当団体が目指すのは、東京 2020 オリンピック・パラリンピックのレガシーとしての真の共生社会で

あり、そのために最も効果があるのが、古来人々の融和のツールとして使われてきた音楽や舞踊のイベントであると信じて活動しています。



3.全ての出場者に対して、熱心にアドバイスをしてくれた審査員の方々 4.「これからも楽しく音楽を！」最後は笑顔で記念撮影（写真はすべて九州予選大会）

事業名

劇場・音楽堂等バリアフリー化推進プロジェクト

団体名

公益社団法人 全国公立文化施設協会

所在地：東京都中央区

URL：http://www.zenkoubun.jp/

事業概要

劇場・音楽堂等の設置者、運営者及び利用者である芸術団体に対し、障害のある人などに対するバリアフリー化のための情報提供・指導・助言を行うことができる総合的な相談窓口を開設。そのほか、実態調査・ヒアリング・分析・情報提供体制の整備（相談窓口設置、ホームページの作成、メールマガジンの発信）や障害のある人への対応ガイドブックの作成、研修会などの開催（年1回）といった、バリアフリー化のための普及・啓発と具体的支援を進めることにより、全ての人が分け隔てなく文化芸術活動に参加できる環境づくりを推進した。

劇場のバリアフリー化を進めたい 「でもどうやって？」に応え、相談窓口や研修で情報提供

実施内容

劇場・音楽堂等でバリアフリー化を進めるためのプロジェクト

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」や「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の理念に沿った施設運営がなされているかを把握するための実態調査・ヒアリング・分析のほか、相談窓口設置、ホームページの作成、メールマガジンの発信といった情報提供、障害者対応ガイドブック「劇場・音楽堂等アクセシビリティ・ガイドブック～すべての人に開かれた広場となるために～」の作成を行いました。また、全国アートマネジメント研修会では、劇場・音楽堂等をすべての人に開かれたものとすることを目指した「劇場・音楽堂等のアクセシビリティを考える！」という講座を開講しました。



事業の効果

バリアフリー化は必須になったが、方法がわからない… 劇場にノウハウや情報を提供する必要があった

「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」や「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行され、劇場などの文化施設は、全ての国民が心豊かな生活を実現する場、社会包摂の機能を有する基盤として定められました。そこでは、誰もが文化芸術活動に参加するためのバリアフリー化が行われなければなりません。しかし、バ

リアフリー化のためのノウハウがない、限られた予算の中での優先順位のつけ方がわからないなど、個々の施設には課題が少なくありません。そこで、バリアフリー化の普及・啓発と具体的支援を進めていくため、まずは劇場で働く人々に対し普及・啓発を行う必要があると考え、総合的な相談窓口の設置や、情報提供体制の整備を行うことにしました。

相談・支援・助言を行う総合窓口を設置 誰もが文化芸術に参加できる環境づくりが進む

劇場・音楽堂等のバリアフリー化は、各館の職員が手探りで実施しているのが現状で、たとえ意欲があったとしても、依然、情報は不足しています。バリアフリー化を

効果的に進めるうえでの相談や指導・助言を得られる総合的な相談窓口を開設することで、バリアフリー化情報の普及・啓発が可能となり、具体的支援も行っていくこ

とができます。①総合的窓口、②ワンストップサービス、③ネットワークの構築の3点を意識して行いました。そ

職員に手に取ってもらえるガイドブックを編集

障害のある人が、劇場・音楽堂等で公演を鑑賞したり施設を利用したり、創造活動に参加したりする際の環境づくりはどのようにしたらいいのか、劇場・音楽堂等で働く職員が手に取って一読できるガイドブックを作成しました。まずは、障害によりどのような障壁があるのか理

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律などに則った劇場運営のために

NPO 法人 DPI 日本会議の尾上浩二氏、国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）の鈴木京子氏を講師に迎え、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」や「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の理念に沿った施設運営をするための、そして、全ての利用者や出演者が公演に集中できる環境を醸成していくための一助となるプログラムとしました。

人手不足・財源不足が課題だが、できることから始めたい

主に劇場関係者向けに情報提供を行っていますが、バリアフリー化のソフト面に関しては、少ない人数で劇場運営を行うなかでの創意工夫が求められるため、遅々として進まない現状があります。ハード面ではさらに、自治体の財政難から改修費用を捻出することができず、施設を改善すること自体へのハードルが高いという課題があ

の結果として、全ての国民が分け隔てなく文化芸術活動に参加できる劇場づくりの実現が期待されます。

解することから始め、次に、そうした障壁のある方が、劇場・音楽堂等の公演や活動に参加する際に求められる「合理的配慮」とはなにか、そして、どのように対応したらいいのかを解説しています。

「全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント・舞台技術研修会 2020」内プログラム

「劇場・音楽堂等のアクセシビリティを考える！

ーすべての人に開かれた劇場・音楽堂であるためにー

モデレーター：間瀬勝一（公益社団法人全国公立文化施設協会アドバイザー）

開催日：2020年2月6日（研修会は2月5日～7日）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者数：約200名 参加費：無料

ります。しかしながら、入館時にお手伝いできることを伺う、休憩時に同性の係員がお手洗いについて尋ねるなど、小さな気づきから始められます。障害のある人たちと直接ふれあう機会を増やし、信頼関係を築いていくことが大切です。



「劇場・音楽堂等のアクセシビリティを考える！ーすべての人に開かれた劇場・音楽堂であるためにー」の研究会の様子

事業名

「声の力」プロジェクト

団体名

株式会社 朝日新聞社

所在地：東京都中央区

URL：https://www.asahi.com/corporate/

事業概要

視覚障害のある高校生たちを対象に、声による表現のプロジェクトを実施した。プロの声優が各地の視覚特別支援学校で特別授業を実施し、発声法や腹式呼吸の練習から台本読みまで、声優の基礎を体験。また、都内の視覚特別支援学校生徒と高等学校生徒が合同で2泊3日の合宿に参加し、一つのラジオドラマを共同制作した。

視覚障害のある高校生が声の表現の豊かさを学び ラジオドラマも制作。新しい可能性を開いた

実施内容

プロの声優から声の表現の豊かさを学び 高等学校生徒とともにラジオドラマを制作

視覚障害のある高校生たちが、声による表現方法を学ぶことで、自身の可能性を広げることを目指す「特別出張授業」。視覚障害のあるアニメ好きの生徒たちは、声優・古川登志夫氏や水田わさび氏、岩田光央氏から、腹式呼吸、胸式呼吸といった呼吸法の基本を学び、発声練習、笑い方、セリフや朗読の練習を行いました。授業を通して、声による多様な表現のあり方や、それぞれの個性に気づいたほか、思いの込め方などを練習して声による表現の可能性を実感。その後、高等学校生徒との合宿を行い、ラジオドラマの作成という新たな声の表現に挑みました。

●特別出張授業

開催日：2019年7月21日、8月31日 講師：古川登志夫

参加者数：各8名（筑波大学附属視覚特別支援学校高等部生徒）

開催日：2019年9月26日 講師：水田わさび
参加者数：10名（岐阜県立岐阜盲学校生徒）

開催日：2019年10月15日 講師：岩田光央
参加者数：16名（広島県立広島中央特別支援学校生徒）

開催日：2019年12月16日 講師：山口由里子
参加者数：13名（愛媛県立松山盲学校生徒）

●インクルーシブ合宿

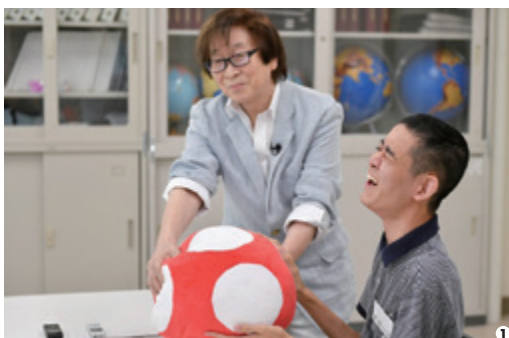
開催日：2020年1月11日～13日 講師：磯部弘
参加者数：10名（筑波大学附属視覚特別支援学校高等部生徒、筑波大学附属高等学校生徒）

場所：青二塾 吉祥寺校舎

●ラジオドラマ放送

合宿中、10名の高校生たちが磯部弘氏の指導のもと、つくり上げたラジオドラマを、文化放送の番組「青山二丁目劇場」で放送。本編の収録にも生徒2名が参加し、番組のホストである古川登志夫氏と、合宿の思い出や演じることの難しさ、面白さについて語りあった。

放送日時：2020年2月10日 20:30～21:00



事業の効果

思いを表現し、自信をつけ、将来の夢への視野を広げる アニメ業界へもインクルーシブな発想を呼びかけ

出張授業・合宿を行うにあたり、下記のとおり狙いを設定しました。

〈出張授業の狙い〉

- ・自分の思いが伝わる伝え方を獲得する。
- ・相手の気持ちを想像する姿勢を獲得する。

- ・将来の夢への視野を広げる。

〈合宿の狙い〉

- ・違いを理解し、互いの心の壁を打ち破る。
- ・自分の思いを表現できるようにする。
- ・やり抜くことで自信を獲得する。

声の表現が豊かになると、個人の力が高まり将来の可能性も広がってくる

参加する高校生一人ひとりが「自分の声」を知り、表現方法の奥深さを体感することによって、日常のコミュニケーションへ役立てたり、自己表現について考える機会を創出したりする効果が期待できます。声の表現が豊かになれば、日常のコミュニケーションから面接、プレゼ

ンテーションまで、あらゆる場面で一人ひとりの力を高めることができるでしょう。また、声優を目指すなど、将来の夢を考えるとときの視野が広がる可能性もあると考えられます。

視覚障害のある社員が当事者の視点からチェック ウェブサイトもアクセシビリティに配慮

プロジェクトの実施にあたっては、社内の視覚障害のある社員に特別アドバイザーとして参加してもらい、当事者の視点から常にチェックしてもらいました。また、情報発信の拠点となるウェブサイトは、視覚障害のある人でも情報を得やすいよう、アクセシビリティに配慮した

デザインで制作しました。課題は、特別授業の実施校数が少なく、受け入れられなかった学校が複数あったことと、声がけのタイミングによって実施できなかった学校があったこと。次年度は実施校数を増やすと同時に、学校への打診の時期を早めていく予定です。



3



4



5

1. 古川登志夫氏の指導で声を使った新しい表現に挑む
2. 水田わさび氏の生「ドラえもん声」に、生徒たちは大喜び
3. 岩田光央氏は、体育館で声と体を使ったレッスンを行った
4. 基本的な発声を学ぶ基礎編、詩の朗読を行った応用編。山口由里子氏の授業は盛りだくさん
5. 磯部弘氏の指導のもと、2日間にわたって練習した演技を披露。ついにラジオドラマが完成

事業名

「多様性を育む美術プロジェクト」

—障害のある人達との美術創造活動&ファシリテーションの方法を学ぶワークショップ

団体名

クリエイティブ・アート実行委員会

所在地：東京都港区

URL：http://www.musekk.co.jp

事業概要

クリエイティブ・アート実行委員会は、障害の有無や年齢、性別、民族の違いにかかわらず、自らとコミュニティ（グループ）のアイデンティティを同時に表現できる活動を提供するとともに、新しいアートと社会のあり方を探求してきた。本事業は、障害のある人と障害のない人、幼児から大人までが、お互いの創造性を触発しながら、作品制作に焦点を絞り、展覧会を行う美術プロジェクト。同時に、ファシリテーターの気づきや学びを得られる機会となるワークショップを実施した。

障害のある人、障害のない人 互いの創造性を触発しながら、作品制作を行う

実施内容

視覚に障害のある人と美術活動をする美術作家が講師 絵画や造形、ワークショップを実施

作品制作に焦点を絞り、展覧会を行う美術プロジェクト。同時にファシリテーターにとっても学びの場となるワークショップとして企画しました。講師は、千葉盲学校で視覚障害のある子どもとの美術活動などを行っている現代美術作家の西村陽平氏が務め、①絵画（現代アートのさまざまな技法で絵を描く）②造形（一人20kgの土粘土で自分の内から生まれる表現を追求する）③地方美術館へ出張ワークショップ ④作品の展覧会を行いました。

●展覧会

場所・開催日：高知県薫工ミュージアム
(2020年1月26日～2月23日)、
北区文化芸術活動拠点ココキタ
(2020年2月22日～29日)

入場料：無料

多様性を育む美術プロジェクト

●ワークショップ

【東京】

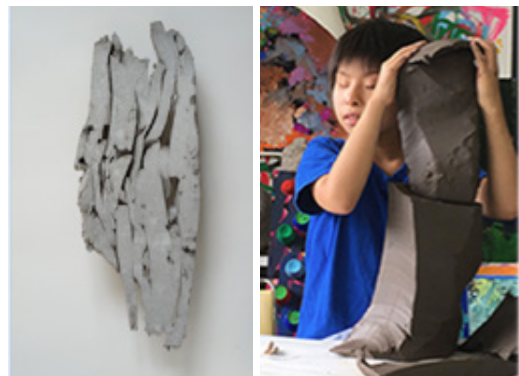
開催日：(絵画) 2019年8月24日、10月22日、
12月14日、2020年1月19日、2月2日
(造形) 2019年7月20日、9月14日、
11月10日、12月15日、2020年1月18日、
2月1日

場所：北区文化芸術活動拠点ココキタ

【地方】

場所・開催日：栃木県もうひとつの美術館（2019年9月22日・23日）、長野県信濃美術館（2019年12月1日）、高知県薫工ミュージアム（2020年1月25日・26日）

参加費：障害のない人(全2回)9,000円、(1回)5,000円
ファシリテーションプログラム参加者(全2回)8,000円、(1回)4,500円
障害のある人(全2回)4,000円、(1回)2,500円





事業の効果

新しいアートの可能性を模索 障害のあるアーティストの発掘・育成にも尽力

このプロジェクトでは、障害のある人たちとない人たちの創造活動の協働により、新しいアートの可能性を探っていきます。さらに、本事業は視覚障害のあるアーティストの発掘と育成にも力を入れています。

彼らの表現活動を作品として社会に届けることが、多様な人々を受容する社会をつくることにつながると考えます。

経験豊富な指導者を講師に迎え、障害者アートをリードする指導者の育成につなげたい

講師の西村陽平氏は現代美術作家であり、同時に障害のある人たちや幼児たちとの表現活動の経験豊かな指導者です。西村氏が現代アートのさまざまな技法を用いて指導することで、参加者が創造的な作品を生み出すことが期待できます。本プロジェクトによって、障

害のあるアーティストの発掘と育成を行い、世界に発表の場を提供できます。同時に将来、障害のある人たちとの表現活動をリードする指導者を増やしていくこともできるでしょう。

障害のある人やアートと無縁な人々との活動経験を活かして、さまざまな障害のある人への情報伝達を

クリエイティブ・アート実行委員会は、1990年から一貫して障害のある人、また、アートにアクセスする機会の少ない人々との活動を行っています。これまでの経験から、手話通訳、点字チラシ、視覚障害や聴覚

障害や、ろう者の人たちのメーリングリストなどを活用し、さまざまな障害のある人たちに効果的に情報が届けられるように心がけています。

アクセスがよい専用スペースの確保が必須 視覚を超えた美術の可能性を探りたい

障害のある人たちと美術活動を継続的に行うには、専用のスペースが必須です。ところが、都会ではアクセスがよい地域で、倉庫なども含めたスペースを確保することがなかなか難しく、なんらかのサポートを得られるとありがたいです。今後は、視覚障害のあるアー

ティスト育成のために、西村陽平氏に加え、触覚を活かした素材で表現活動をしているアーティストたちを招いて「触覚とアート」ワークショップも開催するなど、視覚を超えた美術の可能性を探りたいと考えています。



現代美術作家の西村陽平氏の指導によるワークショップに、障害のある子どもたちと障害のない子どもたちが一緒に参加。現代アートのさまざまな技法で絵を描き、粘土による造形を体験した

事業名

リラックスパフォーマンス 「白鳥の湖」&「迷子の青虫さん」

団体名

公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団

所在地：東京都港区

URL：https://www.sdballet.com/

事業概要

当法人では、以前より「リラックスパフォーマンス」による公演を実践している。リラックスパフォーマンス（原語：Relaxed Performance）とは、自閉症やコミュニケーション障害、学習障害などにより通常の劇場環境になじむことが難しい人たちやその家族が、よりリラックスした環境で舞台鑑賞を楽しめるようにと英国で発祥した公演形態で、シェークスピア・グローブ座をはじめ、英国内の主要な劇場やバレエ団を中心に広がりを見せている。

大人も子どもも、あらゆる人が楽しめる リラックスパフォーマンスでバレエ公演を

実施内容

親しみやすいバレエプログラムを 英国発祥のリラックスパフォーマンスで鑑賞

「白鳥の湖」と「迷子の青虫さん」をリラックスパフォーマンスの形態で上演。古典バレエの名作「白鳥の湖」は1時間45分に凝縮し、初心者でもわかるように解説をつけます。個性豊かな虫たちの世界がバレエになった「迷子の青虫さん」は、小さな生き物たちの小さな世界を描いた新感覚のバレエです。これらのプログラムを、普通のバレエ公演より少しだけリラックスした雰囲気の中、自閉症やADHDの症状などによりちょっとした支えを必要とする方々や、バレエ鑑賞が初めての人も、構えずにリラックスして鑑賞を楽しんでもらいます。

※開催中止

リラックスパフォーマンス

「白鳥の湖」(全1幕) & 「迷子の青虫さん」

開催日：2020年3月21日

場所：愛知県芸術劇場大ホール

愛知芸術文化センター2階



皆が一つになってステージをつくりあげる



「迷子の青虫さん」より

事業の効果

障害のある人たちに、本格的なバレエの鑑賞機会を提供

本事業では、これまで劇場での舞台鑑賞が難しかった人々に、本格的なバレエ公演の鑑賞機会を提供することを目指しました。また、障害のある人だけを対象とする

のではなく、障害のある人も一緒に楽しめる公演として提供することで、個々の多様性を受け入れるインクルーシブな社会の実現に寄与することが期待できます。

光や音など刺激に配慮、鑑賞マナーも緩和

上演するプログラムの内容は変えることなく通常のバレエ公演で求められる鑑賞マナーを以下のように緩和します。

- ・ 上演中でも、休憩が必要になった場合に客席の外に出ることができる。
- ・ 客席の照明を完全に暗くしない。
- ・ 突然大きな音が出る場面では、音のボリュームに配慮

- する。
- ・ 完全な静寂ではなくても、皆で鑑賞を楽しめる環境づくりに努める。
- ・ 車いす席を用意する。
- ・ 特設サイトでの事前の情報共有により、ご家族やご同伴の方の不安を和らげる。

リラックスパフォーマンスのコンセプトを周知させたい

リラックスパフォーマンスをこれまで実施するなかで、視覚や聴覚に障害のある人の鑑賞サポートつきの公演だと思って来場されたお客さまや、通常のバレエ公演を想定して来場されたお客さまがいました。この事実を踏ま

えて「リラックスパフォーマンス」というコンセプトを、よりわかりやすく周知させることが課題であると考えています。



1.開演前には物語とマイム（手の動き）の解説を 2.特別支援学校ダンス部の生徒との共演シーンを 3.古典バレエの名作「白鳥の湖」 4.ロビーには鑑賞に疲れた方や子供たちが利用できる「休憩エリア」を設置 ※写真は昨年度のものです © Kiyonori Hasegawa

事業名

やってみようプロジェクト

団体名

公益社団法人 日本劇団協議会

所在地：東京都新宿区

URL：http://www.gekidankyo.or.jp

事業概要

劇団が地域の劇場やNPO・福祉施設などと連携して、演劇的手法を用いた多様な「社会包摂型プログラム」を展開。共有する楽しさ、コミュニケーションの楽しさなどを体感するコミュニケーションワークショップを、全国6カ所で、それぞれ異なる対象に向けて実施した。さらにこのような活動が参加者・社会に与える影響について、3事例を対象に調査分析を行った。

演劇表現を取り入れたワークショップで 障害のある人や引きこもりがちな若者、高齢者らが変わった

実施内容

生きづらさを感じるさまざまな立場の人々が コミュニケーションワークショップで社会とつながる

演劇のもつ創造のパワーを社会課題解決に役立てようと、演劇的手法を用いた社会包摂型のコミュニケーションワークショップを全国6カ所で行いました。どの会場でも、参加者の皆さんにコミュニケーションの楽しさを体感してもらいました。

●ワークショップ

場所：都立石神井特別支援学校（練馬区）

対象：特別支援学校の生徒

回数：全8回

講師：西海真理（朋友）

場所：社会福祉法人はるび／介護老人福祉施設はるびの郷（東村山市）

対象：入所・通所の高齢者

回数：全8回

講師：西海真理（朋友）

場所：児童養護施設杉並学園（杉並区）

対象：杉並学園入所中の子ども

回数：全6回

講師：水野千夏（朋友）

場所：さいたまユースサポートネット／さいたま市若者自立支援ルーム（さいたま市）

対象：若者自立支援ルーム利用者

回数：全18回

講師：板倉哲（青年劇場）

場所：日本労働者協同組合ワーカーズコープ連合会（板橋区ほか）

対象：就労・就学していない40歳までの若者

回数：全21回

講師：佐藤文雄（銅鑼）

場所：小野市うらおい交流館エクラ×小野市国際交流協会（兵庫県小野市）

対象：兵庫県小野市に日本在住外国人の大人と子ども

回数：全4回

講師：本田千恵子（兵庫県立ピッコロ劇団）



事業の効果

社会的に疎外されがちな人々が周囲とつながり 社会参加の機会を

本事業は、芸術団体が行う演劇ワークショップの社会的効果・価値を可視化、言語化し、その価値を共有することを目的に調査研究からスタートしました。現代社会には、さまざまな理由から生きづらさを感じている、多様な立場の人がいます。そのような人たちが排除されるこ

とのない「共生社会の実現」を目指し、社会的に阻害されがちな立場にある人がコミュニケーションワークショップを通して周囲とのつながりを持ち、社会参加の機会を得ることを狙いとして、本事業を実施しました。

若年無業者が職に就き、高齢者の自立度は改善 ワークショップには大きな効果が

これまで当法人は、調査研究によって演劇的手法がさまざまな社会課題解決につながることを報告しています。若年無業者対象のワークショップでは、参加者が就労。引きこもりがちな参加者が旅行をするようになるなど、参加者に積極的な変化が見られることが報告されています。高

齢者施設でも、ワークショップ後に参加者のIADL（自立度）の数値が改善しました。認知症による精神・行動面の症状も改善され、投与する向精神薬の量を減らすという効果が得られました。本事業には対象者の社会参加の機会を与え、QOLを高める効果があると考えられます。

高齢者・障害のある人にはサポート体制を準備 日本在住外国人には文化的・言語的配慮を

ワークショップ開催にあたっては、高齢者、障害のある人、日本在住外国人など、全ての人が無理なく参加できるように、以下の点に配慮しました。

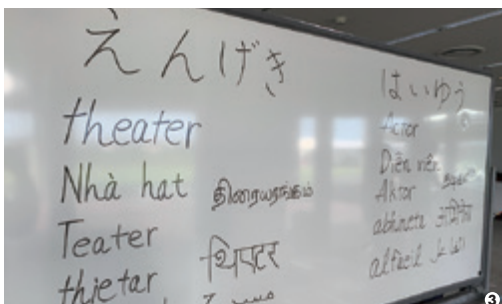
- ・ 車いすや認知症の人も、一緒に取り組めるプログラム設計やサポート体制を十分に準備。事業はバリアフリー会場で実施しました。

- ・ 多様な国籍の人が参加するため、生活環境や日本語習熟度を共有し、言語・文化・宗教の違いによって誤解がないよう専門家からアドバイスを受けました。また、スマートフォンやイラストを活用し、言語バリアフリーな環境にも配慮しました。

演劇ワークショップの社会的効果に関心が高まる 活動を全国の自治体・施設に広げたい

本事業を通じて、向き合うべき社会的課題の広さを再確認しました。演劇ワークショップが与える社会的効果の大きさが知られるようになると、複数の施設関係者、議員、自治体などからの視察も増え、各方面から強い関心をもたれていることを感じました。誰一人取り残されない共生社会の実現を目指し、社会から阻害されがちな人

たちの安心・安全な居場所をつくっていくためにも、この活動を全国各地の自治体・施設で広く展開することが必要だと考えています。また、文化芸術による社会包摂活動の有効性に関する実証的な調査研究を長期的に行うことも求められていると思います。



1. 日本在住外国人対象ワークショップ（兵庫県小野市「うるおい交流館エクラ」）
2. 高齢者対象ワークショップ（東村山市「はるびの郷」）
3. 言語バリアフリーな環境に配慮した
4. 石神井特別支援学校でのワークショップ

事業名

プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験の創造

団体名

公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

所在地：東京都墨田区

URL：https://www.njp.or.jp/

事業概要

実施団体所属のプロの演奏家が、小学校の特別支援学級を対象に楽器体験、鑑賞体験、創作体験の場を提供。実際に楽器に触れ演奏者とふれあうことで、楽器や音楽、演奏者への興味を促進し、より積極的な楽しみ方を体験してもらった。また、リズム遊びや音遊びなどの創作体験では、個々の感情や印象を表現し、個性や能力を発揮する機会につながった。既存の音楽鑑賞教室と異なり、特別支援学級の児童生徒が主体的に参加する体験の場を提供することで、芸術文化への関心が高まることを目指した。

プロの演奏家が小学校で、楽器体験や創作の機会を提供 自己肯定や他者受容のきっかけにもなった

実施内容

参加者全員がクラシックの楽器の演奏を体験 音色も意識し、音楽を積極的に楽しめた

小学校3校の特別支援学級を対象に、教室や音楽室で、プロのオーケストラ団員の指導による鑑賞体験などを行いました。墨田区業平小学校で実施した楽器体験や音楽鑑賞では、指導奏者の演奏や指導を通じて、自分はどうのような音色や表現を美しいと感じるのかを意識したり、楽器が響いている状態や音程が合っている状態などの違いを実感したりなど、より積極的な楽しみ方を体験してもらいました。

リズム遊び、音遊びや創作活動は、個々の感情や印象を表現して発表することで、それぞれの個性と能力を発揮する機会となります。これらの体験は自己肯定感の獲得につながり、また、共同作業を行うことで自己表現と相互理解のきっかけともなりました。発表後の児童同士の意見交換では活発なコミュニケーションが見られました。

プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験の創造

開催日：① 2019年10月1日～12月20日のうち

5日間

② 2019年11月13日

③ 2019年11月14日

場所：① 墨田区立業平小学校

② 可児市立今渡北小学校

③ 可児市立広見小学校

参加者数：① 16名 ② 11名 ③ 12名

参加費：無料



1

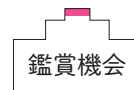


2



3

1. 業平小学校での楽器体験 2. 鑑賞体験 3. リズム遊び



事業の効果

主体的に音楽とかかわることで芸術文化への関心が深まり 他者を認め、多様性を受容する意識も育つ

既存の音楽鑑賞教室は、基本的に児童生徒は鑑賞するだけで、受動的なかかわり方になりがちです。本事業ではそこから大きく踏み込み、支援学級の児童生徒が主体的に参加できる体験の場を新たに開発することにより、より芸術文化へのかかわりを強められるものとしています。本事業を通して、障害のある児童生徒が個性や能力を発揮し、自己とともに他者を認め、多様な考え方を認識し受容していく意識を学び、育んでいくことを目指しています。本事業の実施によって、児童生徒が自発的か

つ継続的に芸術文化へのかかわりを進めていくこと、その経験を通じて自己意識を変化させること、新たなコミュニティなどへの参加を促すようなこともできるのではないかと考えています。

また、本事業に携わる演奏者とスタッフが継続的な経験を積み上げ、実施した効果の検証を重ねることで、共生社会の実現に向けた課題を改めて認識し、課題に対応するかたちに変化させていくことも目指しています。

創作活動や発表で育まれる自己肯定や他者理解 ノウハウ蓄積によって新プログラムの開発も

楽器体験の際は少人数のグループに分け、児童それぞれに十分な体験時間を確保し、密度の濃い指導ができるようにしました。全員が楽器に触れ、音楽や芸術に対して実感をもってかかわれる楽器体験は、鑑賞だけでは気がつきにくい体の使い方を体験し、楽器や音楽、演奏者への興味をもってもらうことにつながります。

また、リズム遊び、音遊びや創作活動など、個々の感情や印象を表現し発表することで、それぞれの個性と能力

を発揮する機会を設けました。これらの活動は自己肯定感の獲得につながるるとともに、共同作業は自己表現や相互理解のきっかけにもなると期待されます。発表後の意見交換の時間も、多様な意見を知り、自己と他者の違いに気づくことができる機会となります。

さらに、指導奏者のノウハウ蓄積と実施内容の比較検討により、より多様なプログラムの開発と、実施可能な奏者の拡大に貢献できると考えています。

さまざまな環境を想定した実施方法を検討 一般学級も視野に入れ、活動拡大を図る

いずれの実施校も担当教諭の指導が行き届いており、非常に円滑に実施を進めることができました。新たな事業内容を創作、模索、制作などをするうえでは有効なモデルケースとなった一方で、さまざまな事情により、実施する際に何らかのハードルが発生する状況も起こりうることを想定して、より多様な環境での実施検討を続けた

と考えています。

実施内容に関しては、特別支援学級向けに限らず、一般学級、あるいは多様な児童生徒が共存する環境で行う場合にも有効であることを再認識しました。真の共生社会の実現に向けて貢献していけるよう、活動のさらなる拡大を図っていく予定です。



4. 今渡北小学校でのリズム遊び



5. 広見小学校でのリズム遊び

事業名

MOT サテライト2019 「ひろがる地図」

団体名

公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

所在地：東京都江東区

URL：法人 <https://www.rekibun.or.jp/> 美術館 <https://www.mot-art-museum.jp/>

事業概要

「地域を知る」ことを改めて観客に問おうと、障害のあるアーティスト2名を含め5組のアーティストによる新作、東京都現代美術館コレクションなどによって「地図」をテーマとした展覧会を行った。全盲のアーティスト・光島貴之氏が美術館周辺地域に取材して制作した「手で触れて鑑賞する作品」と、難病のため車いすで生活しているマリー・コリー・マーチ氏による「300人の参加者のアイデンティティを表現した作品」は、多様な人々の感じ方がすべて肯定されるというメッセージを発信した。

企画展で障害のあるアーティストが新作発表 障害のある鑑賞者への対応ノウハウも蓄積できた

実施内容

全盲のアーティストが地域での体験を作品化 難病の在米アーティストは観客参加型の作品を制作

美術館周辺の地域とつながり、まちの魅力を掘り起こすプロジェクト「MOT サテライト」の4回目は、「地図」をテーマに、作家5組の新作に加え、東京都現代美術館のコレクション及び、国立民族学博物館と株式会社ゼンリンの所蔵する民族資料や古地図などを紹介しました。全盲のアーティスト・光島貴之氏は、清澄白河のまちを散策し体験したことを作品化して美術館に展示したほか、カフェや店舗を舞台とし、メニューや雰囲気、スタッフとの会話などを元にサイトスペシフィックな作品を制作。また難病により車いすで生活をしているアメリカ在住のマリー・コリー・マーチ氏は、来日して観客参加型

の作品を2点制作しました。来場者にアイデンティティを問かける作品には、来日して人々とふれあった経験が活かされ、東京に暮らす人々の多様性と、それを肯定する寛容さについて考える契機を提供しました。

MOT サテライト 2019「ひろがる地図」

開催日：2019年8月3日～10月20日

場所：東京都現代美術館 企画展示室地下2階 その他、清澄白河エリア内のカフェや店舗など7カ所

来場者数：3万8,620名

観覧料：無料

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館・アーツカウンシル東京、文化庁



1. 「MOT サテライト 2019 「ひろがる地図」」ポスター 2. 展示作業中のマリー・コリー・マーチ氏 3. マリー・コリー・マーチ 《アイデンティティ・タペストリー #13》2019年

事業の効果

「地域を知ること」を問う展覧会に障害のあるアーティストを選出

展覧会の狙いを、「地域を知る」とはどういうことかを改めて観客に問うこととし、テーマに合わせて作家選定を行った結果、地域を語る際に登場することの少ない障

害のあるアーティスト2名を含むこととなりました。彼らが安心して制作・発表を行える体制を整えるために、文化庁の事業に応募しました。

多様性のあるアーティストの表現を鑑賞する土壌づくりにつながる

地域に暮らす人の多様性を示す展覧会において、アーティストにも多様性をもたせ、かつそれぞれの表現を、障害の有無ではなくアーティストの個性として鑑賞する土壌をつくることができました。また、触って鑑賞できる作品が多かったため、点字のチラシを作成するなど、

視覚障害のある人たちに積極的に来館を呼びかけました。その結果、多くの視覚障害のある方を迎えることができ、またその対応のノウハウを得ることにつながりました。

障害のある人に対するさまざまな鑑賞支援を準備

視覚障害のある人の鑑賞を支援するため、点訳チラシの作成・配布、最寄駅から美術館までの「ことばの地図」の作成、触れない作品の触察模型の作成、点字作品解説の貸出、会場内解説パネルの音声読み上げ用データの

ウェブ公開などを行い、要望があった場合には個別のガイドも実施しました。歩行に困難のある、車いすや杖を使っている人を対象としたギャラリートークや、手話を使った鑑賞プログラムなども開催しました。

障害のある作家が活動する際に生じる負担を改善したい

今回アメリカから招聘した作家は、座位や立位が難しいという身体的な条件により、飛行機はファーストクラスに乗らざるを得ません。また、視覚障害のある作家の移動には必ずアシスタントがつきますが、公的助成金では、

そのアシスタントの交通費は支払いの対象外となることがあります。障害のある作家が障害のない作家と同様の活動をする際には、本人に経済的負担が生じてしまう状況を改善する必要があると考えています。



4.光島貴之《ハンゾウモン線・清澄白河から美術館へ》2019年 撮影：Alloposidae

5.オールプレス エスプレッソ 東京ロースタリー&カフェにて

6.展示会場の下見でコーヒー焙煎機を触る光島貴之氏

事業名

国際芸術祭実施に向けての ろう者の芸術活動推進事業2019

団体名

社会福祉法人 トット基金 日本ろう者劇団

所在地：東京都品川区
URL：http://www.totto.or.jp/

事業概要

国際芸術祭の開催を目指し、ろう者・難聴者の表現者や表現活動に関心をもつ人たちに、さまざまな角度からの学びの場を設ける事業を実施した。演劇分野では、演技、能楽、身体表現の各ワークショップの継続や演出家・俳優の小野寺修二氏による作品制作ワークショップなどに前年度から継続して取り組んだ。国立能楽堂では、能楽師が手話で演じるほか、鑑賞支援として盲ろうサポートを含めた障害のある人の個別支援を実施。ろう者の映像製作者の育成、美術分野でのワークショップやリサーチなども行った。

目指すは、ろう者の国際芸術祭の国内開催 多様な学びの場を提供し、表現者やスタッフを育成

実施内容

多様なワークショップで 新たな表現やコミュニケーションの可能性を広げる

手話通訳を介して、ろう者と聴者がともにさまざまな動きを行う「身体表現を活かしたムーブメントワークショップ」には、継続参加の人、今回初めての人、ダンス経験のない人、高齢者など、多様な人々が参加。ろう者に初めて会った人もいて、良い出会いの場となりました。

「手話で創る脚本教室」では、脚本づくりに関する講義や、イラストから物語をつくる練習の後、創作・発表を実施。「アートを通して考える講座」では、東京都現代美術館学芸員の八巻香澄氏や東京藝術大学の伊藤達矢先生に、美術館における手話プログラムについて話していただいたほか、美術作品の説明にふさわしい手話表現を探るワークショップも実施。手話ユーザーと手話を知らない人が、互いに概念に対する理解や鑑賞を深めていくという新たなアプローチができました。

また、東京都美術館×東京藝術大学の「とびらプロジェクト」は、ろう者・難聴者と聴者が「香り」のツールを使い、音声や手話をあえて禁止する対話鑑賞のワークショップを展開。お互いの感覚の共通点や違いを共有する空間をつくる試みは、美術館における新たなコミュニケーションの可能性を広げました。

小野寺修二 身体表現を活かしたムーブメントワークショップ

開催日：2019年6月19日、26日

場所：品川区立中小企業センター

来場者数：合計54名 参加費：1回1,000円

手話で創る脚本教室

開催日：2019年6月10日、25日

場所：トット文化館

来場者数：合計24名 参加費：1回1,000円

アートを通して考える講座

開催日：2019年9月29日、10月20日、11月23日、
12月13日、21日

スペシャルイベント 11月12日

場所：トット文化館／東京都現代美術館／東京藝術大学／
象の鼻テラス

来場者数：5回合計183名、スペシャルイベント87名
参加費：無料～500円



事業の効果

ろう者・難聴者の映像表現者を育成し、国際レベルの芸術活動や、誰もが楽しめる演劇づくりを推進

「第2回東京国際ろう映画祭」に海外からはろう者の作品を含め多様な応募があったのに対し、日本からは聴覚に障害がない人の応募のみと、国内のろう者の表現者はまだ一部の分野にとどまっています。本事業はろう者等の表現者やスタッフ等の、演劇、映画、美術各分野における育成事業を中心に展開し、その芸術活動が国際基準に呼応した水準に達することを中長期的な目標としています。今年度末には国立能楽堂で、30余年をかけて完

成させた「手話狂言」を能とあわせて発信。障害の有無や国籍の違いにかかわらず誰もが楽しめる演劇を創出して、東京2020オリンピック・パラリンピック開催に向けて、共生社会にふさわしい質の高い演劇づくりを継承していこうと考えています。

本事業で、日本におけるろう芸術祭の実現に向けて発進し、日本が名乗りを上げている2025年のデフリンピックを目途に開催実現を目指します。

演劇・映画・美術の分野で人材育成・調査を進め、芸術祭の実現の布石に

当法人は、これまでろう者の表現者たちを育成してきました。本事業では彼らにあらためて学びの場を提供することで、知識、技能の充実を図ることができます。今年度も昨年度に引き続き、演劇・映画・美術の3分野で人材育成、調査、海外視察等を、単独、または他の組織などと合同で行うことで、芸術祭実現への布石としていき

ます。

すでに演劇分野では、平成29年度より実施している育成プログラムの効果が確認できますが、今年度はさらに、7月に予定している本格公演に向けて準備を進めていきます。

好事例が広まらない原因を見出し、改善策を模索したい

課題は各分野にあります。演劇に関しては、ろう者の視覚的な発想から「物語・脚本」につなげるためのトレーニングが必要であり、それには手話で学べる場を継続して開催することが必要となります。また、美術館における手話ユーザーと手話を知らない人との対話を通した

ワークショップなど、せっかくある好事例が広まらないことも課題です。日本における美術館の現状や課題などを抽出し、ろう当事者が美術館に働きかけることで改善策を模索していきます。



1. 展覧会「MOT サテライト 2019 広がる地図」八巻香澄氏による手話通訳を介したガイドツアー 2. 「手話で創る脚本教室」で手話脚本の可能性を探りたいと話す早瀬憲太郎氏 3. 「小野寺修二 身体表現を生かしたムーブメントワークショップ」パターンを使いコミュニケーションをとっている

事業名

観劇サポートガイドブック改訂および各地フェスティバル等におけるアクセシビリティ取り組みへの助言活動

団体名

特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

所在地：東京都世田谷区
URL：http://ta-net.org/

事業概要

全国各地で開催されている国際芸術祭や舞台芸術フェスティバル等を、聴覚障害のある当事者の目線で視察し、担当者との意見交換を行うほか、準備段階から参画が可能な場合は、適宜現場へ出向いてアドバイスを行うなど、アクセシビリティ環境向上推進の必要性を訴えた。さらに、これらの視察によって得た知見を反映させて制作した「観劇サポートガイドブック～視覚・聴覚障害者編」に最新情報を加えた改訂版を制作、電子書籍化を行った。

当事者の視点での助言とガイドブックで 観劇サポートの方法を広く伝える

実施内容

誰もが楽しめる劇場づくりを目指し 観劇サポートのノウハウをガイドブックに集約

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」「文化芸術基本法」「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の施行など社会情勢の後押しもあり、観劇サポートへの関心が高まりつつあります。観劇サポートとは、演劇やイベントを楽しむにあたり、さまざまな障壁のある人たちに対して、舞台内容や障害などに応じた配慮を「準備」し、文化芸術を鑑賞する人たちの可能性を広げるサポート手段のこと。これまで観劇を希望する聴覚障害のある人や観劇サポートを行いたい劇団・劇場などから相談を受け、実践を積み重ねています。

本年度は、国民文化祭にいがた2019 全国障害者芸術・文化祭にいがた大会「みんなが楽しめる演劇鑑賞会」や「あいちトリエンナーレ2019」、「BeSeTo 演劇祭26 + 鳥の演劇祭12」、アートポイントさっぽろ2019「札幌劇場祭」座・れら「私」舞台手話通訳付き公演などの視察を行いました。また、「2019年度とっとり手話まつり in とっとり」では、「みんなで一緒に舞台を楽しもう～TA-netの取り組み」をテーマに講演を行い、アクセシビリティ環境の推進の必要性を訴えました。

さらに、視察によって蓄積した知見を反映させ、平成29年度に「観劇サポートガイドブック～視覚・聴覚障害者編」を制作。今年度は最新情報を加えた改訂版を制作すると同時に、情報へのアクセスをしやすくするため電子書籍化も実施しました。

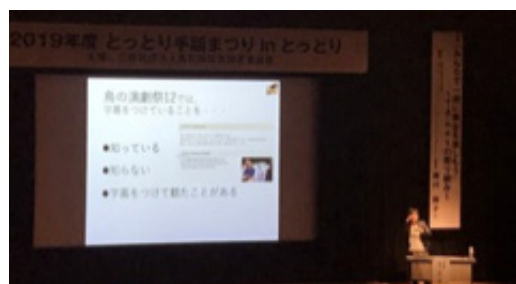


「観劇サポートガイドブック～視覚・聴覚障害者編」

発行日：2020年2月末日

発行部数：500部 電子書籍は無料

(公式サイトとブログからダウンロード可)。
紙媒体は、講習会等のテキストとして有償で配布予定(価格未定)。



「2019年度とっとり手話まつり in とっとり」において「みんなで一緒に舞台を楽しもう～TA-netの取り組み」の講演を行った

事業の効果

聴覚障害のある当事者がフェスティバルを視察 アクセシビリティ向上を目指して助言・意見交換

現在はさまざまなフェスティバルが開催されていますが、アクセシビリティ面は不十分な現状があります。また、サポートが準備されていても、当事者として不十分な場合があります。アクセシビリティ面の質の向上を目指し、聴覚障害のある当事者による現場視察及び担当者との意見交換を行うことで、状況の改善に取り組みました。視察対応は必ず、聴覚障害のある当事者が手話通訳を同行して行うことで、当事者目線での現場視察をもと

に有意義な意見交換ができました。

「鑑賞サポートガイドブック」は当初平成29年に編集され、情報もその当時のものであるため、改訂版を作成し、日々進歩している機材などを現状にあわせて紹介。また、紙の冊子は手渡しや在庫管理などの手間がかかるため、電子書籍化することで容易に情報にアクセスできるようにしました。

最新の観劇サポート情報の電子書籍化で 必要な人に、広く、容易に情報を届けることが可能に

これらの活動を通し、フェスティバルなどにおけるアクセシビリティ、とくに聴覚障害のある人向けのサポートの質の向上が期待されます。「鑑賞サポートガイドブック」については、これからも現状に即して常に新しい情

報を加えて改訂し、電子書籍化して誰でも読むことができるようにすることで、必要な人に情報を広く届けることが可能になります。

アクセシビリティへの意識にはばらつきがある 文化庁からの呼びかけによる浸透を期待

聴覚障害のある当事者として多くの舞台・美術に関するフェスティバルに向けて助言活動を行うのは当法人にとっても初めての試みでした。文化庁受託事業ということで先方にも話を通しやすく、終演後に担当の方とお会いして経緯や現場での苦労なども知ることで、今後どう継続していけるか、また当事者団体とのかかわり方についても先方にお伝えする良い機会となったと思います。また、国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭については全国持ち回りのため、ノウハウを継続してお伝えしていくのが難しく、障害全般に関する知識をもった担当者1～2人のみでは担えないこともあるため、文化祭全

体のアクセシビリティを高めるためには、計画段階からの当事者団体とのかかわりが不可欠と考えます。各種のフェスティバルは今後も増えると思われませんが、アクセシビリティへの関心がどの程度かは担当者によって大きく左右され、企画段階から働きかけることが重要だと痛感しています。また、当法人から「アクセシビリティについて助言させていただきたい」と伝えても、イメージが湧きにくいところもあるようです。文化庁から通達のようなかたちで主催団体などへの呼びかけがあると、アクセシビリティへの意識はより高まるのではないのでしょうか。



1. 観劇終了後、字幕担当者に取材。情報交換を行った
2. 字幕は共有アプリで配信。観客はタブレット端末を借りて、手元で見ることができる

事業名

バリアフリー演劇の制作・公演を通じた、 障害者の平等参加型の共生社会実現へ向けた芸術活動

団体名

Palabra 株式会社

所在地：東京都中野区

URL：https://palabra-i.co.jp/

事業概要

演劇公演にバリアフリー字幕の表示、舞台上での手話通訳、音声ガイド、舞台説明を加え、あらゆる人がともに楽しめるものとして上演する「バリアフリー演劇」。その第一弾として制作した作品「ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち」を、全国から福祉関係者が集う滋賀県大津市にて開催の「アメニティフォーラム」と同時開催で上演。バリアフリー演劇の広報及び認知度の向上を図った。また、バリアフリー演劇第二弾「星の王子さま」では、障害当事者にとって、よりわかりやすい情報保障のあり方を研究・開発した。

字幕、手話通訳、音声ガイドなどを加えた あらゆる人が楽しめる「バリアフリー演劇」

実施内容

4回の公演が全て満席、アンケートでも高評価 バリアフリー演劇への期待の高さを実感

バリアフリー演劇第一弾として制作した「ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち」を、全国に広く届けたい。そのような思いにより、全国から福祉関係者が集う「アメニティフォーラム」と同時開催で、公演とアフタートークを実施。バリアフリー字幕の表示、舞台上での手話通訳、音声ガイド、舞台説明などを付加するバリアフリー演劇の広報を図り、認知度を上げることができました。

障害当事者に共同演出を依頼したバリアフリー演劇第二弾「星の王子さま」は、当初2回の公演予定でしたが、たくさんの方から申込みがあり、追加公演を含め4回の公演となりました。満席のため、最終的にお断りした方も100名近くとなり、バリアフリー演劇への関心の高さが感じられました。アンケートでも大変高い評価をいただき、今後、一般公演に向けて積極的に取り組んでいきたいと考えています。

●バリアフリー演劇

「星の王子さま」

開催日：2019年8月17日・18日

場所：レパトリーシアターKAZE

参加者数：371名（全4公演） 入場料：無料

「ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち」

開催日：2020年2月7日・8日

場所：びわ湖大津プリンスホテル

参加者数：304名（全2公演） 入場料：無料



事業の効果

映画のバリアフリー字幕、音声ガイド制作の実績を活かし あらゆる人に開かれた演劇を制作

当法人は、映画をはじめとする文化芸術を本当の意味で開かれたものになりたいという思いから、長年、映画へのバリアフリー字幕や音声ガイド制作・上映に取り組んできました。その実績を活かし、視聴覚に障害のある人ももちろん、盲ろう者、精神障害、身体障害、お年寄りか

ら子どもまで、あらゆる人が安心して観賞できる開かれた演劇のバリアフリー化を推進しようと考え、本事業を企画しました。「星の王子さま」の公演には盲ろう者も5名ほど来場いただき、個別対応を含め、観客一人ひとりが安心して観賞できる環境づくりを心がけました。

申込みや問合せ段階からバリアフリー対応を実施 字幕や手話も表現の場として演出

音声ガイドを会場の中にオープンで流し、舞台の背景にはバリアフリー字幕を表示。舞台上では手話通訳者が、鑑賞者に見えやすい位置で俳優の動きに合わせてセリフを表現しました。それにより、会場内の全ての人が同じ舞台を楽しめる状態となりました。

また、東京演劇集団風の舞台監督・浅野佳成氏を中心に、聴覚に障害のある廣川麻子氏と視覚に障害のある大河内

直之氏に共同演出を依頼。バリアフリー字幕・舞台手話通訳・音声ガイドの制作において細かい部分まで全面的に演出してもらうことにより、芸術表現としての完成度が高まりました。事前申込み、問合せ、当日の対応も含め、公演そのものだけでなく、前後の対応業務もバリアフリー化を前提とした体制を整えました。

安心して映画・演劇鑑賞ができる場をつくれば 誰もが文化芸術のすばらしさを体験できる

本事業は、障害の有無にかかわらず、安心して演劇観賞ができる場をつくることを目指したものです。そのような場ができることは、これまで映画や演劇の鑑賞をあき

らめてきた人たちにとって、日本の文化芸術のすばらしさを知るきっかけになります。そしてそれは、より豊かな社会へつながることだと考えています。

障害の状況によって情報を得るタイミングが異なる 遅れて知る人も申し込めるよう対策が必要

公演情報を広報する際、障害のある人の状況によって情報を得るタイミングに差が出てしまいます。たとえば、点字チラシを受け取るタイミングは、インターネットやチラシから情報を得る人よりも少し遅れるため、満席で申込みないようなことも起こり得ます。この時差を埋める対策は必要と感じています。今回の事業では、障害の

ある人が直前に申し込んでも対応できるよう、あらかじめ一定程度の席を確保することで情報の拡散スピードのバランスをとるようにしました。今後は一般公演も行い、日本における新たなバリアフリー演劇の確立を目指していきたいと考えています。

事業名

The Garden 「ガーデン」

団体名

公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

所在地：東京都豊島区
URL：https://www.geigeki.jp

事業概要

ロンドン・パラリンピックを機に創作された、障害のある人によるパフォーマンス「The Garden」の日本版リ・クリエーション。オリジナル作品の共同演出を担当したグラント・モルディ氏を招聘し、2020年8月末に行われる東京芸術劇場前広場での初演を目指し、障害のあるパフォーマーを公募。3日間にわたってオーディション・ワークショップを開催した。

ワークショップ形式のトレーニングを重ね 障害のある表現者による公演開催を目指す

実施内容

障害のあるパフォーマーを募集しオーディション・ワークショップを開催

障害のあるプロの俳優やスタッフによるイギリスの劇団「グレイアイ・シアター・カンパニー」の芸術監督ジェニー・シーレイ氏が演出を務めた「The Garden」。本作品は、オリジナルストーリーと音楽にあわせて、長くしなるポールの上に登り、揺れながらパフォーマンスを行います。本作品の日本人キャスト版を新たに制作するにあたり、障害のあるパフォーマーを募集し、オーディション・ワークショップを実施しました。ワークショップの講師は、ロンドン・パラリンピック開会式の部分演出も行ったグラント・モルディ氏が務めました。合格者はオーストラリアで行うワークショップ形式のトレーニングで技術を習得し、令和2年8月末の初演を目指します。

The Garden 「ガーデン」

●オーディション・ワークショップ

開催日：2019年11月20日～22日

場所：エアリアル・アート・ダンス・プロジェクト

参加者数：8名

参加費：無料



事業の効果

オーディションによって選ばれたキャストたちが 演出家、スタッフと力をあわせて一つの舞台をつくる

本事業では、「The Garden」日本版のパフォーマーの一般公募を行いました。8名の中から、オーディションによって選ばれた4名のメンバーは、言語と文化の壁を越えて演出家とコミュニケーションをとりながら、難易

度の高いパフォーマンスに挑戦。キャスト、スタッフが力をあわせて一つの作品をつくります。その経験を通じて、新しい発見や自信、人と協働することの喜びが生まれることが期待されます。

障害のある人たちによる実演芸術の力が 障害のある人とそのアートに対する認識を変える

通行者の多い東京芸術劇場前の「広場（公園）」＝「屋外」にて上演することにより、障害のある人の創造表現活動に興味や関心のある層だけでなく、障害のあるアーティストによるパフォーマンスを見たことがない関心の低い層に対しても、出会いの機会を創出することができます。障害当事者をパフォーマーとする実演芸術の力で、

障害に関する鑑賞者の認識を実体験を通じて改め、障害のある人に対する理解を促進する効果があると考えられます。さらに、ツアー公演を通じ、全国で障害のある人側・社会側両方のバリアを取り払うきっかけにできると考えています。

育成、実演、ツアー展開を段階的に行い 全国で障害のあるアーティストの活動可能性を模索

障害のあるアーティストが活躍する場を創出するため、段階的に活動を展開します。今年度はワークショップによるパフォーマーの育成、次年度は東京での実演、3年目以降は東京を含む地域の公共劇場・駅前広場などで公

演します。3年の間に徐々にネットワークを広げ、全国で障害に対する理解を促進し、障害のあるアーティストの雇用創出と活動の拡大を図ります。



「The Garden」のオーディション風景



オーストラリアで行なったワークショップ形式のトレーニング



事業名

社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から生まれるパフォーマンス作品の創作と発表

団体名

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

所在地：東京都豊島区

URL：https://www.children-art.net/

事業概要

生きづらさを抱えながら、それぞれの環境で暮らす障害のある子どもたちや大人たち。彼らが音楽やダンスなど文化芸術活動を通してつながり、ともに作品を創作するワークショップを実践。その模様をドキュメントブックとして発行し、社会に発信した。障害のほか、被虐待経験の生い立ちや引きこもりなどの理由から、社会との接点をもちづらい人たちが表現活動をすることで社会参加を促進する。彼らの居場所が多様な人たちの交流の場として開かれ、共生社会の実現につながると考える。

障害のある子どもたちが音楽やダンスを通して 他者とながら、ともに作品を創作する

実施内容

障害のある子どもたちのパフォーマンス作品を発表 ドキュメントブックを制作し社会に発信

各施設で当該施設の入所児童のみを対象にワークショップを行い、9月以降は二つの施設が合同してワークショップを行いました。音楽やダンスなどの表現活動によって、子どもたち同士やアーティストとの交流を深めました。最終回は施設の職員に向けた発表会。これらの活動の記録からドキュメントブックを制作しました。

●ワークショップ

開催日：2019年①8月13日、②8月14日、③9月23日、④10月6日、⑤12月28日、⑥12月29日、⑦2020年1月25日

場所：①児童養護施設カルテット(さいたま市)、②二葉むさしが丘学園(小平市)、③朝霞市民会館ゆめばれす(リハーサル室)、朝霞市中央公民館(音楽室)、⑤学園坂スタジオ(小平市)、⑥児童養護施設カルテット、⑦埼玉県三芳町立竹間沢公民館(音楽室・和室)

●発表会

開催日：①2020年2月15日、②2月16日

場所：①二葉むさしが丘学園、②児童養護施設カルテット
参加者数(ワークショップと発表会)：小学2年生～高校3年生及び施設退所者 計15名

●ドキュメントブック制作

タイトル：「にじいろのなかまたち～ふたつの児童養護施設の交流ワークショップの記録～」

仕様：B5変形サイズ/カラー/20ページ

内容：全9回のワークショップと発表会の記録、アーティストエッセイ、施設職員のコラム、子どもたちの声を掲載。付録CDには、子どもたちによる歌や演奏、ダンスワークの様子を収録した。

刊行：2020年3年末日

価格：非売品(ドキュメントブックはホームページからダウンロード可)



1.二つの施設の子もたちが入り混じりダンスを楽しんだ自然と身体もほぐれていった。 撮影/保手演歌織
2.ライブ演奏に合わせてダンス。新しい刺激にワクワクする子どもたち
3.太鼓のリズムで



事業の効果

コミュニケーション能力に課題がある子どもたちに、自発的に社会とのつながりをもつ場を

1年目の参加者である児童養護施設の子どもの中には、自己表現や対人関係を築くコミュニケーション能力に課題があるとされる子どもも少なくありません。また、社会とのかかわりに困難を抱えている施設退所者もいます。音楽やダンスを介して他者との創造的なかかわりあ

いを経験することで、社会から孤立することなく、主体的かつ自発的に社会とのつながりをもつことができるような場をつくるとともに、発表会やドキュメントブックで本事業の成果を周知することで、共生社会の実現につなげていきたいと考えます。

各施設内から地域のワークショップへ 子どもたちが交流しながら表現活動を行う

当初は各施設内でワークショップを行い、その後、合同ワークショップ、地域の文化施設等を活用したワークショップへと展開。子どもたちがゆるやかに交流しながら、音楽やダンスなどの表現活動に取り組みました。子ども同士やアーティストとの関係を少しずつ深めること

で、前向きな気持ちになり、地域社会とのつながりもできると考えています。最終回では、施設職員に向けた発表会を実施。ドキュメントブックを制作するなど、活動内容と結果を一般社会にも周知していきます。

バリアフリー対応を完備した施設で開催 職員と連携して安全にワークショップを行う

一つの施設は、バリアフリー対応の設備。地域の子育て拠点の機能も強化し、体育館貸出やお祭り、オープンカフェなど地域とのつながりを重視しています。もう一つの施設は、高齢者施設への転用も想定した構造で、障害

のある人にも使いやすい環境です。また、施設の職員や専門スタッフとも連携して、参加者のプロフィールや配慮すべき点を共有。アーティストとアシスタントで安全な実施体制を整えています。

全9回のワークショップ終了後、子どもたちから「またやりたい」という声

都内を中心に活動をしていた当法人にとって、さいたま市の施設で活動を行うこと自体新しい試みでした。地域や施設によって、児童養護施設の実態が異なることもわかり、子どもたちだけでなく、施設職員の方々にも施設間交流の大切さについて気づきがあったようです。子どもたちは、自分が暮らす施設外に出かけることが刺激となり、期待感をもってスムーズに活動に参加できたようです。

それぞれの個性として表れたと思います。普段とは異なる子どもたちの表情を見ることができたという職員の声もありました。

高校生中心の施設と小学生中心の施設という組み合わせでしたが、年上の子どもたちがサポートしてくれる場面もありました。音楽やダンスによって自分を表現するとき、障害や境遇といった、彼らが抱えている課題は、

全9回のワークショップが終わった後、子どもたちからは「またやりたい!」という声が多くあがりました。職員の方々からも継続の希望があり、彼らが表現活動を楽しみながら社会とつながる場の必要性を強く感じています。施設同士が交流することや、地域に出かけていくことの効果も明らかになったので、子どもたちや職員の方々の意見も聞きながら、今年度の手法に改善を加え、よりよい事業のあり方を検討したいと思います。

事業名

オイリーカート・メソッドを学ぶ

—知的障がいや重度重複障がいの子どもと家族のための多感覚演劇を創る人材育成事業

団体名

特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク

所在地：東京都調布市

URL：http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn/index.html

事業概要

当法人は、障害のある子どもや医療的ケアが必要な子ども、その家族に対して、多感覚演劇の機会を提供することで、子どもの文化権の醸成と家族の喜び・記憶づくりを図っている。また、舞台芸術に関するさまざまな職業のためのインフラ確立も目指している。本事業では、多感覚演劇の先駆者「劇団オイリーカート」を招聘し、ワークショップを開催した。

五感を刺激するオイリーカート・メソッド 地域に多感覚演劇の人材を育てるイベントを開催

実施内容

障害のある子どもへの多感覚演劇の先駆者「劇団オイリーカート」 その創設者からメソッドを学ぶ

英国で40年近くにわたり、さまざまな障害のある子どもを含む全ての子どもたちに、五感を刺激する演劇体験を提供している「劇団オイリーカート」。その創設者で演出家・前芸術監督のティム・ウェブ氏と、美術家クレア・ド・ルーン（アマダ・ウェブ）氏を招聘しイベントを開催しました。五感を刺激するイマジナティブなパフォーマンスを構成する要素と手法、それを支える環境の整え方について、セミナーとワークショップを通して学習。最終日の成果発表会には障害のある子どもや障害のない子どもたちも参加しました。

●セミナー

「すべての子どもたちの演劇とその環境整備」

開催日：2019年9月20日

場所：シャロームみなみ風

参加者数：50名

参加費：1,000円

●ワークショップ

「インクルーシブな多感覚パフォーマンスを創る」

開催日：2019年9月21日～23日（3日間）

場所：シャロームみなみ風

参加者数：20名

参加費：15,000円

※対象はパフォーマー（俳優・音楽家・舞踊家）、演出家、劇作家、美術家、プロデューサー、公立文化施設担当者、研究者、コミュニティワーカーなど。



1.相談しながらワークショップを進めるウェブ夫妻 2.感覚を刺激する遊び、表現を探っていく

事業の効果

インクルーシブ・シアターの地方ニーズが増加 地域で継続的に活動できる人材教育が必要となった

インクルーシブ・シアターを続けるなかで、地域へのツアーを求められることが増えてきました。しかし、地域限定の助成や、観客数に比して大人数の団体では交通費だけでも多額となり、不可能な状態です。平成28年にオイリーカートの芸術監督らを招聘しトレーニング機会を提供したところ、北九州や名古屋、仙台からも参加がありました。これらのことから一過的なツアーではなく、

地域で継続的に活動を提供する人材を育てることに新たなビジネスモデルを思い描くようになりました。鑑賞回数が増えるにつれ、重度の障害のある子どもたちの反応にも大きな変化を感じます。少しでも多くの地域に同様の団体をつくるための意識の改革とトレーニング機会をつくることこそが、真の課題解決につながると考え、今回のイベントを企画・開催しました。

地域に多感覚演劇を担う人材を輩出すれば、障害のある子どもたちの演劇鑑賞機会が増加する

本事業を実施するにあたり、以下のような狙いを設定しました。

- ・ オイリーカートのインクルーシブ・シアターの理念・手法を学ぶ機会を提供することによる担い手の育成
- ・ 公演の質の向上
- ・ 環境整備のみならず、芸術創造における合理的配慮
- ・ バリアフリー化のありかたの伝播

- ・ 地域で孤立しがちなアーティストやコーディネーターたちのネットワーク化
- ・ 社会的認知の向上

上記の結果、知的障害のある子ども、重度・重複障害のある子ども、医療的ケアが必要な子どもの鑑賞機会の増加が期待できます。

環境のバリアフリーだけでなく「創造のバリアフリー化」が課題となった

今回のイベントは、環境のバリアフリーのみならず、「創造のバリアフリー化」の必要性を知るプロジェクトとなりました。初めての場所や初めての人に会うことが苦手な障害のある子どもや大人、決まっていないことに対応できない障害のある子どもや大人を招き入れるために必

要なことはなにか。インクルーシブ・シアター開催において、準備すること、親や介護者とのパートナーシップの結び方について考え、実践する機会となりました。

障害のある子どもたちと家族が安心して舞台鑑賞を その実現への一歩はまだ遠いと痛感

知的障害、重度・重複障害のある子どもや医療的ケアが必要な子どもを抱える家庭の多くは、いまだ自分たちの子どもが舞台芸術を鑑賞する機会は得られないと考えています。誰もが安心して、リラックスしながら楽しめるインクルーシブ・シアターが存在し、障害のない兄弟姉妹とともに家族揃って鑑賞できる—それが当たり前のことなのだ、改めて社会に認知していただく機会になるように努めました。

しかしながら、メディアも継続的に報道してくれず、困難さを覚えています。あと一歩が遠いように感じています。



3. 成果発表会の模様

事業名

横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業

団体名

横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム事務局
(中核となる団体：特定非営利活動法人 STスポット横浜)

所在地：神奈川県横浜市

URL：https://welfare-stspot.jimdo.com

事業概要

重度・重複障害や精神障害のある人に対して、障害福祉サービス事業所に出向き、文化芸術体験を提供した。また、横浜市内の地域文化拠点10カ所にヒアリングを行い、過去の公演や展示、教育普及プログラムにおける障害のある人の鑑賞・参加状況に関する実態調査を実施。ヒアリング対象者が集まり、議論を行った。さらに、年度末の報告会で成果を周知し、報告書をウェブサイトで公開した。

重度障害のある人が文化芸術体験の機会を広げるには？ 福祉団体と芸術団体が連携して可能性を模索

実施内容

障害のある人の体験事業、施設職員の障害理解教育、発信交流事業を実施

文化芸術体験事業では、市内2カ所でそれぞれ計3回のプログラムを実施。「“触れる”からはじまるダンス」では、施設職員も含めた全員が自由に踊る開放的な時間・空間を楽しみました。「たいせつなものを包む、彩る」では、各自が用意した「だいじなもの」を使って衣装づくりに参加しました。また、横浜市の地域文化拠点である区民文化センター10カ所に対して、来館時の障害のある人への対応状況や、過去の公演や展示、教育普及プログラムにおける障害のある人の鑑賞・参加状況を聞き取る実態調査を行い、共通課題を抽出しました。

●重度障害のある人等との文化芸術体験事業

リエゾン笠間×入手杏奈「“触れる”からはじまるダンス」

開催日：2019年12月11日、2020年1月15日、22日

場所：障害者支援施設 リエゾン笠間

参加者数：計56名

アーティスト：入手杏奈（ダンサー・振付家）

アシスタント：坂本弘道、涌田悠

手をつなぐ、触れる、見つめるから始まり、チェロの演奏に合わせ、体を揺らしたり、人と触れあったりするなど、自由に体を動かす。

みどり福祉ホーム×伊東純子「たいせつなものを包む、彩る」

開催日：2019年10月21日、11月11日、18日

場所：みどり福祉ホーム 参加者：計56名

アーティスト：伊東純子（デザイナー・アーティスト）

アシスタント：佐々木徹、山下真理子

1日目は、ビーズクッションやファー素材のボールなどの素材に親しんだ。2日目はそれらの素材と、各自が用意し

た「だいじなもの」を使って装飾に挑戦。最終日には、作った衣装を身につけてファッションショーを行った。

●文化施設職員等の障害理解教育事業

横浜市区民文化センターにおける障害のある人へのバリアフリー対応に関する調査

1. ヒアリング調査

開催日：2019年8月～10月

対象者：横浜市区民文化センター職員

2. 横浜市区民文化センター職員との意見交換

開催日：2019年11月20日

場所：障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール

参加者数：8名

3. 神奈川県ライトセンターへのヒアリング

開催日：2019年12月17日

場所：神奈川県ライトセンター

聞き手：柏本友美子・福谷優希（横浜市旭区民文化センター サンハート）、田中真実・川村美紗（STスポット横浜）

●発信交流事業

年度末に報告会を開き、その成果を広く周知する。また報告書を作成し、ウェブサイトで公開した。

報告会 「障害福祉と文化芸術の関わりを考える 福祉施設／文化施設から見えたこと」

開催日：2020年2月6日

場所：障害者スポーツ文化センターラポール上大岡地域連携室

参加者数：49名

ゲスト：沼部勝（横浜市港南区民文化センター ひまわり

の郷 副館長）、和田剛（障害者スポーツ文化セン

ター ラポール上大岡 管理運営課）

事業の効果

障害のある人が身近に文化芸術にふれられるよう 地域の施設や団体とプラットフォームを創出

近年、障害のある人たちをはじめとする、劇場に足を運びづらい人たちに向けた取組が行われ始めていますが、状況の共有やネットワークの創出までには至っていないのが現状です。また、その成果は各現場に帰属してしまい、さらなる向上へつなげるための議論が十分ではありません

。本事業は、障害のある人が身近な場所で文化芸術にふれる機会を創出するために、地域の文化施設や芸術文化団体と障害福祉についての知見を深め、活動を促進するためのプラットフォームを創出していくものです。

障害福祉と文化芸術分野をネットワーク化 双方の知見をもつ人材の育成が期待できる

重度障害のある人たちとの文化芸術体験事業を行うことで、実施例の少ない重度障害のある人との取組を進めることができ、モデルとなる活動をつくることができます。文化施設職員等の障害理解教育事業では、ヒアリングなどを通して、横浜市内の文化施設職員間のネットワーク

を形成することが期待されます。そして発信交流事業では、その成果を広く周知し、未開拓の層に対してアプローチしていくことができるでしょう。3つの事業を通して、障害福祉と文化芸術の分野の往還を生み出し、双方の知見をもつ人材の育成が期待できると考えています。

障害者福祉の専門団体も企画から参加 社会的包摂を考えながら事業を進めた

事業を行うにあたっては、障害者福祉の専門家である社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団も参画し、企画団体から一体的に取り組むことで万全の体制を築きました。ST スポット横浜は、劇場運営やアートプロジェ

クト運営により、バリアフリー対応や多言語対応に通じており、その実績をもとに社会的包摂を意図して取り組むことができました。年度末に行う報告会は、手話通訳を実施し、情報伝達に対して考慮しながら行いました。

散在している障害のある人への対応ノウハウ 共有を求める声に応えツール開発を検討

重度障害のある人に向けた文化芸術体験の取組事例はまだまだ少なく、障害のある人および福祉施設職員と芸術家の間で議論を重ねながら、参加者のより豊かな体験のあり方を模索していく必要があります。本事業で横浜市内の地域文化拠点に行ったヒアリングからは、現状は障

害のある人への対応のノウハウが散在しており、共有が求められていることが感じられました。今後、各施設で活用できる対応ツールの開発を検討したいと考えています。年度末に開催する事業全体の報告会は、その成果を広く周知する機会とします。



1. そばにいる人と自然に触れあい、それがダンスに。ゆったりとした時間が流れた 2. 持参した「だいじなもの」とファーやビーズクッションを使って、羽織やポーチを装飾 3. 報告会では、調査結果など事業の成果を参加者と共有した

事業名

「誰にとっても来館しやすい、楽しい美術館はどんな場所？」
～聴覚障害者と共に紹介する金沢21世紀美術館～

団体名

公益財団法人 金沢芸術創造財団 金沢21世紀美術館

所在地：石川県金沢市

URL：https://www.kanazawa21.jp

事業概要

「聴覚障害者の美術館へのアクセシビリティを高める」ことを目的に実施。石川県立ろう学校と美術館が連携し、ろう学校における日本手話と日本語の習得、そして地域学習といった学習プロセスを参考に、美術館における作品鑑賞や美術館の楽しみ方をともに考え、企画として実現した。特別支援学校の生徒にとって、美術館を「自分が作品を観る」場所として限定的に捉えるだけでなく、自分が美術館について「発信する」「社会や地域の人たちとつながる」場所として認識できる機会とした。

手話を交えたおしゃべりで、 作品から感じたことを自由に伝え、語りあおう

実施内容

聞こえない人・聞こえる人が一緒に作品を観て、簡単な手話で感じたことを伝えあう

9月23日は「手話言語の国際デー」。石川県立ろう学校文化部の中高生3名が中心となり、聞こえない人と聞こえる人が一緒に展覧会「アペルト11 久野彩子 都市のメタモルフォーゼ」の作品を観て、話しあう作品鑑賞プログラムを実施しました（2回開催）。冒頭に、進行役の生徒が「好き」「なるほど」「同じ」など、意見交換に役立つ簡単な手話を紹介。展示室ではそれを活用しながら互いの感想を発表しました。

「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会 / 展覧会『アペルト11 久野彩子 都市のメタモルフォーゼ』とともに」

開催日：2019年9月23日

場所：金沢21世紀美術館

参加者数：各回6名 計12名

※手話経験不問、手話通訳あり

参加費：無料



事業の効果

誰にとっても「来館しやすく、楽しめる」がテーマ 今後の美術館のあり方を考えるきっかけに

人と人、人と作品が出会い、つながる場としての美術館を目指したい。本事業ではそれを目的として、誰にとっても来館しやすく、楽しみを見つけられる美術館のあり方を地域の人たちと考え、ともに行動しました。聴覚障害のある人の美術館へのアクセシビリティを高める環境や企画の実現のため、当事者やその関係者とつながり、直接意見を聞き、内容へ反映することにこだわりました。

聞こえない人と聞こえる人が作品を鑑賞し語りあう





多様な人々がふれあい、作品に親しむことができる環境づくりを目指す

美術館では、作品を観て感じて考えることができます。本事業では、聞こえ具合を問わず、作品について話しあえること、そして若い世代の聞こえない、聞こえにくい当事者が、美術館でアーティストや美術館スタッフ、ボ

ランティアや研修生などとふれあうことで、将来を考えるきっかけとなるような異世代・異文化交流の機会を目指しました。

聞こえ具合に応じた広報や問合せ窓口を用意 手話通訳は腕章を携帯して視認性を高めた

聴覚障害者の美術館へのアクセシビリティを高めることを目的に、広報においては、電話だけでなくメールやFAX 番号を明記し、問合せ方法に対して配慮したり、会場案内に関しては、掲示物の設置場所や文字の大きさ、イラスト等の表記を工夫しました。また、手話対応につ

いては、ろう者同士の日常会話使われることの多い「日本手話」を導入したり、手話通訳者は腕章を携帯し、すぐわかるように配置をするなど、参加者の聞こえ具合に応じた様々な工夫を凝らしました。

生徒と参加者から継続を望む声も 生徒の要望に耳を傾けつつ定例化していきたい

進行役の生徒3名が醸し出す、一所懸命かつ朗らかな雰囲気の中、12名の参加者は作品を観て、感じたことを伝えあう時間を楽しんでいました。開催後、ろう学校の生徒と参加者から継続を望む声が上がっています。今後は生徒の要望などに耳を傾けつつ「夏休み中に準備を行

い、9月23日の手話言語の国際デーに連携事業を行う」流れが定例化できるよう、学校活動との調整を行い関係機関に働きかけていきます。また、客観的な活動評価についても支援を得たいと思っています。



1. 石川県立ろう学校文化部の中高生が中心となりプログラムを実施
2. 「好き」「なるほど」など簡単な手話を学ぶ
3. 事前に学んだ簡単な手話で意見を交換
4. 他の人の感想から新たな気づきも生まれた



事業名

熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業

団体名

特定非営利活動法人 若狭美&Bネット

所在地：福井県三方上中郡若狭町

URL：http://gallery-kumagawa.main.jp

事業概要

福井県障がい者アート公募「きらりアート展」の質、量の向上を図るとともに、障害のあるアーティスト及びアート作品を発掘。また、障害のあるアーティストのアート制作拠点「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」の指導者の資質向上を図り、活動の充実を目指す。それらの集大成として、熊川宿若狭美術館で"障害者アート"、子ども美術、現代美術を同時並列に展示。"障害者アート"の独自性を発信し、理解を深めてもらうなど、真の共生社会の実現に向けての取組を進めた。

"障害者アート"の魅力を知ってほしい 多くの個展や公募展を通して、作品の魅力を継続的に発信

実施内容

子どもの作品、現代美術と同時並列に展示し"障害者アート"の独自性を発信

大自然の生態ドキュメントやファンタジーアニメに対する感動を絵画に再構成し、生命の躍動を豊かに表現する田中铁也氏。「きらりアート展」を機に65歳から絵を描き始め、直線と曲線による色面構成の作品を制作する中西軍治氏。個性豊かな障害のある2人の作家の展覧会を「小さな絵画」というテーマで展示しました。また、障害のある人や特別に支援を必要とする児童・生徒の芸術の才能を発掘し、地域住民に感動を与えてきた障がい者アート公募展「きらりアート展」の第10回も開催。さらに、豊かな遊びや生活によって生み出された子どもたちの作品展「いのちがやく子ども美術展」も実施しました。障害のある人の作品展と、子どもや現代美術の作品展を同時期に並列的に開催することで、来場者が"障害者アート"への理解を深めることにつながりました。

田中铁也展／中西軍治展「小さな絵画」

開催日：2019年8月10日～10月7日

場所：熊川宿若狭美術館

入場者：3,965名 入場料：無料

障がい者アート公募 第10回「きらりアート展」

開催日：2019年10月17日～10月28日

場所：バレア若狭

入場者数：5,076名 入場料：無料

いのちがやく子ども美術展 in WAKASA

開催日：2019年12月1日～23日

2020年1月5日～20日

場所：熊川宿若狭美術館

入場者：4,135名 入場料：無料



事業の効果

"障害者アート"の存在価値を高めるために 美術館の展示を充実させた

幼児から障害のある人まで、幅広い対象のアート制作活動の支援、不登校生や学校中退者の支援、若者自立就労支援など、多様な活動を行ってきた若狭美&Bネット。"障害者アート"や子ども美術の存在価値をより高めたい、それにより現代美術の範疇を広げたいと考えました。そのためには「熊川宿若狭美術館」の企画展示を充実させ、社会に広く発信していくことが重要だと考え、上記

の展示会を開催。これらの活動は日本遺産「熊川宿」に付加価値を与えるものであるとも考えています。また、第10回を迎えた福井県唯一の障がい者アート公募「きらりアート展」も充実させ、これまで以上に障害のある人に生きがいを与え、地域社会において障害のある人への理解を深めていくことを目指しました。

"障害者アート"への理解が深まり 作品のレンタルや購入希望が増加

「熊川宿若狭美術館」も2年目を迎えて認知度が高まり、地元地域だけではなく国内外からの入場者も増えてきました。展示会などの充実により"障害者アート"への理解も深まり、絵画作品のレンタル希望や購入希望の増加という効果も出ています。美術館を作業所として開所した就労支援B型事業所も、現在7名が利用。これまでに

プロ級作家が6名育ち、そのうちの1人である江戸雄飛は富山県高岡市の展示会に福井県代表として出品しました。また、本事業で個展を行った田中鉄也氏や、田中さかえ氏、武田千香氏は、綾部市のギャラリーきりん舎に招待されて3人展を開催しており、今後も作家として活躍する人材が出てくると期待されます。

プロ作家を育て、生かしていくため 絵画のレンタル事業なども展開

今後も"障害者アート"の展示会を積極的に開催するとともに、障害のあるアーティストの独自性の高い作品を広く発信し、「もう一つの現代美術」として"障害者アート"作品の社会的認識をより高めていきます。そのためにホームページの充実を図るなど情報発信に努め、障がい者アート公募「きらりアート展」の10回記念作品集を関係者に配布するなど、その成果と重要性を社会に広く周知していく予定です。また、「若狭ものづくり美学

舎きらりアート部」の活動のなかで養成されたプロ作家を活かし、絵画作品のレンタル事業を推進するとともに、町のふるさと納税返礼品とすることができるよう指導・支援を高めていきます。そして、今後もより多くのプロ作家を育成していきます。



1. 障害者アートの展示会と同時開催した「いのちかがやく子ども美術展 in WAKASA」
2. 10回目を迎えた「きらりアート展」
3. 「田中鉄也展」では生命の躍動を表現した作品を展示

事業名

共生社会実現のための「表現未満、」プロジェクト

団体名

特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ

所在地：静岡県浜松市
URL <http://cslets.net/>

事業概要

「表現未満、」とは、誰もがもっている自分を表す方法や本人が大切にしていることを、とるに足らないことと一方的に判断しないで、この行為こそが文化創造の軸であると捉える考え方。それは「その人」の存在を丸ごと認めていくことでもある。良い、悪いといった単純な二項対立ではなく、お互いのことを尊重しながら、新しい価値観が生まれ、ともに生きる社会を皆で考えていくことを目指し、平成 28 年から「表現未満、」プロジェクトを行っている。本年度は、公式ウェブサイト開設や雑多な音楽祭、トークシリーズやシンポジウム、観光ツアーを開催した。

あらゆる違いを乗り越え、個人の存在を丸ごと認めることで 新たな価値観を創造していく

実施内容

公式ウェブサイト、全国公募の音楽イベントなど多彩なプログラムの文化祭によって「表現未満、」を体感

福島の地域活動家・作家の小松理虔氏とのコラボが実現し、「表現未満、」の公式ウェブサイトを立ちあげました。当団体スタッフや外部ゲストの参加、一般の方からの投稿など、盛りだくさんの内容となりました。

また、福祉施設アルス・ノヴァや障害のある人たちの日常を体感できるさまざまなイベントやトーク、雑多な音楽祭、ライブといった総勢 50 以上の演目を、50 日間にわたり実施しました。12 月 6 日～8 日の 3 日間は「第 2 回表現未満、文化祭」を開催。出店や神輿、映画上映会、クラブイベントやシンポジウムには、子どもから大人まで幅広い層の参加がありました。

「表現未満、」ウェブサイトを開設

<http://cslets.net/miman>

開催日：2019 年 7 月 1 日～2020 年 3 月 31 日

- ・たけし文化センターに滞在中の体験を綴る「小松理虔さん 表現未満、の旅」
- ・当団体のスタッフによる障害福祉施設アルス・ノヴァでの日々の発見記録「目撃情報 by STAFF」。
- ・一般の皆さんからの目撃情報や投稿でつくられる「となりの表現未満、」。
- ・外部ゲストによる「話す考えるシリーズ」や活動ニュースなど

HYO-GEN MIMONTH (表現未満、ス)

～「表現未満、」を体感する 50 日間!!!!～

開催日：2019 年 11 月 3 日～12 月 21 日

場所：たけし文化センター連尺町、のぶあ公民館

参加者数：1,797 名 (総数)

参加費：入場無料、寄付制

- ・「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!! 3～」
- ・「手さぐりの表現未満、トークシリーズ」記録、身体、食といったキーワードから「表現未満、」を探る。
- ・「しえんかいぎ」哲学者や編集者など多彩なコメントーターたちと福祉事業をアートの視点で議論。
- ・「表現未満、を観測しよう」障害福祉施設アルス・ノヴァで起こっている「表現未満、」を観察。

●「第 2 回表現未満、文化祭」シンポジウム

開催日：2019 年 12 月 8 日

【第 1 部】表現の多様性～私たちが伝えたいこと

ゲスト：岡部兼芳 (はじまりの美術館 かんちょー)、津口在五 (鞆の津ミュージアム 学芸員)、木ノ戸昌幸 (NPO 法人スウィング リジチャー)、久保田翠 (認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ代表)

【第 2 部】表現の可能性～他者・社会と接続するために

ゲスト：藤浩志 (美術家・秋田公立美術大学教授)、小松理虔 (地域活動家)、久保田翠 (認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ代表)

事業の効果

絵画造形以外では重度知的障害のある人の芸術活動は少ない 新しい芸術の価値観を提示

近年、障害のある人の文化芸術活動は障害福祉分野と文化芸術分野双方から機運が高まっています。障害のある人の芸術活動の大半は、「絵画・造形」といった美術的作品制作が中心で、障害のある人の経済的な自立に大きく貢献するようになりました。しかし、重度の知的障害の

ある人の絵画造形以外の芸術活動は全国的にも例が少ないといえます。当法人は「表現未満」プロジェクトを通じて既存の文化芸術に対し新しい価値観を提示するとともに、地域資源としての役割を果たし、共生社会実現のため具体的なアクションを起こしたいと考えています。

観光ツアーやトークのネット配信で、メディア取材や観光客の増加などの効果も表れた

本事業のウェブサイトによる発信、トークなどのネット全国配信、地域の人々で行う「表現未満」文化祭の実施を通して、周辺地域そして全国に「表現未満」の理念を伝えることができました。全国紙からの取材も増え、その広がりを感じています。また、障害のある人たちの

日常にふれる機会をつくることによって、今までにない体験を提供し多様な価値観と出会う機会を創出。動画閲覧数は順調に上昇し、全国からの観光客の増加など、その具体的な効果が数値に表れています。

2020年以降地道に広げる方策を実行 障害のある人を含めた共生社会を実現させたい

昨今の芸術や表現活動の状況を見ても多様な価値観を享受していくことが難しくつつある社会のなかで、その人の存在を全肯定することにつながる「表現未満」の考え方はますます必要であると感じています。2020年の国家的大イベントで終わりではなく、地道に

広げていく方策（各種メディアの開発）を実行していきたいと考えています。そのためには、事業を継続させることで、障害のある人を含めた共生社会を実現させていきたいと思っています。



1



3



2



4

1.シンポジウム「表現の可能性～他者・社会と接続するために」 2.「HYO-GEN MIMONTH (表現未満、ス)」のチラシ 3.街を練り歩く、文化祭の神輿 4.雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!3～

事業名

CONFUSION INCLUSION

～ウゴクカラダ、海をつなぐ～

団体名

認定特定非営利活動法人 ポパイ

所在地：愛知県名古屋市

URL：https://mo-ya-co.info/

事業概要

当法人のダンス集団「ウゴクカラダ」が、オーストラリアの団体「キーストン・クルー」と共同制作している、映像・音楽・ダンスを融合させた舞台芸術「CONFUSION INCLUSION」。公演・ダンスワークショップを平成28年度に名古屋で、29年、30年度にオーストラリアで開催し、今年度は、オーストラリアチームを再び名古屋へ招聘し、ダンスワークショップ・公演・トーク交流会を実施した。

障害福祉・国際交流・舞台芸術を体感できる公演で 多様性のある社会に向けたきっかけづくりを

実施内容

オーストラリアの障害者団体とダンスワークショップを開催「混乱」「包摂」の先にあるものを感じる機会に

ダンスワークショップは、参加者同士のサインの送りあいや好きな動きによる自己紹介からスタート。キーストン・クルーのダンサーがリードして音楽に合わせて大きな動きをつくり、ペアによる「鏡の動き」を体験。最後は、ウゴクカラダのダンサーがファシリテーターとなり、社交ダンスを体験しました。当初緊張していた参加者も3日間のリハーサルで徐々に慣れ、公演当日はすばらしいパフォーマンスを披露しました。

CONFUSION INCLUSION

～ウゴクカラダ、海をつなぐ～

●コミュニティダンスワークショップ

開催日：2020年1月30日

場所：愛知県芸術劇場中リハーサル室

出演：ウゴクカラダ（ポパイ）、キーストン・クルー
（豪ルーセランサービス）

参加者数：15名 参加費：無料

●公演&トーク交流会

プログラム

「The Magic Pool」（キーストン・クルー）

「Let's Dance Together」（ウゴクカラダ）

「CONFUSION INCLUSION」（キーストン・クルー、ウゴクカラダ）

開催日：2020年2月2日

場所：愛知県芸術劇場小ホール

パネリスト：北瀬真紀（ウゴクカラダダンサー）、沼田真由み（ウゴクカラダ講師）、クリア・アペルト
愛知県芸術劇場スタッフ（トークゲスト）

参加者数：137名 入場料：無料



事業の効果

福祉、表現、国際交流 障害のある人との接点拡大を目指す

昨今では、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の施行もあり、多様性が尊重される傾向にあります。しかし、現実的に障害のある人との接点がない人たちは、関心をもちににくく、障害のある人たちや福祉事業者の活

動・交流範囲は狭いままであるのが実情です。本事業では、福祉だけでなく表現活動や国際交流など、障害のある人との接点を拡大。障害のある人たちはもとより、多様な人たちが尊重しあって創造的な暮らしを営む社会づくりへの契機となることを目指しました。

ダンスによって、感情表現が引き出されたワークショップ トーク交流会はコミュニケーションを深める機会に

15名の参加者とダンサー15名、総勢30名でのワークショップでは、当初はコミュニケーションがうまくいかず戸惑ったり、思わぬ動きに大笑いをしたり、さまざまな反応があり盛り上がりました。アンケートには「とて

も楽しかった」という回答が多数寄せられました。また、公演後のトーク交流会には、障害のある人やその家族も多数参加し、質問や意見を発表。コミュニケーションを深める場をつくることができました。

言葉の壁を越え、ダンスによって体や意識が変化 今後もコラボレーションを続けていきたい

キーストン・クルーとウゴクカラダの支援員ダンサーは、ダンスは未経験にもかかわらず、練習を繰り返すうちに、徐々に体や意識の変化が見られるようになりました。作品創作の過程で全員の気持ちが一つになり「このすばらしいコラボレーションを継続しよう！」と約束を交わし

ました。はるか海を越えて出会い、踊り、それぞれの文化や福祉観を交換することで、まるで冒険のような発見やときめき、変容が生まれるのだと実感しました。これからもコラボレーション活動を続けていきたいと思っています。



ワークショップでは輪になってサインを送りあい、好きな動きで自己紹介をした。当初は劇場の雰囲気にも圧倒されたが、すばらしいパフォーマンスをやり遂げた。

事業名

障害者の文化芸術国際交流事業 「2019 ジャパン×タイ プロジェクト」

団体名

障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会

所在地：滋賀県近江八幡市

事業概要

東南アジア有数のアートセンターであるバンコク芸術文化センターを共同主催者として、「2019 ジャパン×タイ プロジェクト」を実施した。東南アジア初の大規模なアール・ブリュット展、パフォーマンスアーツの発表、アジア研究フォーラム（国際交流基金アジアセンターと共催）を開催。障害のある人が生み出す芸術を介した相互交流を通して、日本とタイの両国が互いの文化の違いや共通性を共有し、人的なネットワークの構築を図った。また、本プロジェクトを東南アジア諸国にPR することにより、これまであまり認知されていなかった障害のある人の文化芸術活動への関心を、東南アジア諸国において高めることを目指した。

障害のある人による芸術を介する文化交流 東南アジア初のアール・ブリュット展に約 15 万人が来場

実施内容

美術やパフォーマンス、交流プログラムなどから 日本とタイ、互いの文化の違いや共通点を共有

障害のある人が生み出す芸術を介した相互交流を通して、日本とタイの両国が互いの文化の違いや共通性を共有し、人的なネットワークの構築を目指しました。

アール・ブリュット展には約 15 万人が来場。国際研究フォーラムには、日本、タイ、ミャンマー、マレーシア、フィリピン、ラオス、インドネシアの実践家が集まり、美術、舞台表現、社会福祉、医療などの実践発表とディスカッションを実施しました。

「2019 ジャパン×タイ プロジェクト」

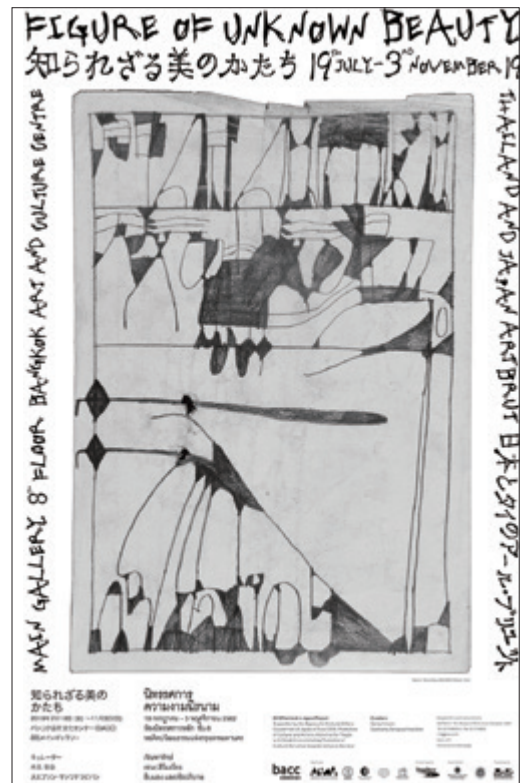
開催日：2019 年 7 月 19 日～ 11 月 3 日

場所：バンコク芸術文化センター

入場者数：約 15 万人

参加費：無料

- ・「Thailand and Japan ART BRUT - Figure of Unknown Beauty 日本とタイのアール・ブリュット～知られざる美のかたち」展
- ・障害のある人とプロのミュージシャンによるパフォーマンスアーツ
- ・日本とタイの障害のある人の家族会の交流プログラム
- ・国際研究フォーラム「アジアにおける障害者の芸術活動」



事業の効果

障害のある人が生み出す独創的で優れた芸術は多い しかし、創造・発表する機会はまだまだ少ない

日本には、障害のある人の生み出す独創的で優れた芸術が多くあります。ところが創造・発表する機会は少ないのが現状です。また、海外での発表や文化芸術活動を通

じた交流の促進、海外と日本の人的ネットワーク構築も求められています。本事業では、日本の障害のある人の優れた文化芸術活動を海外に発信し、その成果を国内外



に周知します。それにより障害のある人の文化芸術活動の促進と誰もがお互いを尊重しあう豊かな社会の基盤づ

くりにつなげることを目指しています。

障害のある人の文化芸術活動の認知を促進 作品出展や舞台公演などの機会を創出する

日本の障害のある人による優れた文化芸術が世界的に評価されていることを広く発信することで、国内外での障害のある人の文化芸術活動の認知が促進され、障害のある人の出展や舞台公演への出演など、作品を発表する機

会を創出できます。また、国内外のメディアや当委員会構成団体などを通じて情報発信することで、より多くの方の関心を深め、障害のある人の文化芸術活動への参加者増加につながることが期待されます。

日本語・タイ語に対応した電子書籍の図録を作成 舞台公演ではタイ語での情報保障に配慮した

出展者・出演者一人ひとりに写真掲載や取材対応などの意思確認をし、それを尊重する体制を整えました。展覧会においては、多言語（日本語／タイ語）に対応した図録（電子書籍）を作成。また、舞台芸術公演においては、タイ語での情報保障にも配慮するなど、参加アーティストや観客が、障害の有無、日本・タイの言語の違いにかかわらず事業にアクセスできる環境を創出しました。



1. 「Thailand and Japan ART BRUT - Figure of Unknown Beauty 日本とタイのオール・ブリュット〜知られざる美のかたち」展 日本から 28 名、タイから 23 名の作品を展示した 2. 日本の障害のある人の文化芸術活動の国際的認知度を高められた 3.4. 障害のある人とプロミュージシャンによるパフォーマンス

事業名

「障害のある人の芸術作品の海外発信～展覧会からマーケット開拓まで」

団体名

特定非営利活動法人 障害者芸術推進研究機構

所在地：京都府京都市

URL：http://tensai-art.kyoto/

事業概要

障害のある人の芸術活動にかかわる人々が、それぞれの専門性を超えて意見交換を行う「障害のある人の芸術活動推進のシンポジウム～障害のある人の芸術活動を通じた自立と社会参加の推進のために～」を開催した。創作活動推進と才能の発掘、作品の公開展示や保存、販売や活用についての議論を展開。また、推進・支援団体や文化芸術行政、美術館、それぞれの立場から現状を報告し、討論を展開した。

海外の事例に学ぶシンポジウムで 障害のある人の芸術作品の市場開拓を模索

実施内容

NYでの障害のある人の美術教育の現状報告 芸術活動推進に向けて討論を展開

クィーンズ美術館の展覧会ディレクターである、Hitomi Iwasaki氏の基調講演では、同美術館での取組や「オール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」と呼ばれ、分け隔てられてきた作品が、美術館での展覧会やアート・フェアにおいて、現代美術の文脈に組み込まれ始めた現状が紹介されました。また、ディスカッションでは、今後の障害のある人たちの芸術作品の展示や市場開拓などについて、海外事情を踏まえた日本の障害のある人の芸術作品の海外展開に向けた条件整備やアーカイブ、継続的な作品・人的交流が重要であることを確認しました。

●基調講演

「障害者を主体とする美術教育の現状～ニューヨークからの報告」

講師：Hitomi Iwasaki（クィーンズ美術館（ニューヨーク）展覧会ディレクター／キュレーター）

●パネルディスカッション

「障害のある人等への芸術活動の推進に向けて」

開催日：2019年11月3日

場所：京都経済センター3階 会議室F

参加費：無料

参加者数：40名

登壇者：Hitomi Iwasaki、村上圭子（京都市副市長）、大野木啓人（NPO 法人障害者芸術推進研究機構 副理事長）、伊東宣明（NPO 法人障害者芸術推進研究機構 プログラムディレクター）

進行：重光豊（NPO 法人障害者芸術推進研究機構 副理事長）





事業の効果

欧米の障害のある人の芸術に関する情報収集と人的交流を図る

本事業では、有益な情報の収集や交流をより早く進めるため、ニューヨークのクイーンズ美術館との人材交流や作品交流を一部前倒して始めました。本事業により、欧米の障害のある人の芸術に関するさまざまな有益情報やアート・マーケット事情の紹介、日本の障害のある人の芸術作品の海外展開に向けた条件整備を共有。またシ

ンポジウムを通じて、人材交流や作品交流を行うことを目指しました。本事業ではシンポジウムと併せて、1月下旬より欧州3カ国での障害者芸術の関連施設を調査・見学と知見交流や意見交換、アーカイブによる紹介等のPRを行いました。

障害のある人たちの作品販売のルールを設定し環境を構築

障害のある人の文化芸術創作活動による社会参加については、将来にわたって持続可能な環境づくりが求められています。当機構は、その一環として作品の販売により一定の収入が得られる環境の構築を目標としています。シンポジウムや欧州視察を通じて、欧米における障害のある人の芸術作品販売のルールや権利に対する意識、作品評価(価格設定)、流通の仕組みやコレクションの形

成方法、ブランディング構築において必須要素である展示デザインなどを調査・整理してまとめていくことで、国内におけるシステム形成に向けた土台づくりにつなげたいと考えています。また、本事業を通して、海外での作品展の開催、販売の実施などについて、その過程や方法をまとめ、今後の各地での実践の参考となることを目指しています。

本事業を継続し国内外で作品・人的交流を促進

現在、日本国内においては「障害者芸術」の認知が進んでおらず、アート・マーケットの醸成に必要なコレクターも皆無に等しい状況のなか、本事業の海外での展覧会や作品販売の実績を上げながら国内を開拓するのは有効な方法です。今後は、事業を通じて継続して海外の関係団体・機関等とのネットワークを広げ、作品・人

的交流を促進していきます。また国内においても、行政や企業、ギャラリーとの連携や協働を進め、ファンづくりやコレクターの掘り起こしとマーケットの開拓・醸成を進めていきます。さらには、アーティストだけでなくプロデューサー面においても、若い人材を担い手として育成することを目指します。



パネルディスカッション「障害のある人等への芸術活動の推進に向けて」



基調講演「障害者を主体とする美術教育の現状～ニューヨークからの報告」
(Hitomi Iwasaki 氏)

事業名

障がい者の芸術表現を「アート市場」で問う

団体名

社会福祉法人 素王会アトリエ インカーブ

所在地：大阪府大阪市

URL：http://incurve.jp

事業概要

当法人は、障害のある人の作品を現代アートとして「市場」に発表し、文化芸術の分野が障害の有無を問わず、優れた才能をもつ者が活躍できる場となることを目指す。アートディーラー、マイケル・フィンドレー氏は、アートの価値を「社会的価値」「本質的価値」「市場的価値」の3つに分類している。障害のある人の作品は、多くの来場者を動員する「社会的価値」を有し、観客の心を揺さぶる「本質的価値」がある。しかし、「市場的価値」においてはいまだ確立していない。障害のある人が障害の有無に左右されず、優れた才能をもつ者として文化芸術活動に参加できる共生社会の実現に貢献したい。

"障害者アート"の域を超え、現代アートの世界へ 障害の有無を問わず、優れた才能が活躍できる場を創造

活動内容

知的障害のあるアーティストの創作環境を整え、独立を支援

アトリエ インカーブは、社会福祉法人素王会のアートスタジオとして平成14年に設立されました。18歳以上の、知的に障害のある現代アーティストたちの創作活動の環境を整え、彼らが作家として独立することを支援しています。現在25名が所属し、平成17年、ニューヨークで開催されたアートフェアに出品以降、海外・国内の美術館やギャラリーで展覧会が企画・開催されています。平成22年にアトリエ インカーブのアーティスト専門の「ギャラリー インカーブ | 京都」を開廊。国内のみならず、ニューヨークやシンガポールなど海外の現代アート

フェアに積極的に出展しています。また、出版事業部の「ビブリオ インカーブ」では、障害福祉の概念を広げるような書籍やアーティストの画集、DVDを企画発行し、作品をもとにオリジナルグッズの制作・販売も行っています。

※開催中止

2020年3月19日～22日 アートフェア東京2020への出展



1. アトリエ インカーブの本部



2. 18歳以上の知的に障害のある現代アーティストの独立を支援

事業の効果

継続出展するアートフェアの売り上げは右肩上がり 今後は総額 300 万円以上を目指す

当法人は、国内最大規模のアートマーケット「アートフェア東京」に毎年出展しています。直近3年間の売り上げは、約50万円（平成28年）、約100万円（平成29年）、約200万円（平成30年）と右肩上がりに伸びています。本事業では、会場内でのブースサイズを拡大し、売り上げ総額300万円以上を目指しています。ア

ーティストの作品を大規模にアピールすることで、来場者に強烈なインパクトを与えたいと考えました。来場者数約6万人に向けて、障害のあるアーティストの作品を「現代アート」として、作品のクリエイティビティに焦点を絞ってアピール。彼らの作品に市場価値があることを証明します。

海外からのお客さま対応に備え、展示物や印刷物の情報は日英併記に

海外からのお客さまとのコミュニケーションが多数予測されるため、「バイリンガル対応」に力を入れ、準備を行います。全ての展示作品のタイトル・画材・制作年などの作品情報は日本語・英語で併記したほか、リーフレッ

トやパンフレットには、当団体の事業内容及びアーティスト紹介などの情報を日本語・英語で併記しています。また、イベント会期中は、英語対応できるスタッフの配置を予定しています。

国内の実績を活かし海外のアートフェアに出展 ノウハウを伝授し次世代の人材を育成

令和2年以降も障害のある人の文化芸術活動を推進すべく以下の取組を行います。

- ① アートフェア東京や国外のアート市場で培った実績・ノウハウを活かし、ニューヨークのアートフェア「VOLTA NY」「NADA」、シンガポールのアートフェア「ART SG」など海外のアートフェアに出展することを目指します。
- ② 「アートフェア東京」への出展を継続し、一般的なア

ーティスト市場から共生社会の実現に貢献します。

- ③ 「障害のある人の文化芸術活動」を担う人材育成に向けて、「アート活動に取り組む福祉施設のスタッフ」「障害のある人の創作活動に関心のある学生」を対象に、当団体独自のノウハウを直接伝授し、当法人以外にも「アートフェア東京」などのアートイベントに出展する団体が生まれることを目指します。



3. 現在は25名のアーティストが所属している



4. 障害のあるアーティストたちの活躍の場を国内外につくりたい

事業名

舞台鑑賞サービス ショーケース&フォーラム 2019

団体名

一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構

所在地：大阪府大阪市
URL：https://jdp-arts.org/

事業概要

杖をつき、車いすに乗り、耳が聞こえにくいために補聴器や字幕を必要とする高齢者も、現代社会においては障害のある人であると考えられる。障害のある人にとって快適な環境をつくることは、誰もが参加できる社会をつくることにつながる。当法人は、鑑賞をサポートすることで、誰もが文化芸術を楽しめる環境の創出を目指している。文化芸術の鑑賞及び表現による心豊かな社会づくりに貢献することを目的とし、鑑賞サービスをデザインする事業を行っている。本事業では、劇場・ホール、実演団体、民間企業、NPO 法人など、舞台芸術関係者を対象にさまざまな鑑賞サービスを紹介するショーケースとフォーラムを開催した。

さまざまな字幕や音声ガイドを普及させ より多くの障害のある人に舞台芸術を鑑賞してほしい

実施内容

短編演劇作品などを3種類の字幕サービスで鑑賞 弱視の人には手元のタブレットによるモニター参加を

第1部のショーケースでは劇団6番シードによる短編2作品にアニメーション字幕と多言語字幕をつけて上演。第2部フォーラム「舞台芸術における字幕サービス」では、リアルタイム字幕を実施し、字幕サービスが聴覚障害のある人だけのものだけでなく、知的・発達障害のある人や子ども、高齢者、外国人、障害のない人にとっても有効なサービスであり、簡単に導入できることを体験して

もらいました。紹介した字幕サービスについては、特徴や利用方法、価格など詳細情報をまとめたパンフレットを配布。また、弱視の人の舞台鑑賞をサポートする新たなサービスとして、手元のタブレットでライブ映像を見ながら鑑賞する「動画配信サービス」のモニタリングを実施しました。

「舞台芸術鑑賞サービス

ショーケース&フォーラム 2019」

開催日：2019年9月11日

会場：江戸東京博物館・小ホール

内容：

【第1部】ショーケース 劇団6番シードによる短編作品2本上演

【第2部】フォーラム「舞台芸術における字幕サービス」

パネリスト：松本陽一（劇団6番シード代表、演出家、脚本家）、佐野英志（株式会社 Beautiful Ones 代表取締役）

コーディネーター：南部充央（一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構）

参加者数：90名

参加費：2,000円（交流会参加の方は別途3,000円）

舞台芸術関係者のための
舞台芸術鑑賞サービス
ショーケース&フォーラム2019

2019年9月11日【水】<開場14:00>
ショーケース&フォーラム 14:30~16:00
江戸東京博物館・小ホール

1部 ショーケース 劇団6番シードによる短編作品2本上演
2部 フォーラム「舞台芸術における字幕サービス」

第1部目は、演出字幕、多言語字幕など、多様な字幕サービスを体験していただける演劇を上演し、その仕組みなどについて解説します。

主催 一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構 (JDPA)
共催 一般社団法人全国立文化施設協会
協賛 劇団6番シード、株式会社Beautiful Ones、株式会社ジアップス、株式会社ソライズ

お問い合わせ先 一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構 事務局
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 江戸東京博物館 小ホール

事業の効果

字幕や音声ガイドが、障害のある人にとっての舞台芸術のインフラ

現在、字幕や音声ガイドなどの鑑賞サービスに実験的に取り組む劇場・ホール、実演団体などがあります。しかし、その成果を誰もが利用できるサービスとして提供しているところは多くありません。誰もが簡単に利用でき

るサービスとして発信していくことで、字幕や音声ガイドなどの情報サービスが劇場・ホールにおけるインフラとして整備されていくことを目指します。

アンケート回答から導入可能性を分析 舞台鑑賞者の増加を図り導入を検討する施設も

参加者にアンケートをお願いしたところ、「今後導入したい」という回答が82%でした。また、導入しない理由としては、「費用面で厳しい」「事業が少ない」の理由などがありました。実際に字幕を体験したことにより、障害のある人だけでなく、外国人や子ども、高齢者、障害のない人にも有益な鑑賞ツールであるという理解を広めることができました。劇場のバリアフリーだけでなく、

多く、舞台鑑賞者の増加を図るためにも、今後前向きに取り組む施設が増えれば、障害のある人や外国人などの舞台芸術の鑑賞機会の増加につながると予想されます。実際、当事業に参加した東京と千葉の2つの施設が、ショーケースで披露した字幕を付けることになり、事業目的の結果を残すことができました。

各地で開催し鑑賞サービスの普及を図りたい

今後は各地で同ショーケース&フォーラムを開催し、字幕や音声ガイドなどの舞台芸術鑑賞サービスの普及を目指します。舞台のライブ映像を手元のタブレットで見ってもらう弱視者向けのサービスをモニタリングした結果、高評価を得られました。どこの施設でもできるように、より簡易なサービス内容を検討します。

要となります。多くの施設の客席は電波状況が悪いと予想されるため、全国の施設の電波環境の調査を実施したいと考えています。調査結果をもとに、都市部だけでなく、地方の施設でも字幕がつけられるように技術サービスを改良し、より安価で安定した字幕を提供することを目指します。

字幕システムには、Wi-Fi 接続や充実した電波環境が必



日本語、英語、中国語、韓国語、かんたんな日本語など、最大5カ国語の字幕をタブレットに表示できる「多言語字幕」



「遠隔リアルタイム字幕」はリアルタイムで音声情報を文字情報に変換し、スクリーンやタブレットに表示できる

事業名

Exploring - 共通するものからみつける芸術のかげら

団体名

一般社団法人 日本現代美術振興協会

所在地：大阪府大阪市

URL：www.apca-japan.org

事業概要

本事業では、日頃から障害のある人の表現活動に直接的、間接的にかかわっている現代美術作家6名に協力してもらい、自身の作品と「共通するもの」をテーマに、障害のある作家と作品をそれぞれ推薦する形式で構成するグループ展を開催した。会場では作品について語り合う対話型鑑賞プログラムを実施し、展覧会の記録集、カタログも制作。現役の美術作家とともに展覧会を開催することで、障害のある人のアート作品の理解を深め、社会的認知を高めることを試みた。

障害の有無を超えて、表現者同士という対等なフィールドで 作品の芸術的価値を理解するグループ展

実施内容

現代美術作家の作品と、彼らが推薦する障害のある作家の作品を同時展示 多様な視点から作品や作家の魅力にアプローチ

現代美術作家6名が自身の作品と「共通するもの」をテーマに、障害のある作家・作品を1名ずつ推薦。多様な視点から、キーとなる要素や言葉を丁寧に拾い上げ、作品の魅力や作家の芸術性にアプローチしました。作品の魅力を語りあう対話型鑑賞プログラム、展覧会の記録集・カタログも制作。

グループ展「Exploring - 共通するものからみつける芸術のかげら」

開催日：2019年10月1日～20日

場所：大阪府立江之子島文化芸術創造センター enoco

参加費：無料

入場者数：809名



事業の効果

福祉業界を中心とする障害のある人のアートの枠組みを外し、作品の芸術的価値の理解を深めていく

障害のある人のアート活動や作品に社会的注目が高まっていますが、その範囲は福祉業界が中心で、美術専門家（キュレーター、美術評論家、ギャラリスト、アートマネジャーなど）との接点が乏しいのが現状です。障害の有無にかかわらず、独創的で芸術性の高い作品は、相応

の発表機会や情報発信が必要だと考えます。本事業では、現役の美術作家が障害のある作家とともに展覧会を開催することで、芸術的価値の観点から、障害のある人のアート作品の理解を深め、社会的認知を高めることを試みるものです。

障害のある人の作品が芸術的観点から評価され 普通に存在し、鑑賞される社会環境の醸成を促す

この事業でとくに重視した点は、美術分野の人と福祉分野の人との丁寧な相互交流を促すこと。障害のある人の作品を芸術的観点から捉え、その魅力をあじわうことです。このような展覧会を継続して開催することで、障害

のある人のアート作品も一般の美術作品と同じように芸術的観点から評価され、普通に存在するような社会環境の醸成を目指します。

会場には段差フリーやユニバーサルトイレを整備 国際的な発信も考慮し、日英バイリンガルに

展覧会場には、バリアフリー対応（段差フリー、ユニバーサルトイレ等）が整備されています。また、障害のある

人のアートを含む日本の現代美術の国際的な発信の重要性を考慮し、基本的に日英バイリンガルとしました。

社会的に認知を広げていくためには動員数が必須 会場の選定、メディアへの働きかけにも配慮したい

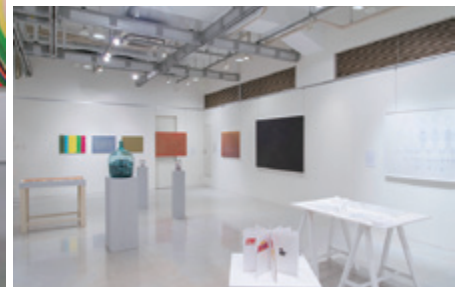
社会的に認知を広げていくためには、もっと多くの方に足を運んでもらうことが必須であると感じました。そのためには、展覧会場の選定の工夫や、新聞やTVなど

のマスメディアに取り上げられるような働きかけの必要性を感じました。

現代美術作家による解説、作品に集中できる展示が奏功した

展示の仕方・見せ方の工夫として、① 障害の有無が分かるような形には取立てせず、作品そのものに集中して鑑賞できるように心がけ、② 現代美術作家による作品解説文を添え、作品同士や言葉（解説文）がお互いの作品を説明しあうような構成としました。これらの仕掛けにより、作品の魅力や作家の芸術性にアプローチする入り口を提示できたように思います。

来場者アンケートからも「障害のある人と言われなければ、普通にアーティストとして見ていた。二人のアーティストが互いに影響しあっている感じが面白い」「僕たちとは違う視点、観点なのでは？と思わされた。アートによるつながりを感じた」「みんな同じアーティスト。アーティストにしかできないコミュニケーションが羨ましく思えた」などの感想が寄せられました。



Exploring 展 展示風景 写真提供 / (一社)日本現代美術振興協会 撮影 / 仲川あい

事業名

日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート

団体名

公益財団法人 日本センチュリー交響楽団

所在地：大阪府豊中市

URL：http://www.century-orchestra.jp/

事業概要

大阪府内の特別支援学校の子どもたちを学校単位で招待して開催する「特別支援学校コンサート」。当事業は日本センチュリー交響楽団の自主事業として 10 年以上継続して実施しており、平成 30 年度までの参加者は、特別支援学校の子どもたちと教員を合わせ、延べ 1 万名以上に上る。今後も引き続き実施していくことにより、特別支援学校の子どもたち・教員への鑑賞機会を継続的に提供していく。

特別支援学校の子どもたちにオーケストラ鑑賞を 音楽の力で、感性や生きる力を育ててほしい

実施内容

特別支援学校の子どもたちをコンサートに招待 指揮者体験やリズム演奏で、オーケストラを身近に体験

本事業は大阪府内の特別支援学校の児童・生徒を国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）に招待し、オーケストラコンサートを楽しんでいただく、10 年以上続いている恒例行事です。公演には指揮者体験コーナーなど、特別支援学校の子どもたちが積極的に参加できるような演目を取り入れたり、全員でリズム演奏（手拍子）をする場面を用意したりなど、オーケストラをより身近に体験してもらえるよう工夫しました。特別支援学校の子どもたちだけではなく、日頃、児童・生徒の皆さんにつきっきりの教員の方々にも、この公演の時間は、オーケストラを楽しんで聴いていただけるよう取り組んでいます。また、市内の特別支援学校が一堂に会するため、学校同士の交流の場ともなっています。

特別支援学校コンサート

開催日：2020 年 2 月 4 日

場所：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）

参加者数：1,880 名

参加費：無料

対象：大阪府内の特別支援学校の児童・生徒、教員



1. 2. 3. 指揮者体験コーナーの様子

事業の効果

普段音楽を聴く機会の少ない人に音楽を届けたい さまざまなボランティア活動の一つとして開催

日本センチュリー交響楽団は、普段音楽を聴くことのない子どもたちのための教育プログラムや、病院や特別支援学校への出張演奏、毎年無料で行う「星空ファミリーコンサート」など数々のボランティア活動を行っています。「特別支援学校コンサート」もその一つとして、特

別支援学校の児童・生徒にオーケストラのコンサートを楽しんでもらおうと、10年以上前に始めました。毎年、1,000名以上に鑑賞機会を提供することを目標とし、今年度も1,880名に参加していただきました。

会場は大阪府下で最もバリアフリー対応が進んだ施設 車いすやベッドのままでも鑑賞できる

演奏会場である国際障害者交流センターは、障害のある人の「完全参加と平等」の実現を図るシンボリックな施設として平成13年に建てられました。大阪府下で最も障害のある人が利用しやすい、設備が整った施設です。多目的ホールは座席が約1,500席あり、床の段差がコント

ロールできるオート座席のため、前席はフラットにして車いすやベッドのまま生徒に鑑賞してもらいます。また、聴覚障害のある生徒にはなるべく前で鑑賞してもらうようにして、音の振動が伝わりやすい環境にしました。

音楽の力、オーケストラの力により 感性や生きる力を育み、社会参加の促進を

楽しく参加できる演目も組み入れたコンサート体験を通じて、オーケストラがより身近なものになると同時に、コンサートを聴くのが初めての子どもでも無理のない体験機会としていることで、障害のある人たちの社会参加のさらなる促進が期待できます。また、音楽がもつ力、オーケストラのサウンドがもつ力によって、特別支援学

校の児童・生徒の感性や生きる力の育成にも寄与できると考えています。これまで特別支援学校の児童生徒・教員からは参加料を徴収せず社会貢献事業として行ってきました。今後もその形態で事業を維持継続していくことを目標としています。

年1回の恒例行事として定着するも 財政面で継続には厳しさも感じていた

この事業は、当団が大阪府文化振興財団のオーケストラとして活動していた頃より継続しており、参加している特別支援学校は年に1回の恒例行事として捉えています。しかし、これまでは演奏会にかかる経費は全て楽団の事業費から捻出しており、楽団の収支にも少なからず影響していました。特別支援学校の生徒も大変楽しみに

しており、コンサート後の子どもたちの反応は、演奏者たちが満足感に浸れるほどすばらしいものです。この推進事業制度をはじめ、各種の補助制度を活用することで、可能な限りコンサートを継続していきたいと考えています。



4. フラットにしたスペースで車いすのまま鑑賞できる
5. アンコールの様子

事業名

障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト)

団体名

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

所在地：大阪府和泉市

URL：http://www.daisyokyo.or.jp/

事業概要

本事業では、障害がある人の芸術文化事業に携わる人々が横断的なネットワークを形成し、多様な障害種別に応じた支援や相談支援、情報受発信、人材育成などの機能をもつ拠点を形成した。人材育成・鑑賞支援人材の育成のための「鑑賞支援コーディネーター育成講座」「知的・発達障害児（者）に向けての劇場体験プログラム」を作成した。その内容を冊子化し、広く発信。全国の劇場・音楽堂等における鑑賞支援実施状況を調査・検証し、WEB上で発信した。さらに、事例を冊子化し舞台芸術事業者に配布した。

障害のある人の芸術文化事業に携わる人々が ネットワークを形成し、事業の全国普及を目指す

実施内容

多様な分野で活動する人々の事例を紹介 ネットワークづくりの報告と意見交換を行った

さまざまな分野で活動する人たちの事例を通じて、現状の課題や解決に向けた取組や工夫、地域とのネットワークづくりなどについて報告と意見交換を行いました。

障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network

第2回シンポジウム 芸術を開くネットワークづくり

開催日：2020年1月22日

場所：丸の内 vacans (Space1)

参加費：無料 (交流会 1,000円)

参加者数：31名

コーディネーター：大澤寅雄 (株式会社ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員、NPO法人アートNPOリンク理事、日本文化政策学会理事、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー)

登壇者：平塚千穂子 (シネマ・チュブキ代表)、嶺浩子 (公益財団法人熊本県立劇場)、TOMOYA (笹本智哉 (SOCIAL WORKEEERZ 代表)、千葉昇司 (劇団月見座座長))

【第1部】

さまざまな分野で活動する人たちの事例紹介

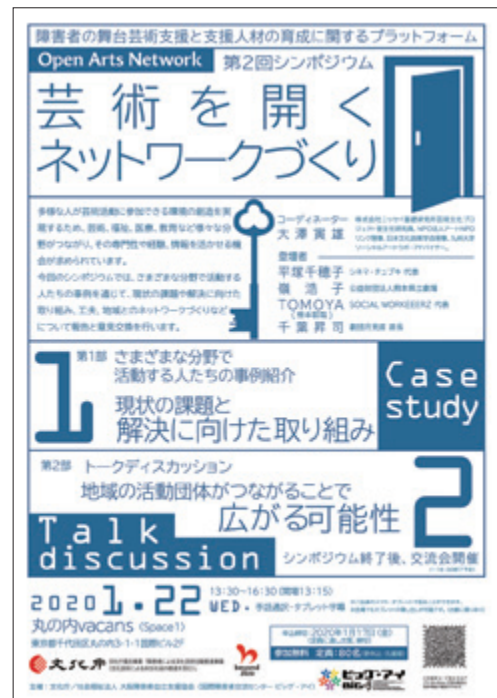
現状の課題と解決に向けた取り組み

【第2部】

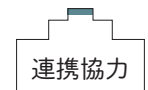
トークディスカッション

地域の活動団体がつながることで広がる可能性

シンポジウム終了後、交流会を開催



公益財団法人熊本県立劇場の嶺浩子氏による事例紹介



事業の効果

障害の特性やニーズに応えるノウハウを学ぶ 鑑賞支援コーディネーター養成講座

本事業によって、芸術・福祉・教育などのそれぞれの専門性やノウハウ、情報の共有と人の交流が実現しました。それにより、多様な人を受容できるノウハウや技術の共有、舞台芸術を享受できる場を創出。障害のある人の表現活動・鑑賞支援に必要な人材を育成し、文化施設や文

化事業に還元していくことで、誰もが舞台芸術に参加し、楽しめる環境の創造につながりました。さらには、文化施設における鑑賞支援の実態調査を行い、現状と課題を把握し、課題解決に向けた活動や人材育成、プログラム開発につなげました。

ノウハウや技術の共有、舞台芸術の場の創出 人材も育成し、文化施設事業に還元する

障害のある人が鑑賞者として参加できる環境が少なく、また事業をつくる側にとっても障害の特性やニーズに応えるノウハウがなく、それを学ぶ機会もありません。そこで「鑑賞支援コーディネーター育成講座」などの講座・研修を行うことで、事業づくりにつなげたいと考えまし

た。また、障害のある人の舞台芸術表現・鑑賞支援拠点を構築することで、支援活動を行う組織や団体のノウハウや専門性、技術を活かす場や情報交換する場をつくり、障害に応じたプログラムの多様化や、情報の波及も目指しました。

多様なニーズに対応する鑑賞サポートツールなど 実地で体験することができた

劇場職員や公演事業制作に携わる方への「鑑賞支援コーディネーター育成講座」では、「知的・発達障害児（者）に向けての劇場体験プログラム」も実施し、その運営体験を、研修内容に加えました。そのなかで、手話通訳、要約筆記、点字資料、拡大文字資料、車いす鑑賞スペー

スや補助犬を同伴しての鑑賞のほか、事前の舞台説明会やイヤーマフの貸出しなども実施しており、さまざまな障害の特性やニーズに対応するノウハウや考え方を実地で学ぶことができました。

継続受講する劇場・音楽堂等が自主事業を開始 アドバイスや事前研修など引き続き支援を行う

「知的・発達障害児（者）に向けての劇場体験プログラム」を継続して行う劇場、「鑑賞支援コーディネーター育成講座」を受講した劇場・音楽堂等が自主事業として取組を始めるなど、全国的な広がりを見せています。そのような劇場・音楽堂等の自主事業としての取組へのア

ドバイス、事前研修などについて、引き続き支援をしていくことが求められています。今後もプラットフォームの役割として、支援活動を行う団体の活動や劇場・音楽堂等が取り組む多様な人が参加できる事業づくりの情報発信、共有できる取組を継続していきます。



SOCIAL WORKEERZ 代表の笹本智哉氏による事例紹介 劇団月見座 座長の千葉昇司氏による事例紹介

第2部トークディスカッションの様子

事業名

こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)

団体名

NPO法人 DANCE BOX

所在地：兵庫県神戸市

URL「NPO DANCE BOX」WEBサイト <https://db-dancebox.org/>

「こんにちは、共生社会」特設サイト <https://hello-diversity.tumblr.com/>

事業概要

本事業は、年齢、性別、国籍、障害のあるなしなどの違いを超えて、いろいろな人が集まる場所をつくり、文化や芸術を通して新しい出会いと会話が生まれることを目指す。障害のある人のパフォーマンスアーツや、ユニバーサル・ミュージアム、若い、介護などをテーマにした公開講座、音楽やダンスのワークショップ、ダンス公演や外国人によるカラオケ大会、視覚以外の感覚をフル稼働するまち歩きツアーなどのイベントを実施。また、専用の公式ウェブサイトを開いた。

文化芸術による共生社会を "現場の目線"で考え、試みるプロジェクト

実施内容

劇場だけでなく、まちを舞台に多彩なテーマを語り、考え、からだで表現する

新長田における共生社会の現状とは？そして、これからは？4つのテーマ（障害のある人／高齢者／日本在住外国人／子育て）にかかわる、この街のキーパーソンが集まる。それぞれが抱える課題や「これから」を共有し、表現しました。

●キックオフ・ミーティング！ Featuring 新長田アートマフィア

「新長田で“共生”について考える 現在→これから」

日時：2019年7月7日

参加者数：140名 参加費：無料

●公開講座

場所：ArtTheater dB KOBE（NPO法人DANCE BOX内）

「障がい者のパフォーマンス・アーツの現在とこれから」

日時：2019年8月3日

参加者数：21名 参加費：無料

講師：森田かずよ（義足のダンサー）×長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院助教）

「触れる・聞く・嗅ぐことから…新しい『ユニバーサル・ミュージアム』を考える」

日時：2019年8月4日

参加者数：24名 参加費：無料

講師：広瀬浩二郎（国立民族博物館）

聞き手：中元俊介（福祉事業型「専攻科」エコーKOBE）
×角野史和（こと・デザイン）×吉川史浩（Water Ground Mountain）

●ワークショップ

「身体に障がいがある人もない人も、ダンスを紡ぐ」

日時：2019年7月29日・30日

参加者数：35名

場所：ArtTheater dB KOBE（NPO法人DANCE BOX内）

参加費：障害のない人 2回 6,000円／1回 3,500円

29歳以下の障害のない人 2回 4,000円／1回 2,500円

身体障害のある人 2回 2,500円／1回 1,500円

講師：アダム・ベンジャミン

●下町芸術祭

「まちを元気に遊合祭 鉄人広場で100人！どんちゃんパレード」ほか

日時：2019年10月20日

場所：新長田のまちなか

参加者数：約1,000名

参加費：無料

演出：バクウォン、趙恵美

●公演

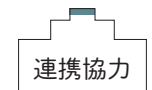
「トラスト・ダンス・シアター (TRUST Dance Theatre) (ソウル) × 森田かずよ × DANCE BOX ダンス公演」

日時：2019年12月7日

参加者数：74名

場所：ArtTheater dB KOBE（NPO法人DANCE BOX内）

参加費：一般 2,000円、障害のある人・介助者 1,000円、ペアチケット 3,000円（当日は+200円）



事業の効果

さまざまな人が暮らす地域の特性を活かし 共生社会実現へのモデルケースを目指す

本事業は、①障害のある人との協働を入り口とした共生社会実現へのモデルケースをつくり、マイノリティとの共生社会づくりにつながることで、②高齢者介護、障害者福祉、教育、文化芸術、市民活動、行政といった多様なセクターが連携して事業を行う礎となる。また、全国的にも先駆的な事例を創出できること、③次世代のファシリテーターやコーディネーターの育成を促進することを目的としています。DANCE BOX が拠点としている新長田は、高齢者、日本在住外国人など、さまざまな社会的肩書や身体的特性、バックグラウンドのある人が暮ら

しています。そのなかで、障害の有無、経済状況や家庭環境、国籍、性別等、一人ひとりの「差異」を優劣という物差しではなく、独自性と捉え、幾重にも循環している関係性を生み出すこと。かかわる人全てが新たな視点や価値観を見出し、社会的弱者に対する理解を深めるとともに、社会における真の共生とは何かを考える機会を創出します。そして、芸術体験というレベルを超えた、障害のある人だからこそ生み出せる舞台の創造も目指しています。

介助経験のあるスタッフを配置 さまざまな鑑賞サポートとバックアップ体制を準備

事業の実施にあたっては、以下のような鑑賞サポート、バックアップ体制をとりました。

- ・ 事業当日に英語対応可能なスタッフを配置
- ・ 介助経験を有するスタッフの配置

- ・ UD トークの導入、手話通訳士の配置
- ・ 劇場という特別な場所での鑑賞・体験だけでなく、重度障害のある人や高齢者対象の場合は生活空間へ向くなど、ニーズに応じたプログラムを開発

より広域での活動を目指して芸術体験事業は毎年継続

今後は、この活動を一つのモデルとして、主に関西地域のより広いエリアでの活動を定着させることを視野に入れています。そのためには人材育成が不可欠と考えます。また、芸術体験の事業は、毎年継続することで事業の周知を図っていきます。育成した人材を中心に、障害のある

育成した人材を中心に活動団体を立ち上げたい

人もない人も参加するパフォーマンスグループを立ち上げるほか、視覚や聴覚の障害がある人との表現活動も手がけていきます。年に1回、国内外の障害のある人や多様な人々の表現活動を展開する団体・組織が集うカンファレンスの開催も予定しています。



1. 「オンブラ・マイ・フ」 田村興一郎&田村みくり 2. 聴覚ワークショップ研究会 3. 無視覚ツアー「花を見る」

事業名

障害のある人の表現と知的財産権に関する 学習・啓発のためのハンドブックの製作と普及

団体名

一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市

URL：http://tanpoponoye.org/

事業概要

アート活動や商品開発によって生み出された技術や表現の価値を守る知的財産権（知財）。さまざまな立場の人にかかわり、保護方法などが複雑な知財について、基本的な考え方や最新の動向を学ぶことのできるハンドブックを製作。さらに、そのハンドブックと、平成30年度に当財団が製作した知財学習のためのアナログゲーム「知財でポン！」を教材として、「知的学習について学びあう研修」「障害のある人のアートと著作権に関する研修」などの学習会や事例検討会を実施し、知財学習機会の提供に努めた。

障害のある人を含む全ての表現者の表現を守り、 尊重するためのハンドブックと学習機会を提供

実施内容

複雑な知的財産権について、ゲームとハンドブックで楽しく学ぶ機会を提供

知的財産権はアーティストやクリエイター、企業、中間支援者など、さまざまな立場の人にかかわり、内容や保護方法は多様かつ複雑です。だからこそ、知的財産権と表現がどのように関係しているのかを身近な感覚で学ぶことができればよいと、平成30年にはゲーム「知財でポン！」を、今年度はハンドブック「表現をめぐる知的財産権について考える本」を製作しました。また、これらの教材を使い、誰もが知財を気軽に、楽しく学べる学習プログラムを開発。表現の発信やものづくりにかかわる人を対象に、学習の機会を提供しました。

「表現をめぐる知的財産権について考える本」

発行日：2020年2月21日

発行部数：1,500部 価格：無料

対象：美術大学でアートやデザインを学ぶ人、障害のある人の表現を社会に発信したい人、ファブスペースの利用者や運営にかかわる人、民芸品や伝統工芸品のメーカーで働く人など

「知財学習プログラム報告セミナー 障害者アートと知的財産権」

2020年2月21日 in 東京（TIME SHEARING 秋葉原）

2020年2月23日 in 東北（せんだいメディアテーク）

2020年3月31日 in 関西（Good job! センター香芝）

※開催中止

2020年3月10日 in 九州（アクロス福岡）

参加費：1,000円（参加者には「表現をめぐる知的財産権について考える本」を贈呈 / オンライン参加は無料）



ハンドブックはホームページからダウンロードできるよう準備中。イベントでも配布している。配布ご希望の方は chizai@popo.or.jp まで



楽しみながら知財について学べるゲーム「知財でポン！」

事業の効果

表現を発信する機会が増えたら知財トラブルも増えた 表現者をリスペクトするきっかけをつくりたい

近年、障害のある人の表現活動やものづくりに注目が集まり、発信の機会が増えています。作品の売買や、作品の二次使用による使用料の発生など、障害のある人の新しい仕事づくりにつながっている一方で、作者や支援者に権利に関する知識がない、認識に相違があるなどの事情から、知財に関するトラブルも増えています。また、インターネットが生活インフラとして普及した現在、デジタルデータを用いた表現やものづくりにおいて現行法では対応できない課題があり、ネットでの知財のあり方

ものづくりにかかわる人が知財を学べば 他者の表現を尊重する土壌をつくることのできる

障害のある人だけでなく、さまざまな分野で表現活動やものづくりにかかわる人たちが知財の本質的な役割や活用について学ぶことにより、他者の表現を尊重する文化の醸成が図られます。また、他者の権利を侵したり、不当な扱いをされる機会を減らすことができますし

知識を得ると「してはいけないこと」が増える 萎縮せずに多様な表現を生み出せるよう配慮が必要

についても議論が始まっています。

当法人は、障害のある人の能力と社会的イメージを向上させるためのアート・プロジェクトの一環として、著作権ビジネスも展開してきました。障害者福祉にかかわる現場では個人の権利を尊重することが重視されます。その延長線上に表現の権利があり、知財の本質も人権にあります。表現をした人に対して、どうリスペクトするか考えるきっかけをつくるのが、本事業の狙いです。

権利を活用しながら表現活動を広げていくような活動を促すため、一定の普及活動と並行し、知財ビジネス支援や新しい仕事づくりの可能性などにもかかわるような仕組みも提示することができると考えています。

知財をめぐる課題が日々刻々と更新され、現時点での「最新の動向」が数年後には古くなっているのではないかと、本事業の調査を通じて感じました。また、知財に関する基礎知識を得ると、「してはいけないこと」がたくさん出てきてしまい、表現を萎縮させる方向に働く恐れもあります。ハンドブック製作委員会では、この問題について議論を重ね、多様な表現を生み出す契機になるような手引きになることを心がけました。



1. 和やかなムードで行われた「知財学習プログラム報告セミナー」 2. 「知財でポン！」を体験。大いに盛り上がる 3. 贈呈されたハンドバックを読みふける参加者

事業名

NEW TRADITIONAL: 障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展

団体名

一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市

URL <https://tanpoponoye.org>

事業概要

「NEW TRADITIONAL」は、障害のある人の創造性と、伝統工芸のもつ技術や美意識を融合させることで、互いが化学反応を起こし、それぞれの分野を超えて新しい価値をつくり出すプロジェクト。現在、日本各地で取り組まれている障害福祉×伝統工芸の事例調査や、茶会、展覧会、つくり手をつなぎ伝える立場の人たちとの議論、そして実例づくりなどを通し、これからのものづくりと社会のあり方について考える機会をつくった。

築 90 年の古民家を会場に新しい生活文化を提案

実施内容

展示、茶会やトーク、ワークショップ これからのものづくりや伝え方を語った

つくり手とつかい手が交流し、これからのものづくりや伝え方について語りあう場をつくることを目的に開催。かつて仕事と暮らしの場であった築 90 年の古民家「足高邸」を会場に、展示会やトーク「ニュートラ談義」、手しごとのワークショップを行いました。「音の茶会」では、絵画や音楽のある空間でゆっくりとお茶を楽しみました。

「NEW TRADITIONAL つくることの喜びにふれる二日間」

開催日：2019年10月13日

(10月12日は台風19号のため開催中止)

場所：奈良県葛城市 足高邸

参加者数：60名

参加費：2,000円(茶会)、1,000円(談義、ワークショップ)

「音の茶会」

茶：花谷龍介 (Good Job! センター香芝)、

守屋里依 (ippo plus / 無由)

菓子：Neu (Good Job! センター香芝)

絵画：澤井玲衣子 (たんぽぽの家アートセンター HANA)

音：「piano language」(作：原摩利彦 & 澤井玲衣子

& sonihouse)

しつらえ：守屋里依

「郷土玩具ワークショップ」

講師：原田翔平 (筑前津屋崎人形巧房)

「ニュートラ談義」

登壇者：白水高広 (株式会社うなぎの寝床代表取締役

永田宙郷 (合同会社 ててて協働組合 共同代表)

藤井克英 (Good Job! センター香芝)

伝統工芸の可能性についてディスカッションし、来場者とともに生活を豊かにするものづくりについて話し合った。そのほか、郷土玩具の絵付け体験や、福岡・八女の地域文化商社「うなぎの寝床」による工芸品、障害のある人の手しごとの魅力を紹介する「GOOD JOB STORE」の出張販売が行われた。



事業の効果

障害福祉と伝統工芸、両者の課題を創造的に解決したい

当法人は、アート活動など、障害のある人のもつ創造性に着目し、アートやデザインを通じた仕事づくりを開拓してきました。今、障害福祉の世界では、障害のある人の賃金が低く、仕事の選択肢が少ない、という課題があります。一方で、伝統工芸の世界では、後継者不

つくり手、つたえ手、つかい手のいい循環をつくる

福祉施設で伝統的なものづくりをしている事例や、伝統工芸のプロセスに障害のある人がかかわっている事例など、各地で調査をしました。そこで気づいたのは、ものをつくるだけでなく、それをどう人に届けるかという視点が必要だということです。時代や環境にあったものの使い方を提案し、使う人たちの感性に響かなければ、継

ものの周辺にある環境や人の交流を豊かにしていく

今回、障害のある人自身が席主となってお茶を淹れ、お菓子をふるまう茶会を実施しました。障害のあるなしにかかわらず、ものを愛でたり、ものを通じた会話や交流が生まれる文化をつくるのが、結局は「NEW TRADITIONAL」が目指す、ものづくりを豊かにする

足、生活文化の変化により製品のニーズが低くなるなどの課題があります。そこで、さまざまな地域の伝統工芸や手しごととつながることで、ジャンルを超えて新しい価値をもったものづくりができないかと「NEW TRADITIONAL」プロジェクトを立ち上げました。

続してもものをつくることができません。そこで必要なのは、ものの価値を見定め、伝えていく人たち。ギャラリストや店舗経営者、ものづくりコーディネーター、デザイナーに声をかけ、いまの時代のものづくりに必要なことをさまざまな視点から議論しました。

重要なプロセスではないかと思いました。また、地域のデザイナーと福祉施設とのコラボレーションによる事例づくりも、地域に根ざした素材や技法の吟味、手で行うことの価値を再確認しながら、新しい仕事づくりにつなげていきたいと思っています。



1



2



3



4

1. 会場となった足高邸。築90年の奈良の古民家
2. 障害のある人がお茶で客人をもてなす「音の茶会」
3. 「ニュートラ談義」。ものをつくること、伝えることについてのトークを実施
4. 障害のある人の新しい手しごとのかたち「Good Job! 張子」

事業名

障がいのある人と共に創る劇団「おきらく劇場ピロシマ」 ～福祉・芸術・社会をつなげる演劇事業

団体名

認定特定非営利活動法人 コミュニティリーダーひゅーるぽん

所在地：広島県広島市

URL：https://www.hullpong.jp

事業概要

演劇に親しむ文化の創造と作品づくりを中心に行い、取組を通じた共生社会への手法を広げていく。体験型ワークショップの開催（3回）。障がいのある人を含む多様な人でつくる劇団の新作公演（1回）。県外での啓発公演・取組の発表を行い、取組の手法を示した（シンポジウムと公演1回）。併せて、各公演で鑑賞支援への取組を行う（セリフのタイミングに合わせた文字サポート）。また、ファシリテーターが講師を務め、フリー参加できる演劇を楽しむ場をつくり（月1回）、その場を通してファシリテーターの育成を行った。

ワークショップから公演、取組手法のオープン化 演劇を通して共生社会実現のモデルをつかった

実施内容

体験型、定例のワークショップを実施 有志で結成した劇団による新作公演を行う

体験型ワークショップでは、参加者同士が演劇の手法で交流し、演劇体験、出会い、つながる体験をしました。ワークショップ参加者から作品出演希望を募りました。

演劇ワークショップ「広場をつくろう」参加メンバーの有志による劇団「おきらく劇場ピロシマ」には、知的障がいや身体障がいのある人、一般の人、演劇経験者が出演しています。「ウタとナンタの人助け」は、2017年度の初演以来、再演を望む声が多く、県内で3回上演。松山市で4回目の公演を行いました。

舞台芸術（演劇）

ワークショップ 2019「広場をつくろう」

開催日：① 2019年9月1日（広島市中央公民館）

② 2019年9月23日（広島市南区民文化センター）

③ 2019年10月22日（広島市心身障害者福祉センター）

講師：永山智行（劇団こぶく劇場代表）

ファシリテーター：山田めい、坂田光平

参加費：無料

参加者数：合計 92名

※開催中止

④ 2020年2月28日・29日（広島市東区民文化センター）

人がつながり共に表現する演劇ワークショップ

おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ

開催日：2019年8月18日、24日、9月29日、10月20日、27日、11月17日、12月22日、1月19日
（3月20日は開催中止）

場所：広島市中央公民館

講師：坂田光平、山田めい

参加費：無料

参加者数：延べ 102名

内容：障がいのある人を含む、演劇をやりたい人が集まり、体を動かしたり、創作をしたりすることを楽しむクラブ。月1回開催。

「ウタとナンタの人助け」 松山公演

開催日：2019年12月7日・8日

場所：シアターねこ

観劇料：一般 2,000円 高校生以下 500円

障がいのある人 1,000円 介助者 1,000円

参加者数：90名（2回公演、座席数 50席）



事業の効果

制作側だけでなく鑑賞者にも共生のあり方を示す 共生社会実現のモデルとして他県にも広げる

この事業は、活動や作品づくりに参加する障がいのある人のみでなく、それにふれる人（作品を観る人）にも、共生のあり方を示すことができると感じています。さらにこのような活動が、現代社会の抱える課題解決の一つ

になる可能性を秘めていることも実感しています。今後、他県など多くの場所で公演し、このモデルを示し広げていくことを目指します。

障がいのある人が演劇によって自分を表現する その実績と効果を検証し一般化していきたい

これまでの取組で、画一化・均一化しないという演劇の特性は、多様な人・障がいのある人に対し、自分らしく自分を表現することにきわめて有効であると感じています。その実績と効果を検証し、一般化していくことは次

世代の共生社会実現の大きな財産になると考えます。また「分断された社会」といわれる現代の抱える課題を解決する一つの手法として、この事業が有効であると考え取り組んでいます。

タブレットの字幕オペレーションシステム導入で あらゆる人に鑑賞を楽しんでもらえるように

従来の手話や OHP の口述筆記では舞台作品の視覚に影響するため、タブレットによる字幕のオペレーションシステムを恒常化したいと考えています。このシステムの導入によって障がいの有無にかかわらず、同じ条件で舞

台鑑賞を楽しんでもらえるようになりました。加齢による難聴にも対応できるようになり、より多くの世代へ舞台鑑賞を楽しんでもらうことが可能となりました。

各福祉現場への派遣では取組の周知不足を実感 今後は啓発活動にも力を入れていく

これまで3年間継続して行ってきたワークショップ、演劇作品づくり、公演、日常的な表現の場づくりは、少しずつ定着しニーズも高まっていると感じます。しかし、各福祉現場に指導者を派遣する事業は、まだ取組を知っ

てもらう段階であることを実感します。興味を示す現場はあっても、実際の事業実施は次年度になる場合がほとんどなので、啓発することに工夫が必要だと感じています。



1. 「広場をつくろう」3回目 前半の発声練習
2. 「広場をつくろう」1回目 ボールを使ったコミュニケーションゲーム
- 3.4. 「ウタとナンタの人助け」松山公演より



事業名

障害がある方に向けての「総合的な表現の場」の創出 ～音楽ワークショップを通して～

団体名

社会福祉法人 明日へ向かって

所在地：福岡県福岡市

URL：https://www.swca.or.jp/

事業概要

障害のある人の地域での社会参加と共生社会の実現を目指して「地域共生フェス 2019」を開催した。当法人のガムランチームや、放課後等デイサービスの和太鼓チームが演奏を披露。神社の権禰直と作曲家による対談、アーティストと既出音楽チームとの共演、公演のために連携した地域の福祉、医療、企業、神社関係者によるシンポジウムを開催。さらには、楽器を用いたワークショップを行い、表現することの喜び、他者とともに音を奏でる楽しみを共有した。

障害のある人に向けた音楽ワークショップを QOL 向上や地域ネットワークづくりのきっかけに

実施内容

福祉・医療から企業、神社など、地域の人々が連携 障害の有無を超えて文化芸術を楽しむイベントを開催

地域の福祉、医療、コミュニティの紐帯となる神社が連携して実行委員を組織し「地域共生フェス 2019」を開催。迫力ある和太鼓演奏を皮切りに、障害のある人たちによるガムラン、青少年たちによる和太鼓の演奏、音楽ワークショップ、地域医療に関する講演、アーティストと障害のある人たちの音楽のコラボレーションなど多彩なプログラムを披露しました。

地域共生フェス 2019

開催日：2019年10月12日

場所：なみきスクエア

出演：Go On (当法人ガムランチーム)、香椎宮雅楽保存会、ブルーリーフ和太鼓ファミリー、TAKEO (即興演奏家)、寺崎充央 (あふりかんじゃんぐる)

来場者数：545名 参加費：無料

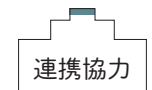


事業の効果

数字譜カードを用いたわかりやすい方法で 楽器演奏や作詞・作曲の機会を提供

5年にわたり当法人で行っているワークショップで演奏する楽器(ガムラン)は、音階の数が5つ。障害のある人や演奏経験のない方でも扱いやすい楽器です。指揮は、1から5のカード(数字譜)を参加者に示して行います。また、1～5の中から音を選んで作曲。シンプルでわか

りやすい方法で、作曲や作詞、合奏の機会を提供しました。楽器は分割可能で卓上や床に置いて演奏できるため、寝たままの体勢や車いすの人でも演奏を楽しむことができました。



障害のある人たちの文化芸術活動を広げるために 地域の現状に沿った活動やネットワーク構築を

現在、障害のある人の文化芸術活動が広がりつつありますが、現実には一部の福祉施設と関係者内にとどまっています。また、音楽などの舞台芸術に関しては、身体を動かすワークショップや楽器合奏、「音を聴く」ことなど、絵画とは別の表現形態や鑑賞方法が存在しており、まだ

まだ未開拓な分野といえます。そこで、音楽などの舞台芸術を通じて、さらに多くの障害のある人たちがもっと身近に芸術文化にふれる機会をもち、生活を充実させるためには、地域の現状に沿った活動やネットワークを構築することが必要だと考え、本事業を企画しました。

音楽を通じた交流で障害のある人への理解を促進 イベントで構築したネットワークを医療や介護にも活かす

障害のある人が積極的に演奏活動や創作活動を行うことで、障害の有無を問わず人と人の交流が促進されること、音楽活動を通して一般の方々の障害のある人や多様性への理解につながっていくことが期待されます。また、社会福祉法人や NPO 法人、病院や高齢者施設の関係者が、

音楽ワークショップを通じて交流することにより、文化芸術分野のノウハウが共有されます。それぞれの専門性を活かした新たなネットワークが生まれ、医療や介護、就労活動、緊急対応など相互に連携、協力できる関係が構築されるきっかけになると考えています。

連携の場となる実行委員会をつくり より多くの人に参加できる継続的な活動にしたい

本事業によって、異なる領域で活動している地域の福祉、医療、企業、神社などが、それぞれのできることや強みを生かして支え合うことが、豊かな地域社会づくりにつながると認識することができました。今後、継続的に事業を行っていくための具体的な取組を考案するため、各

関係機関が参加して実行委員会を発足させたり、活動や発表の場をつくったりすることが必要と考えています。また、活動内容は、音楽にとどまらず、文化芸術全般を取り入れ、間口を広げ、より多くの人に参加できる取組としていく予定です。



1. 即興演奏家 TAKEO とのコラボレーションによるパーカッション 2. 香椎宮雅楽保存会と「明日へ向かって」のガムランチーム Go On による合奏 3. 福祉、医療、神社、企業、大学の方々に支えられ、545 名のお客様が来場した「地域共生フェス 2019」。出演者全員で記念写真を撮影

事業名

パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業

団体名

一般社団法人 パラカダンス

所在地：福岡県福岡市

URL：<https://www.facebook.com/paracadance/>

事業概要

ダンスを通し全ての人々が社会とつながることを目指し、パーキンソン病（PD）患者にダンスによるリハビリ効果、芸術としてのダンスを紹介する。事業は、定例 PD ダンスレッスン（月1回）、「世界パーキンソン病学会（WPC）」に日本代表として出席、PD ダンスカフェ（年2回のカフェイベント）、PD ハウスワークショップ（週1回）、コミュニティダンス公演「People Art Performance」への出演で構成されている。

パーキンソン病患者にダンスの定例ワークショップ 心身のリハビリと QOL 向上を目指す

実施内容

継続的なダンス活動による リハビリやコミュニケーションなどの効果を検証

体に震えやこわばりなどの運動障害が出る PD の人々には、薬と何らかのアクティビティを両立することが、リハビリにも、また感情表現やコミュニケーションにも効果的です。そのような活動の一つがダンスです。本事業は定期的にダンスワークショップを開催し、福岡大学病院の協力を得て、その心身への効果を検証するものです。定期レッスンやワークショップによって練習を重ねたダンスを、WPC やパフォーマンスイベントで披露。「PD ダンスカフェ」は、PD 患者、その家族や介護者などの交流や意見交換の場ともなっています。

定例 PD ダンスレッスン

開催日：月1回

場所：福岡市内公共施設各所

参加費：無料

講師：マニシア

舞台での発表を目標としたダンスレッスンを開催。毎回10名前後が参加し、「パーフェクトダンス」として活動。

URL：<https://www.facebook.com/danceforpd.japan/>

PD ハウスワークショップ

開催日：週1回

場所：PD ハウス野芥

参加費：無料

パーキンソン病専門の住宅型有料老人ホーム「PD ハウス野芥」の入居者に対しダンスワークショップを行い、医学的検証も実施。

世界パーキンソン病学会（WPC）オープニングセレモニーに出演

開催日：2019年6月4日～7日

場所：京都国際会館

来場者数：2,778名（患者及び介護者1,092名、医療関係者987名、学生/ポスドク179名、付き添い39名、製薬会社や展示関係者356名、その他125名）

※日本の来場者数は1,037名（パーフェクトダンスからの出演者は8名）

参加費：医師・研究者・科学者・製薬会社関係者 \$625、看護師・セラピスト・ソーシャルワーカーなど \$425、パーキンソン病患者ご本人 \$300、患者の介護者（要登録）\$200

PD ダンスカフェ

開催日：2019年7月13日、11月30日

場所：PD ハウス野芥

講師：坪井義夫（福岡大学病院教授）、マニシア

来場者数：延べ110名

参加費：無料

疑問や不安も相談できるカフェタイムを提供。

「People Art Performance」出演

開催日：2020年2月2日

場所：福岡県立ももち文化センター（大ホール）

来場者数：230名

参加費：一般2,000円（当日2,500円）学生1,000円（当日1,500円）障害者手帳をご提示の方1,000円（当日1,500円）未就学児無料

社会包摂に取り組むための普及啓発事業

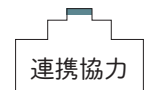
「People Art Performance」に「Perfect Dance」として出演。



発表機会



交流促進



連携協力

事業の効果

病気でも文化芸術を通じて、地域でいきいきと生活できることを発信

日常生活であまり活動しないと、パーキンソン病は進行してしまいます。継続可能なリハビリとしては、日頃のリハビリ教室通いが主流ですが、その内容に満足できず、脱落してしまう方は少なくありません。この事業はパーキンソン病患者によるダンスの活動を継続的に実施。病を得ても文化芸術を通じて地域でいきいきと生活できる

来るたびに涙を流す人、仲間に出会った喜びを語る人

参加者の中には、ダンスに来るたびに涙を流す人や、杖を忘れて帰る人がいます。「病気のおかげで仲間に出会えた」「病気になってからの方が外出の機会が増えた」などの感想も聞かれ、病気になっても得られる幸福感があることがわかります。当法人はほかにも全ての人に開

ダンスのプロや医療従事者、大学病院の教授が協力

PD ダンスには、プロのダンス講師のほか、理学療法士、作業療法士、看護師であるダンサーが参加しているだけでなく、福岡大学病院の坪井教授や PD ハウスの協力も

活動継続のための資金調達最大の課題 今後は全国への普及や、アジアでの指導者育成も検討

一番の課題は、助成金に頼らず活動を継続させるための運営資金の調達です。本年度の取組を通じて、協働できる団体や個人と関係性を構築したいと考えています。また、この活動が患者にとって必要であることが明確になってきたため、全国への普及も考えています。そのことを裏づける事例収集や効果の医学的な検証なども行っ

ことを発信するものです。ダンスによる表現活動は、患者本人の身体的・精神的 QOL の向上に寄与。病気や障害のある人とそうではない人の垣根を超えて、ともに生きる社会をつくる活力を与えます。全国に先駆けて福岡で行う本事業を一つのモデルケースとして国内外に発信し、他の地域にも拡大することを目指しています。

医療従事者など専門家も協力

かれたさまざまな表現の場を提供していますが、文化芸術活動はあらゆる人の QOL を向上させる効果があると考えられます。今後も、本事業を通して、文化芸術活動が QOL 向上に与える影響、症状緩和に効果的であることを検証し、提案していきます。

バリアフリー施設を会場に

得ており、患者に対しては万全の配慮をしています。公共施設でレッスンする場合も、バリアフリー対応の施設を利用するなど、安全性への配慮も十分に行っています。

ており、今後はその成果報告を普及活動に役立てます。また、本事業のダンス講師は米国在住の経験があり、英語も堪能なため、外国人参加者にも十分対応できます。現在、国際的な指導が可能となるライセンス取得の準備も進めており、今後、近隣のアジア諸国を中心に指導者養成を行う可能性も十分にあると思います。



「第5回世界パーキンソン病学会・京都 2019」出演の様子 / 撮影：草本利枝 「PEOPLE ART PERFORMANCE2020」出演の様子 / 撮影：草本利枝

事業名

地域に住む障がい者にやさしいバリアフリーなホールづくり

団体名

公益財団法人 佐世保地域文化事業財団

所在地：長崎県佐世保市

URL：http://www.arkas.or.jp/

事業概要

当法人では、地域に住むさまざまな障害のある人たちが気軽に来館しやすいホールづくりを目指している。そこで、障害者福祉の研究者、福祉施設従事者や車いすユーザーを招聘し、パネルディスカッションを開催。文化芸術を通して障害のある人たちの社会参画について能動的に考える場を設けた。また、多目的ホール「アルカス SASEBO」のバリアフリー対応を調査するため、館内フィールドワークを行い、調査結果を今後の事業内容や改修計画に役立てていく。

障害のある人たちとホールで仕事をする人々がともに考える 「誰もが気軽に来館できるホール」とは

実施内容

障害のある人たちの声と施設の状態を知るために パネルディスカッションとフィールドワークを実施

パネルディスカッションでは、地域の障害のある人たちを取り巻く環境や文化芸術を通して、社会参画の体験など、当事者のリアルな声を聞きました。ホールボランティアやホール職員、市民が「障害」そのものを理解すること、「文化芸術を通じた障害のある人たちの社会参画」について能動的に考える場を提供しました。

館内フィールドワークでは、高島恭子氏（長崎国際大学教授）と学生たちの協力のもと、アルカス SASEBO 内のフィールドワークを実施しました。障害のある人を含む大学生、ホールボランティア、職員、そして市民が、館内のバリアフリー状況についてハード・ソフト両面から調査。後半には、調査結果の発表を行いました。

パネルディスカッション

「地域に住む障がい者にやさしいバリアフリーなホールづくり」

開催日：2019年10月14日

場所：アルカス SASEBO 大会議室

パネリスト：高島恭子（長崎国際大学人間社会学部教授）、
福祉施設従事者、盲導犬ユーザー、
車いすユーザー

参加費：無料

参加者数：27名

アルカス SASEBO のバリアフリー対応を調査

館内フィールドワーク

開催日：2019年10月28日

参加者数：35名

場所：アルカス SASEBO 大・中・イベントホール、共有スペース



アルカス SASEBO

2,000席の大ホール、500席の室内楽専用の中ホール、350席の可変式イベントホールの3つのホールとリハーサル室、練習室、茶室、和室、会議室などからなる複合文化施設。自主事業においては、質の高い舞台芸術などの鑑賞機会の提供を行う「鑑賞事業」と、市民の文化活動を支援する「市民参加型事業」、2種類の目的の異なる事業を行う。また、「市民参加型事業」では、【普及】【育成】【創造】【交流】の4つの目的に即した事業を行っている

事業の効果

アルカス SASEBO の開館 20 周年を迎え、障害のある人たちへの対応の充実を図りたい

令和 2 年度に開館 20 周年を迎えるアルカス SASEBO。年間を通じてさまざまな団体によるイベントが実施され、多くの障害のある人たちやその家族が来場します。しかしながら、ハード・ソフト両面において障害のある

人たちへの対応が充実しているとはいえません。そこで、地域に住むさまざまな障害のある人たちが、気軽に来館しやすいホールづくりを目指して、本事業を実施しました。

障害のある人たちのリアルな声を聞き、職員やボランティアの意識向上に期待

本事業では、障害福祉の研究者と学生たちに協力してもらい、ホール職員、ホールボランティアのほか、広く市民とともにイベントを開催。「文化と障害」に興味をもってもらい、障害のある人たちのリアルな声を聞くことで、自主事業・貸館問わず職員やホールボランティアの意識

を向上させるための取組を行いました。本事業をきっかけに、市民の皆さんにホールボランティアや障害のある人たちの文化芸術活動推進の取組に参画してもらえたらと期待しています。

バリアフリーの改善を継続的に実施し共有 情報発信によって取組を周知する

フィールドワークを実施したことで、会館のバリアフリーについては、現状把握、問題点の洗い出しを行うことができました。今後は、改善案の提示・実行を継続的に実施し、会館従事者全員で共有する必要があると思いました。パネルディスカッションでは「障害のある人たちの文化芸術を通した社会参画」についても議論を展開。

そのなかで、会館がバリアフリーの取組を行っていることが広く知られていないことを実感しました。これからは、会館の広報活動はもちろん、メディア・報道も巻き込んで情報を発信し、まずは「知ってもらうこと」が大切であると感じました。



パネルディスカッションでは、公立文化施設での取組を紹介するとともに、パネリストの 4 名に普段の生活や、そのなかで多くの人に知ってもらいたいこと、またアルカス SASEBO の利用にあたり気になったことなどを聞いた



フィールドワーク・グループワークでは、さまざまな立場、視点で館内を見ることで、職員だけでは気づけない多くの発見・気づきがあった

事業名

あめのうすめのみこと
天鈿女命育成講座

団体名

公益財団法人 宮崎県芸術文化協会

所在地：宮崎県宮崎市

URL：http://miyazakigeibun.jp/

事業概要

令和2年に国文祭・芸文祭宮崎大会を控えるなか、宮崎における社会包摂の実現に向けて、障害のある人の社会参画の手法を文化芸術から探る。障害のある人が自分でつくるダンスワークショップ、言語以外のコミュニケーションを考えるレクチャー、宮崎のまちなかでさまざまな人が集まる拠点の運営、それらをまとめたシンポジウムという4つの活動から構成。これらを通じて、日常における社会包摂、心のバリアフリーを育てることを目指す。

ノンバーバルによる対話と関係づくり そこから生まれた表現と仕事から、社会とかがわかること

実施内容

障害のある人の社会参画をテーマに、ワークショップや拠点運営、シンポジウムなどの活動を展開

拠点設立にあたっては、障害のある人をはじめ、誰でも立ち寄り、使用できるスペースを設立。ここを拠点として本事業のワークショップやレクチャーシリーズなどを行い、ソーシャルインクルージョンの実現を目指しました。また、宮崎のソーシャルインクルージョンについての基調講演とシンポジウムを行い、「天鈿女命育成講座」で行った活動、宮崎県内の活動事例を紹介しました。

「天鈿女命育成講座～NON VERBAL CUE FOR SOCIAL INCLUSION～」

●拠点設立

場所：未来基地（いつかベース）

期間：2019年12月10日～2020年3月16日

●ワークショップ

「ダンスステージをつくるワークショップ」

開催日：2019年12月15日、22日、

2020年1月12日、19日

場所：国際こどもせいねん劇場みやざき

講師：んまつーポス

障害のある人の興味・特性から、ダンサーや振付、照明、音響、舞台美術などステージにかかわる仕事をつくるワークショップ。

●レクチャーシリーズ

「Vol.1 対話と nonverbal cue」

開催日：2020年1月6日

講師：永山智行（劇作家）、田中真実（NPO法人STスポット横浜事務局長）

「Vol.2 表現は壁を超えて」

開催日：2020年1月18日

講師：上田假奈代（詩人）、生駒新一郎（一般社団法人あわいや代表理事）

「Vol.3 障害者が、自分の仕事を作る方法」

開催日：2020年1月23日

講師：里見喜久夫（季刊「コトノネ」発行人）、鈴木一郎太（楸大と小とレフ取締役）

「Vol.4 表現と障害～ナイト・クルージング上映会～」

開催日：2020年1月26・27日

講師：佐々木誠（映画監督）

●シンポジウム

「文化によるソーシャルインクルージョン」

開催日：2020年2月23日

場所：宮崎県市町村共済組合ひまわり荘

パネリスト：播磨靖夫（一般社団法人ひまわりの家理事長）、生駒新一郎（一般社団法人あわいや代表理事）、大塚千枝（厚生労働省 障害者芸術文化活動支援専門官）

司会：山森達也（アーツカウンシルみやざきプログラムオフィサー）



事業の効果

国文祭・芸文祭宮崎大会を前に、文化的機運が高まる 宮崎県がもつ文化の豊かさを再認識したい

これほどまでに社会包摂に対する関心と機運が高まった時代はありません。現在、芸術文化のもつ社会包摂的な役割が注目され、人々の文化に対する意識も変化しています。本事業ではノンバーバル（非言語のコミュニケーション）による対話、関係づくりによって、障害のある

人や高齢者、子どもたちがまちとつながる社会参画を行います。自分の意志を伝え、表現の面白さを体感することで、障害のある人たちがそれぞれの仕事をつくることを目指します。

日常におけるアートの視点、他者への寄り添いも含め、ソーシャルインクルージョンの実現に向けた第一歩に

宮崎県内では、障害者アートの取組や授産製品のブランド化といった取組は行われていますが、社会包摂に向けた芸術活動は多くありません。またアートの定義が狭く、アートプロジェクトやコミュニティアートといった取組も少ないといえます。この事業は芸術表現だけでは

なく、日常の生活におけるアートの視点、他者に寄り添う姿勢といった概念も含んでおり、これからの文化によるソーシャルインクルージョンの実現に向けた第一歩となるものです。

各機関と連携をとり介助・支援の体制を強化 障害のある人、高齢者、子ども…多様な人たちを対象に

障害のある人、高齢者、子どもといった多様な人々をワークショップの対象とします。参加者に合わせた介助・支援が必要なため、各機関と連携をとって運営体制を構築。技術的な面に関してはマニュアルづくりと、工夫しあう心持ちを育てます。それらは令和2年の国文祭・芸

文祭にも有効なものとなるでしょう。心のバリアフリー対応に関しては、かかわり方や接し方を試行錯誤することが本事業の目的であり、ここで得られたものをレガシーとして残していく長期的な取組のスタートとして位置づけています。

文化による社会包摂を過去から未来につなぐ第一歩となった

2020年東京オリンピック・パラリンピック、そして国民文化祭・全国障害者芸術・文化祭 宮崎大会、それらを通じて注目されているのがレガシーの創出です。しかし、レガシーとは継承するものであって、その場でつくるものではなく、命のバトンリレーのようなものです。「天鋳女命育成講座」を通じて明らかになった社会包摂＝ソーシャルインクルージョンとは、個人の思い、それぞれの物語を基盤にしたつながりです。つまり多様な人と出会ったほうが豊かになれるということです。「文化によるソーシャルインクルージョン」とは、現在・過去・未来と続く物語の一つであり、この事業はそのための小さい一歩となりました。そしてそれはこれからも続いていくと確信しています。



事業名

障害者と文化芸術による共生社会の推進事業 「ゆいまーるミュージックプロジェクト」

団体名

一般社団法人 琉球フィルハーモニック

所在地：沖縄県那覇市
URL：http://ryukyuphil.org/

事業概要

音楽や福祉など各分野の専門家が、障害のある人とその家族、関係者が心ゆくまでコンサートを楽しめる環境づくりについて話し合い、その実践の場として「美(ちゆ)らサウンズコンサート」を開催。同時にこの公演は、障害のあるアーティストの活動の場を拡充し、共演者との相互理解及び交流を深めていく場にもなる。公演終了後には冊子を作成してノウハウを全国に広めるなど、文化芸術による共生社会の推進に取り組んでいる。

障害があっても心ゆくまで音楽を楽しめる環境とは？ 専門家・当事者と考え、実践したオーケストラ公演

実施内容

オーケストラが障害のあるプロ音楽家とともに 全ての障害のある人を対象にした公演を実施

一流音楽家とのネットワークや最新の IT 技術によるメディアアートを導入するなど、新しい視点のオーケストラ活動を行っている琉球フィルハーモニックオーケストラ。ここでは障害のある3組のプロ音楽家をゲストに迎え、障害のある人や難病の人が心おきなく生の音楽を楽しめるコンサートを開催しました。事前の会合では音楽家、障害のある人、その家族や支援の専門家らが、車いすやストレッチャー利用者への配慮、公演中の発声や動きなどについて、それぞれの視点から意見を述べあいながら企画を進め、当日は舞台上も観客席もバリアフリーの公演を実現しました。

ゆいまーるミュージックプロジェクト

「美らサウンズコンサート」

開催日：2019年12月8日

場所：与那原町観光交流施設

参加者数：450名 入場料：無料

対象：全ての障害・難病のある方、ご家族・介護の方など
(一般の方も入場可能だが、障害のある人や関係者を優先)



事業の効果

障害があっても、ためらわず、遠慮せず心ゆくまで音楽を楽しめる場をつくりたい

障害のある人の中には大声を出したり飛び跳ねたりすることなどで感動や喜びを表現する人がいますが、そのような方や介護者の多くはコンサートに出かけるのをためらいがちになり、コンサートを生で鑑賞する機会が極端

に少ないという現状があります。しかし、繊細で迫力あるオーケストラの奏でる音楽を聴いて、感動したり豊かな気持ちになったりするのは、障害のない人だけの特権ではありません。そこで、どのような障害があっても、



障害のある人も家族も心ゆくまで音楽を楽しめる環境をつくろうと、この事業を企画しました。

芸術鑑賞の機会が増えるだけでなく 相互理解や交流が深まる効果

出演者も鑑賞者も分け隔てのないコンサートを開催することを通して、下記の効果が期待できます。

- ・ 障害のある人や関係者の芸術鑑賞機会の増加。
- ・ 障害のあるアーティストが活動できる場の拡充。
- ・ 音楽家同士の相互理解と交流の深化。

- ・ ジュニアオーケストラの参加により、福祉に理解のある将来の音楽家を育成。
- ・ バリアフリー公演実施のノウハウの蓄積。

選曲、プログラムから会場づくりまで あらゆる点でバリアフリー化を実現

具体的なバリアフリー化の取組として、音楽療法士プロデュースによる選曲・曲順、色覚障害のある人にもわかりやすい色使い、土足で入場できる会場（入口に防塵・吸水マットを設置）、手話通訳、UDトークの活用、ゾーニングの工夫（聴覚障害のある人のためのエリア、自由

な姿勢で鑑賞できるフリースペース、周りの目を気にせず鑑賞できるスペースなど）、補助犬の入場可、演奏中の出入りや歓声・拍手の可、障害のある人の反応について事前に演奏者へ周知などを行いました。

今回得られたノウハウを他地域でも活用できるようにしたい

ゆいまーるミュージックプロジェクトのメンバーは琉球フィルと10～20年来の知り合いであり、その強いネットワークが今回の成功の大きな要因と思われます。そのようなネットワークのない他の地域で他団体が活動する場合に、今回得られたノウハウを活用できるようにする取組も必要だと思います。今後、地域の福祉関係者やオーケストラなど、さまざまな立場の方が「美らサウンズコ

ンサート」を主催できるように冊子「美らサウンズコンサート GUIDE BOOK」を、現在作成中です。また、オーケストラの公演を、身体障害と精神障害など、障害の種類によって内容を分けて開催することを検討するなど、オーケストラの楽しみ方の細分化したニーズにも応えられる体制を整える必要があると思います。



コンサートを終えて、みんなで記念撮影



ゆいまーるミュージックプロジェクト会議の様子

事業名

音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証

団体名

一般社団法人 楽友協会おきなわ

所在地：沖縄県那覇市

URL：https://www.facebook.com/pages/category/Musician/一般社団法人-楽友協会おきなわ-132098907145560/

事業概要

子どもの居場所 kukulu (ククル) に通う不登校児童・生徒とともに、オリジナルの音楽劇を制作。プロジェクトも2年目に入り、前年度の発表会の成功体験から、今年は創作活動にも重きを置いたプロジェクトとなった。ミュージカル映画「グレイテスト・ショーマン」から、社会的に排除された者たちが「それでも自分を愛し、自分に自信をもち堂々とありのままに生きよう」と歌う挿入歌「This is me」を核として、子どもたちの経験を織り交ぜながら台本を作成し、歌い、踊り、演奏した。また舞台上立つことが苦手な子どもたちには、舞台裏の仕事や印刷物、広報関係などの役割をもってかかわってもらい、ともに舞台をつくり上げゴールに向かい、全員で達成感を味わった。

不登校の子どもたちとオリジナルの音楽劇を創作 自己肯定感を高め、前を向いて歩いていける心を育む

実施内容

昨年の経験から子どもたちに創作意欲が芽生え 本年度はオリジナル音楽劇に挑戦

作曲家の鶴見幸代氏のファシリテートにより、不登校の子どもたちと楽友協会おきなわの音楽家たちがワークショップを通して交流。昨年、初の音楽劇を発表後、子どもたちに「したい!」「やりたい!」という思いが芽生えました。そして、物語をつくる、楽器演奏、歌、踊り、あるいは舞台を支えるなど、子どもたちはそれぞれ得意なことを始めるようになりました。今年度も、ときどき引きこもりにもなる子どもたちと音楽家により音楽劇を制作。2年目とあってほどよい関係性が築かれつつあるなか、新しい出会いがあり、即興演奏にも初挑戦。音楽劇のシナリオは子どもたちによるオリジナルです。

ゆかいなおんがく家と、ときどきひきこもり 2020
音楽劇「this is Us!! ~音楽劇なんて自信ないけど、
愛さえあれば関係ないよねっ!!」

開催日：2020年2月11日

場所：那覇市ぶんかテンプス館 テンプスホール

来場者：約80名

入場料：一般1,000円 高校生以下無料

出演：kukulu、うるま kukulu、b&g からふる田場の子どもたちとスタッフ、鶴見幸代（作曲家）、楽友協会おきなわ

2020. 2.11 火・祝 17:00 ロビ-開場 / 18:00 開演 [入場料] 1,000円 (高校生以下無料)
場所：那覇市ぶんかテンプス館4階 テンプスホール

プログラム：音楽劇「this is Us!! ~音楽劇なんて自信ないけど、愛さえあれば関係ないよねっ!!」
劇中歌：誰でもコンパクター（即興演奏）/ 魔王（オリジナル歌謡）
見守り：kukulu 応援（オリジナル楽曲）/ パパリカ / 備

立役者：kukulu、うるま kukulu、b & g からふる田場の子どもたちとスタッフ
演出：幸代（作曲家）と楽友協会おきなわ、場内音楽家のみなさん

楽友協会おきなわ 098-3783-2814 (FAX) | info@okinawa.org
NPO法人ちゅらゆい 098-943-8362 | info@churayui.org

ユープスよれ、演劇とつながる空間、サポートワーカー



1.衣装やメイクなどの仕事も子どもたちが担当した



事業の効果

舞台上立つのが苦手な子どもは広報や舞台美術で参加

本事業では、不登校児童生徒との音楽ワークショップを通して、発表会（舞台発表）をつくり上げます。舞台上立つことが苦手な子どもたちは、それぞれの長所や興味を活かし、チラシなど印刷物の製作や舞台美術、裏方な

音楽を通じて、不登校の子どもへの自己肯定感や他者理解、コミュニケーション能力を高めたい

沖縄県の不登校率は全国平均を上回っており、特に高校における不登校者数の増加は顕著です。

本事業は音楽体験プログラムを通じて不登校児童生徒の自己肯定感を高めること、さまざまな経験をもつ人と交

不登校の子どもへの社会的理解が進み、音楽家の社会参画への意識が高まる効果も期待

本事業により以下のような効果が期待されます。

- ①音楽プログラムを通して、不登校児童生徒の他者理解、自己肯定感が深まり、コミュニケーション能力の向上がみられる。
- ②音楽プログラムやキャリア形成プログラムを通じた地域連携のなかで、不登校児童生徒に対して地域理解、

慢性的な人材不足が課題 一緒に活動してくれる音楽家を求む

課題は、慢性的に人手や人材が不足していること。そのため、社会包摂の活動に興味があり、適性のありそうな音楽家を探していきたいと考えています。とくに若い音楽家を巻き込みながら、私たちが培ったノウハウを共有し人材を増やしていきたい。それによって将来的には、沖縄全域でニーズのある市町村や事業所と連携をとり、

みんなで舞台をつくり上げる経験を

ど、適性に応じた発表会へのかかわりを提案しました。全ての子どもたちに、寄り添い、後押しをすることで、みんなで一緒に舞台をつくり上げる経験をしてもらうことができました。

流し、社会的な視野を広げることを目的としています。また、音楽活動に欠かせない「傾聴」を通じて、他者理解、コミュニケーション能力の向上につなげ、子どもたちの社会的自立の一助としたいとも考えています。

社会的理解が深まる。

- ③ kukulu と当法人の取組がメディアで発信されることにより、県内の不登校児童生徒の存在が可視化され、kukulu 以外の不登校児童生徒が共感を覚える。
- ④本事業を通して、音楽家の社会参画への意識が高まる。

事業の安定的な継続につなげたいと考えています。子どもたちだけではなく、この分野に関心のある方々にワークショップを体験してもらい、私たちの活動に興味をもってもらう。それにより一人でも多くの音楽家に参加してもらうことが、事業を継続していくためには重要であると思います。



2. 役者紹介では会場から大きな拍手が 3. アンコールではオリジナルソング「kukulu のうた」を披露 4. 力をあわせてイベントをつくり上げたメンバーで記念撮影

事業名

第13回^{アネラ}愛音楽音楽祭

～愛音楽(アネラ)アジマーフェスタ～

団体名

特定非営利活動法人 サポートセンターケントミ

所在地：沖縄県沖縄市

URL：<https://anerahousi2.wixsite.com/kentomi>

事業概要

「沖縄発！ 障がい者社会参加ゆいまーる音楽祭」は、障害のある人たちによる障害のある人たちのための音楽祭。会場の設営から運営、出演まで障害のある人たちが障害のない人と一緒につくりあげる。ハンディキャップがあっても前向きに、ひたむきに頑張る姿を見て、より多くの人がたくさん応援して、感動することで差別のない社会づくりに寄与し、誰もが住みやすいまちづくりを推進する。

会場の設営、運営、出演まで 障害のある人と障害のない人が一緒につくる音楽祭

実施内容

多くの障害のある人たちが音楽を発表 彼らを支える人々と感動と喜びを分かちあう

多くの障害のある人が音楽を通し社会に参加、発表することで感動と喜びを共有する音楽祭です。単に音楽を競うのではなく、ハンディキャップがありながらも自分のできることで演奏に参加し、それを支えるたくさんの人々と感動と喜びを分かちあい、生きる楽しさを伝えることができました。

第13回愛音楽(アネラ)音楽祭

～愛音楽(アネラ)アジマーフェスタ～

開催日：2020年2月8日

場所：ミュージックタウン音市場

参加費：2,000円 障害のある人

1,000円(障害のある人+介助者1名 2,000円)

入場者数：420名

スペシャルゲスト：イクマあきら、玉城千春(Kiroro)

友情出演：平田大

※本イベントは、第17回ゴールドコンサートの予選大会 in 沖縄を兼ねている。

よるミニ基調講演、リレートークセッションなどを行った。また、参加者は、クラフト締め太鼓づくりやサイボーグ型ロボット HAL® を体験した。



連携企画

イチャリパロボットじんぶん教室

場所：ミュージックタウンエイサー会館内セミナールーム

登壇者：若松浩二(株式会社サイバーダイン)

パネリスト：我如古盛健、谷口雅彦、若松浩二

司会：藤山勇一

内容：神経難病に対するロボット神経工学治療の現状を周知するためのシンポジウムを開催。身体機能を改善・補助・拡張・再生することができる、世界初の装着型サイボーグ型ロボット HAL® の開発者に



1. 出演者が舞台上に勢揃いした、華やかなフィナーレ

事業の効果

障害のある人と障害のない人のバンド活動から 音楽活動が自信につながると実感し誕生したイベント

当法人では、障害のある人と障害のない人で結成した「ケントミファミリー」というバンドで、県内だけでなく、日本各地やハワイ、カンボジアなどの介護施設、障害者支援施設などを訪問し、沖縄音楽を中心としたライブ活動を行っています。そのなかで、障害があっても自信をもって社会に出ていけば認められ、差別的な感情がなくなることを実感してきました。障害のある人たちが、

安心して鑑賞できるバリアフリー対応の会場 手話通訳や舞台画面でわかりやすく楽しめる工夫を

会場内の段差の解消、オストメイト用トイレの設置などバリアフリー対応の会場にて行いました。会場には手話通訳を3名設置し、舞台袖で観客向けに手話通訳を行いました。舞台上には舞台画面を設置し、歌詞や司会と出

音楽を通じた活動を行うことで自信が付き、就労など社会参加の意欲が湧き上がります。その感動をたくさんの障害のある人たちと分かちあうために誕生したのが今年13回目を迎えるこの音楽祭です。本イベントを通して障害のある人、障害のない人などと隔てるものがない、誰もが生きやすい社会づくりを推進していきます。

演者のやり取りなどを映し出しました。また、エントランスでもスムーズな誘導を行えるよう1名の手話通訳を配置しました。

舞台経験が社会参加への意欲につながり 観客には障害者支援の輪の広がりが

障害のある人が大勢の観客の前で音楽を披露することにより、前向きな自信をもち、社会参加への意欲が出るのが期待できます。また、観客には、障害のある人たちのひたむきな姿勢を見ることで、障害者支援の輪の広がりや差別のない社会づくりの促進に寄与できると考えています。さらには、関係者同士の連携が強化されることも期待できます。



2. 沖縄らしさを演出したバルーンアートコーナー 3. 手作り太鼓体験コーナーも大人気 4. 障害のある人たちが表現を発表することで、感動と喜びをシェアできた

令和元年度
障害者による文化芸術活動推進事業 事例集

発行日 令和2年3月

発行 文化庁地域文化創生本部

〒605-8505

京都府京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町43-3

編集協力 株式会社文化科学研究所
